

人口減少時代に 価値と豊かさ



Report.6

求められる

「高知における
「ないものねだり」から
「あるもの探し」へ」

連続シンポジウム

「少子化の流れに抗して」

2016年9月24日[土]13:00~

高新文化ホール7階

主催 公益社団法人 高知県自治研究センター



講師

草郷孝好氏 関西大学社会学部教授

目 次

1. 開会挨拶	2
高知県自治研究センター代表理事 筒井 早智子	
2. 基調講演	4
人口減少時代の持続する地域社会創り〈発想転換による地域社会の活力醸成〉	
講師 草郷 孝好 氏（関西大学社会学部教授）	
3. パネルディスカッション	37
パネラー	
草郷 孝好 氏（関西大学社会学部教授）	
川村 幸司 氏（れいほく田舎暮らしネットワーク事務局長）	
吉澤 文治郎 氏（土佐経済同友会代表幹事）	
コーディネーター	
東森 歩 氏	
（ファン度レイジング・マーケティング代表、自治研究センター理事）	
4. 閉会挨拶	

1 開会挨拶

連続シンポジウム「少子化の流れに抗して」

第6回 人口減少時代に求められる『価値』と『豊かさ』 ～高知における「ないものねだり」から「あるもの探し」へ～

高知県自治研究センター代表理事 筒井 早智子

皆さん、こんにちは。今日は、お暑い中を土曜日のお忙しい時にお集まりいただきましてありがとうございます。私は自治研究センターの理事長を務めております筒井と申します。どうぞよろしく願いいたします。

少子化問題が深刻されておりますが、その中で、日本創成会議の一昨年発表になりました。いわゆる増田レポート、消滅の可能性がある自治体の公表が大変衝撃を与えたところがございます。私ども公益社団法人高知県自治研究センターでは、市町村消滅の最大の原因は高齢化ではなく少子化であるという考えのもとに、高知県、市町村が重点施策として推進しております少子化対策にスポットを当てまして、連続シンポジウム「少子化の流れに抗して」を企画し開催してまいりました。

今回は第6回になります。

昨年2月に開催しました第1回は、増田レポートの検証と逆の流れである「田園回帰」の全国的な状況。第2回では、移住促進の先進地であります島根県から、その状況や支援対策、手法を学んでまいりました。

第3回は、都市部から地方へと移住している若者が増加しているという、そういう現象の背景にある社会経済構造の変化と、経済的な豊かさよりも別の価値を見出して、地方に向かおうとする若者の価値観の転換などについて学びました。

第4回は、島根県の離島海士町の島前高校で生徒数が激減し、存続が危ぶまれたことを契機に取り組みました学校教育の魅力化によって、生徒に地域のよさを学び感じさせることで地域外への若者の流出を減少させたという実践と、高知県内の高校における取り組みについて学びました。

第5回は、住民が主人公になって、誰もが住みたいと思い、住んでよかったと実感できる地域社会づくりに向けて、住民とともにつくる地方創生のあり方や手法について学んできました。

第6回の今回は、人口減少時代に求められる「価値」と「豊かさ」をテーマに、人口減少期を迎えた成熟社会における価値と豊かさをはかるものさしはようになっていくかなどの観点から、住民の幸せづくりに必要な指標のあり方や視点などについて学ぶこととしております。

本日の第1部の基調講演は、関西大学社会学部草郷孝好教授からご講演をいただきます。第2部のパネルディスカッションは、パネラーの一人として草郷教授にもご登壇いただきます。地元のパネラーとしまし

て、れいほく田舎暮らしネットワーク事務局長の川村幸司氏、土佐経済同友会代表幹事の吉澤文治郎氏にお願いいたしました。コーディネーターは、当センターの理事であり、ファン度レイジング・マーケティング代表の東森歩氏です。

第7回は12月3日に開催を予定しております。この7回をもちまして、この連続シンポジウムは終了いたします。次回もご参加いただきますようお願いいたします。当センターでは、この連続して行いますシンポジウムの結果を今後の活動に活かしてまいりたいと考えております。

本日は長時間に及びますが、どうぞよろしくをお願いいたします。

司会

それでは、第1部の基調講演に入っていきたいと思いますが、その前に講師のご紹介をさせていただきます。

講師の草郷教授は、愛知県のご出身で、1986年に東京大学の経済学部を卒業され、その後、1992年にスタンフォード大学大学院の修士課程、1996年にはウィスコンシン大学マディソン校大学院の博士課程を修了されています。そして、明治学院大学、北海道大学、大阪大学を経まして、2009年より関西大学のほうで教授を務められていらっしゃるということです。

本日は、市民と行政の協働の構築ということについて、具体的な事例を交えながらお話いただけるとお聞きしております。

それでは、基調講演を始めていきたいと思います。草郷教授、よろしく申し上げます。

2 基調講演

人口減少時代の持続する地域社会創り 〈発想転換による地域社会の活力醸成〉

関西大学社会学部教授 草郷 孝好 氏



皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました草郷孝好と申します。実は高知県の高知市は初めてでありまして、最初に印象を申し上げますけれども、私、今朝飛行機で高知入りしました。そして海と山、両方のところに滑走路がずっと広がってました。インドネシアの南スラウェシ州で私が昔調査に入ったときと同じようなすごくいい印象を受けました。

まず、私のやってきたことのお話をさせていただ

いて、それから、今日の本題である人口減少時代を迎えているという中で、どうしたら持続する地域社会をつくれるかということで、できるだけ日本の置かれている状況だけではなくて、むしろ世界の中で今どういう動きがあるのかということを見ながら、その中で、では日本を、社会を構築していくのか。新しい、そして長く続いていく社会を構築できるのだろうかということについて、私が少しずつかわってきた三つの事例を紹介しながら、皆様に考えていただけるような材料にしたいと思っています。

先ほど紹介の中で、触れていただきましたが、私は愛知県岡崎市というところの出身でして、かれこれ大阪で10年以上、生活をしています。関西弁落第と勝手に自分で勝手に白旗を上げてます。今朝も土佐弁も落第かもしれないと思いましたけど、「かわるにかわらん」、そういう言葉が全く分からないというようなことです。

二つ目はもう紹介していただきましたので、人よりももちろん大学、学校に長くいすぎだと思っています。

三つ目が、民間、法人、国際公務員経験ありということで、私の大学のときの友だちとかには転職しすぎと言われてました。民間でも働いた経験がありますし、国際公務員、国連等にもおりました。それから、大学教育は、日本の四つの大学で、ちょっとユニークだなと個人的に思ってるのは、すべて学部が違うんです。それぞれの学部を学び歩いたと言えば聞こえいいんですけど、全部追い出されたということです。

人口減少時代の持続する地域社会創り 〈発想転換による地域社会の活力醸成〉

草郷 孝好

2016年9月24日

公益社団法人 高知県自治研究センター
「少子化の流れに抗して」 第6回

自己紹介～専門と主な活動～

- 愛知県岡崎市出身（関西弁落第）
- 経済学（学士）、開発経済学（修士）、開発学（博士）
- 民間、法人、国際公務員経験あり
- 大学教育（明学国際→北大経済→阪大人科→関大社会）
～研究テーマ：より善い生き方を育む社会創り
- 実践的研究（アクション・リサーチ）の展開
 - 市民目線の生活実感調査や指標
 - 市民主導の地域創り手法（地元学、地域ドックなど）
 - 住民主体の地域コミュニティ創りの支援
→ 福井、新潟、兵庫、愛知、ブータン、ネパールなど

人口減少を都道府県でみる

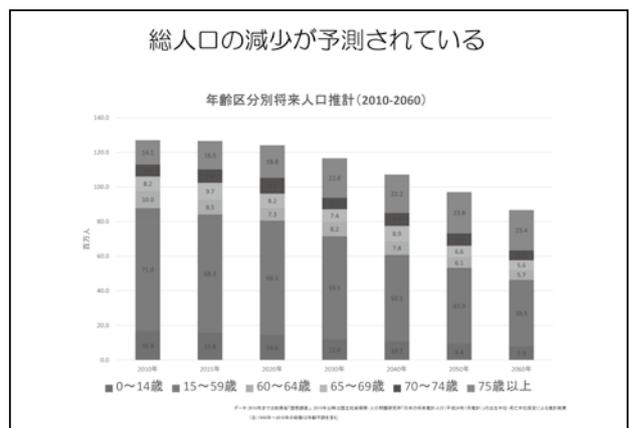
私の研究テーマは、「より善い生き方を育む社会創り」です。ここはやはり漢字を使っているところは覚えていてほしいなと思います。

今、私が一生懸命時間を費やしてるのがこれです。アクション・リサーチ（実践的研究）と書いていますが、ちょっとニュアンスが違うんですが、どんなことをやってるかを掲げております。一つ目は「市民目線の生活実感調査や指標」、Gross Kochi Happiness ですね、高知県民の幸福の指標ということで、指標という言葉が使われてますが、ストレートWということになります。市民主導の地域創りの手法を自分でも展開はしますが、非常にこれはユニークだし、皆さんが活用しがいがあるなというような手法も探しています。それから三つ目が、それらのものを重視しながらいろんな地域でコミュニティ創りの支援にかかわる。かわり方はさまざまです。非常に深くかかわるケースもあれば、どちらかという少し観察させていただくという程度のかかわり方もあります。

さて、そういうバックグラウンドを持つ者ですけれども、まず最初に皆さんと共有しておきたいのは、やはり今何が起きているのかということだと思ってます。先ほど、このシンポジウムの第1回から今回までどういうテーマだったのかということをお話していただきました。それを伺っていたら、もう十分に最初の現状についての認識というのは十分に語り尽くされているかなと思いました。

その中で、まず最初に確認しておきたいのは、このグラフだろうと思ってます。総人口の減少が予測

をされていると。先ほどの増田レポートと同じように、将来は人口が減っていったる。その中でもいわゆる急速に減っていく。そして、そこでの生活の営みがなくなってしまうというその地域がこんなにもありますよと、そのレポートですよ。あれ確かに衝撃なんですけれども、それが全体としてどのような推移をしてるのかも大事ですし、それから年齢構成上もそれを確認していく必要があると。ご多分に漏れず、国勢調査とそれから国立社会保障・人口問題研究所の推計です。これ凄まじい減少だということは我々も自覚してるわけですよ。

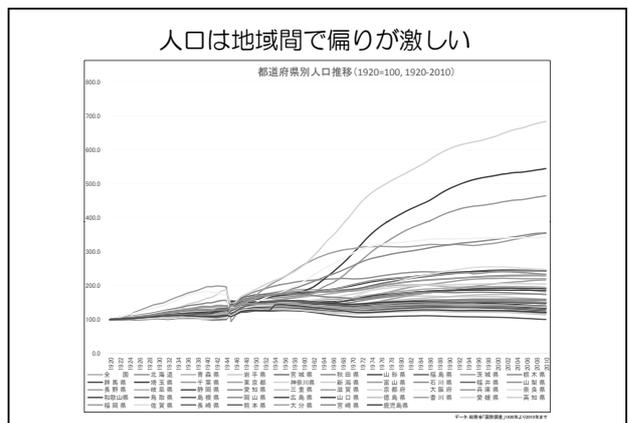


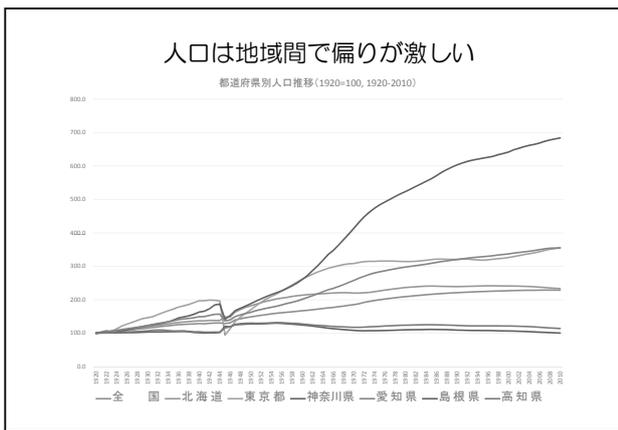
僕が目じりたいのは、先ほど増田レポートでも言われたことを、例えば都道府県にしてみたらどうなんだろう。第1回国勢調査は日本では1920年に開始されてるんです。明治時代に国勢調査をしなければならぬという議論があつて、そこからなかなか実施に向かえなかつたんです。戦争がありましたし、そこで実際、調査をするまでに手間取ったわけで、それで初回が1920年、もう大正に入ってからでした。

それを起点にして、ではその当時の人口を100

はじめに

- 人口減少、少子高齢化は、成熟経済の帰結？
 - 全国の動きと地域間の偏り
- 持続可能な開発を目指す国際社会の動き
 - SDGs策定
 - パリ協定 (COP21)





に置き換えて、その後、都道府県別に人口がどう動いたかというのを表したものです。すべての都道府県が出ていますので、一体何なんだろうと。幼稚園児がクレヨンで描いたような状態ですけど、でも特色はしっかり浮かび上がってますよね。もちろんこのあたりは今でいう団塊の世代です。それから、このほとんど平行状態に近い県、どこというのは、やっぱりその中でも高知県おられたんです。

ではどこかということで、ちょっと抽出をしたのが次の記載です。全国はこのブルーです。ですから、全国を見ている限り、日本の人口はずっとこうおよそ90年間の間で増え続けてきました。この中で、もちろんほかの線そうですね。1945年でかくっと落ちる。このグリーンが東京都なんです。その横の神奈川県は、東京都が吸収できないものをど

んどん吸収していきますので、こんなに増えていきました。こちらの赤色が実は皆さんお住まいの高知県です。それから、その動きと大変よく似てるのが、こちらでも2回ほどですか、お話しされたということですけど、島根県が入っております。

これがどういうことを意味するのかということですけど、人口は地域間で偏りが激しいと言ってしまうえば簡単なんですけれども、やはりそこで私たちが絶対忘れてはいけないのは、これをこのように動かしてきている経済であり社会システムがあります。そういうシステムの中で個々の地域がやはり持続する、あるいは存続していけるか。それがどういう方向であるかということです。

問題は、この先これがこのままどんどん増えていくのか、このままずっと横で行くのか、あるいはちょっと下がるのか、あるいは上がるのかというのが、私たちが今注目している問題です。

実はもう一つ、同時に私がいつも気にしていることがあります。国際社会がどんな問題を抱えているのかということです。先ほどちょっと触れた経済、社会とか、経済指数とか社会指数とか言ってますけど、これはすべて実は私たちが付き合っているほかの国々との例えば貿易であったり、人的な交流であったりというのにすべてかかわってるんですよね。ですから、海外でどんな動きがあるかというこ

はじめに

- 人口減少、少子高齢化は、成熟経済の帰結？
 - 全国の動きと地域間の偏り
- 持続可能な開発を目指す国際社会の動き
 - SDGs策定
 - パリ協定（COP21）

とに対して無関心でいてはられないということを考えていただけたらいいかなと思っています。

これ、持続的な開発目標というんですけれども、この言葉、新聞でもニュースでもあまり報道されることないですけど、ちょっと耳にしたことがあるという方おられますか。あまり知られてないです。これ国連がやっていることなんです。国連という言葉は皆さんご存知なんですけれども、一体何をやってるのかと言われるとなかなか具体的に答えられる人は実は少ない。これもその一つなわけです。

国連が取り組んでいる 17 分野の目標



これは、国連が去年、一昨年ぐらいから一生懸命取り組んでいる指標づくりです。持続可能な開発目標と日本語訳されてますが、さすが国連と言いたところでは。17の目標すごいですよね。この17分野って一体何なのかということは、次のスライドで紹介させてもらっています。

重要そうな指標だけ読んでおきます。「貧困をなくそう」1番です。国連のやってるさまざまな活動

持続可能な開発目標 (SDGs) の17分野

- 目標1:あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ
- 目標2:飢餓に終止符を打ち、食料の安定確保と栄養状態の改善を達成するとともに、持続可能な農業を推進する
- 目標3:あらゆる年齢のすべての人の健康的な生活を確保し、福祉を推進する
- 目標4:すべての人に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する
- 目標5:ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る
- 目標6:すべての人に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する
- 目標7:すべての人に手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する
- 目標8:すべての人のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産の完全雇用およびディーセント・ワーク（働きがいのある人間らしい仕事）を推進する
- 目標9:強靱なインフラを構築し、包摂的に持続可能な産業化を推進するとともに、技術革新の拡大を図る
- 目標10:国内および国際間の格差を是正する
- 目標11:都市と人間の居住地を包摂的、安全、強靱かつ持続可能にする
- 目標12:持続可能な消費と生産のパターンを確保する
- 目標13:気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る
- 目標14:海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する
- 目標15:陸上生態系の保護、回復および持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対応、土地劣化の防止および逆転、ならびに生物多様性損失の防止を図る
- 目標16:持続可能な開発に向けて平和で包摂的な社会を推進し、すべての人に司法へのアクセスを提供するとともに、あらゆるレベルにおいて効果的で責任ある包摂的な制度を構築する
- 目標17:持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

の一連の活動の中でどんな活動をしなければならないかといったときに、一番最初に上がるのは貧困問題ですね。それから「飢餓をゼロにしよう」、おいしそうなご飯マークです。そういうことです。

健康それから教育、ジェンダーというんですが、実は大人の方、この持続的な開発って、持続的な社会ってどんなものだろうということを特徴づける目標があるわけです。それがいわゆる環境であったり、あるいは健康な生活をするために必要なものつてきれいな水、そういうものを具体的に書きます。あとは働きがい、それから経済成長も遂げよう。それからクリーンエネルギー、これも最近登場したもので、新しい指標である。それから不平等をなくそう。これもこれまで国連が取り組んできた指標の中では、ストレートに不平等ができたという意味では新鮮なものです。

11番がおそらく今日の話題にもつながるだろうと思ってるんですけども、「住み続けられるまちづくりを」どうするのか。最後のところが、海を守ろうとかいわゆる環境保護をしようということで、最後に「パートナーシップで目標を達成しよう」。これが実は国際協力、国際協調をしていこうということと同時に、実はこのパートナーシップのところはとても重いんです。どういうことかということ、国連の加盟国、日本も入ってます。国連は全員で努力してこういう目標を掲げて、それぞれの指標をつくってます。高知の指標もつくられてるのと同じだと思います。その指標を活用しながらこういう目標を達成しよう。そういう取り組みをしています。細かいので読んだりしませんけれども、一応ご参考までにこういう目標を掲げています。

「持続的」の持つ意味

これがなぜ大事なのかというと、実は「持続的だ」という言葉の意味だと思います。平たく言えば、自分たちが住んで生活している地域、村が果たして例えば100年後、どういう形で存在してるかということにかかわります。さらに持続性の観点で言えば、私たちが直面しているのはこの気候変動の問題です。気候変動っていうとそれを Climate change と英語ではいうんですけども、さまざまな異常気象も含まれますし、僕が一番気にしているのは災害です。災害頻発です。これの理由の多くが気候変動であるというふうに、そうであろうというところで科学技術者がさまざまな研究をしています。

私は社会学者なので、災害が起きてしまった、ではどうする、再生できるのか、復興できるのかっていうことですね。日本は間違いなくその常でいったら、いわゆる地域を再生するための努力をしてきたり、あるいはそういう側面に立たされてきたという意味では、間違いなく再生志向の地域です。ということは、日本もこの協定と中身についてかなり大きな影響を持っている出席委員であると。

パリ協定

(COP21: 第21回国連気候変動枠組条約締約国会議)

・パリ協定の合意目標

世界全体の平均気温の上昇を工業化以前よりも摂氏二度高い水準を十分に下回るものに抑えること並びに世界全体の平均気温の上昇を工業化以前よりも摂氏一・五度高い水準までのものに制限するための努力を、この努力が気候変動のリスク及び影響を著しく減少させることとなるものであることを認識しつつ、継続すること。



持続する低炭素未来社会の構築を目指す
a sustainable low carbon future

一応合意目標をここに紹介させていただいているんですけども、結構野心的な目標です。というのは、世界全体の平均気温の上昇を工業化以前よりも2度高い水準までにして、できるだけ不断の努力で1.5度の高い水準までに制限しようねということを協定で合意したんですね、去年12月。結局、これってどういうことかということなんですけど、持続する低炭素未来社会の構築を目指そうという言葉で書いてます。

はじめに

- ・人口減少、少子高齢化は、成熟経済の帰結？
 - ・全国の動きと地域間の偏り
- ・持続可能な開発を目指す国際社会の動き
 - ・SDGs策定
 - ・パリ協定 (COP21)

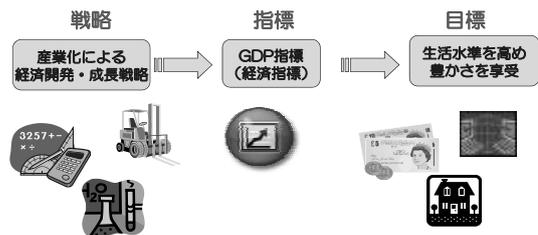
➡ 人口減少、地域偏在の中で、持続する地域社会発展を実現していくというチャレンジ

こういう地域をつくっていくために、私たちが今置かれてる人口が減る中、それから少子高齢化がどんどん進んでいく中で、では日本の中で例えば地域間の偏りをなくせば、それで十分なのか。あるいは地域間の課題とともに新しい生活のスタイルが、実はこの世界で目指そうとしている動きにもつながっていくようなものであるべきか。これは議論の余地はあると思いますけども、少なくとも私はその両方をきちんと捉えて「地域創り」というものに向かっていかなきゃいけないだろうと思っています。これはある意味私の課題になっています、もしかしたらバイアスかもしれません。

経済成長における高等教育

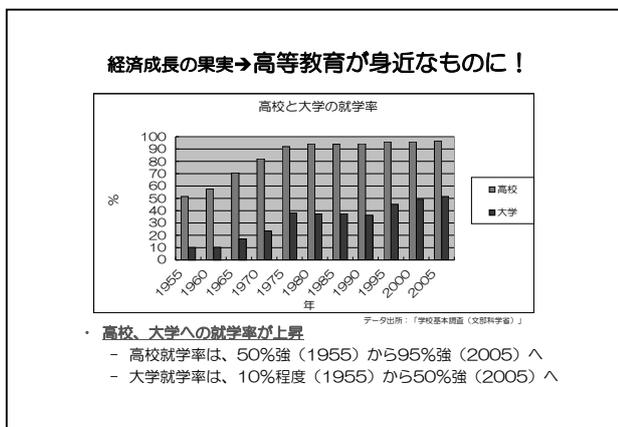
今日は、そういう人口減少、地域偏在の中で、持続する地域社会発展を実現していくというチャレンジがあるんだけど、ではそれって実際どういうことなんだろうかということをもうちょっと根本につながるんじゃないかなと私が思ってきたことの話を進めていきたいと思っています。

従来型の近代化モデル (産業育成・経済成長・科学技術)



これは、実は従来型の近代化モデルということで、ここまで簡略化すると、多くの経済学のいわゆる専門家の方々は、そこまでラフにしたらいけないよと怒られると思うんですが、でも、この柱を捉えたいと思って、私はこの表をつくって使ってきました。要するに、私たちが暮らしている日本の近代化ですよ、明治維新後。今日は富国強兵という言葉は言いません。強兵というところは当然今はないですが、富国ということ。それは生活水準を高めて、豊かさを享受する。ですから、とにかく食べられるだけの基礎はつくろうねということとってください。

産業化がその核であるということです。それが経済成長の指標として十分に活用できると。皆さんの中にはGDPがどういうものであるのかということに詳しい方もおられると思うので、簡単に言えば、経済的な生産力を高めていくということに過ぎないんですけど、要するに経済の生産力、いわゆる私たちが受け取れる経済活動から生み出されるいわゆるミカンとか柿の大きさが大きくなるということですけど。

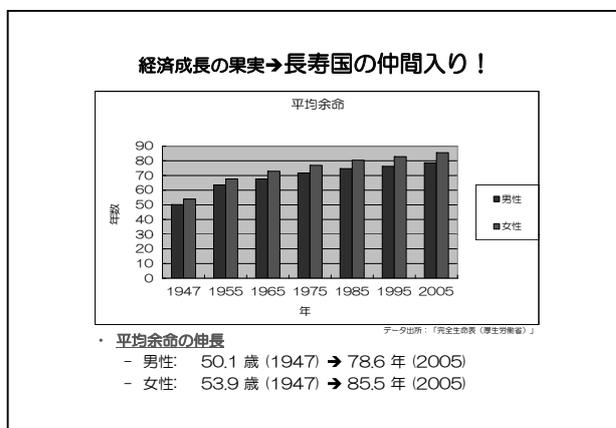


それによって、私たちはどういうことを受け止めてきたのかというのが次の話です。これは一つ目、高等教育、私もそうだと思います。日本が経済成長を遂げたので学校教育が十分に整備された。ということかということ、学校ってつくってもそれだけで国が何かをもうけるかって、もうからないですよ。教育というのは消費するだけなんです。果実というのは、すごく長い時間を掛けて人々一人ひとりがそれこそ力をつけた力を発揮することで、すごい人が生まれれば、例えば何ですか、IPS細胞をつくれるというようなことにもつながるようなそうい

う人にもなるし、それからさまざまな分野ですよ、スポーツをはじめ、すごい活躍をされる人たちが生まれることによってしか実は評価されないですね。

ということは、それを進めていくための教育界の整備をするためには間違いなくお金が要ります。実は私の専門は開発問題なんですよ。途上国の人口問題をやってると、いの一に上がってくる問題はまずこれです。学校教育の整備できないんですよ。それは幾つかの理由があって、大きな理由は自分で自分の好きなように活用できるお金がないということです。ですから、貧困問題がどういうことかということ、ほんとに根っこのところでもまだまだ何も整備されていない、つまり教育が十分に整備されていない地域では、自分たちが何とか整備しなければなと思って段階になって、財布のひもを開けてみると何も無い。ではそこを何とか助けてくれる国を探そうということで、例えばお金を持っている日本をはじめとした国が一生懸命援助をしてきたということです。

日本の場合、経済成長を遂げてきたということで、それを活用できたので、ご覧のように戦後、急速に多くの人が高校、大学に通えるようになりました。



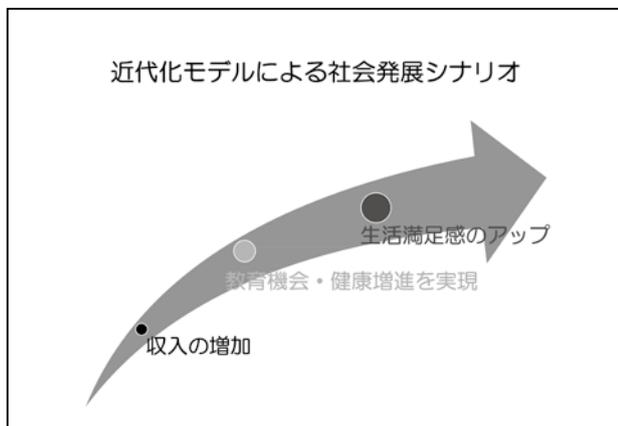
もう一つ、皆さんにお見せしたいスライドがあります。健康、平均余命のグラフです。これは50年分ということで整理をできていて、大きな傾向しか変わってません。もちろんこの棒の高さが少しずつ伸びてますね、日本の場合は。でも、これは皆さんの中にはもっともっと健康について勉強されている方おられるので、いわゆるその健康な状態を保てたままどれだけ長生きできるかということを最近はやってきてますよね、いわゆる健康面での質を反映した平均余命はここには反映されてません。ですか

ら、健康でない状態も含まれるけれども、肉体としてそれが朽ちるまで何年掛かるかというグラフには過ぎないんですけど、それでもこれだけの伸びを日本は示してきた。

これも理由はさっきの教育と一緒にです。高知では高知大学医学部ですね。そこで1人のお医者さんを育てるってものすごくお金掛かるじゃないですか。予算をぽーんとつなげなきゃいけない。それで分かっていたように、1人のお医者さんを育てるために社会でどれだけ、期待もあるんですけど、そこにやっぱり人材を育てられるお金がないとできないですね。

GDP と生活満足度の関係

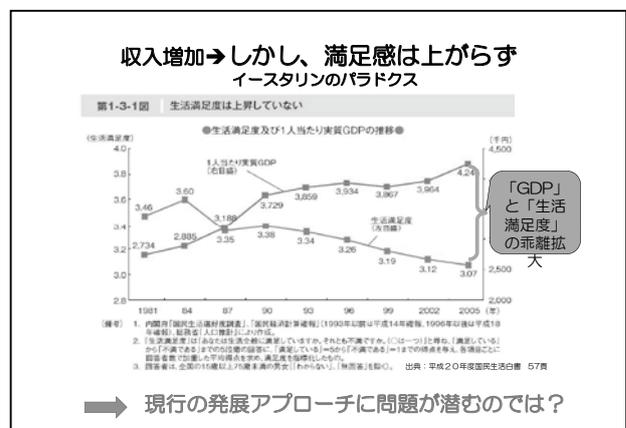
これは、「近代化モデルによる社会発展シナリオ」というふうに私が説明しているものです。収入を上げると、いわゆる GDP が伸びてきたということです。教育機会・健康増進を実現、生活満足度のアップ。そういえば、収入増加の話をしてませんでしたよね。



実は、これの前段階で言わないといけなかったもので、言葉で補足させてください。1945年に敗戦というか、終戦しました。その後、日本が1955年以降、50年掛けて2005年までの間にどれだけ1人当たりのGDPを伸ばしたかというデータがあります。それは実質的な数字、つまりお金の価値を一緒にならしたというデータを使って、では何倍収入が増えたのかという計算をしたことがあるんですけども、例えば1955年当時を100としたときに、2005年の段階ではおよそ8倍なんです。それだけ

急速に1人当たりのGDPが上がったといえます。その恩恵が先ほどお見せしたような教育だとか、それから健康面での整備につながった。

ですから、その整備につながったというこの黄色で書いてるところになると、おそらくそこで生活している日本人の方々は自分の生活に対する満足度を高めてるんじゃないか、高めていってやろうというそういう前提あるいはシナリオであろうし、そうなっているだろう。実際そうなのということで、私自身もそうなっているといいなということに関心を持ってつくっていたグラフがこのグラフとよく似たグラフでした。



これです。このグラフは実は私がつくったものではありません。私がこのグラフを見つけたのは、平成20年度国民生活白書57ページで、これが見つかるまでは、私全く同じデータを政府から入手をして、ほとんど一緒のグラフをつくってました。

これ何を意味しているのかというと、ちょうど青色の部分が1人当たりの実質GDPがどれだけ伸びてきたのかという数値なんです。簡単にいうと、1981年が1人当たり273万4,000円が2005年のときには420万を超えていると。ですから、おおよそ1.6倍ぐらい伸びてるわけですよ。どんどん、伸び率が少し減少したとはいえ上がって来ましたよと。

実はこのオレンジ色のラインというのが重要でして、生活への満足度に関する調査を、国は1981年から3年おきにずっとやってました。やってましたと過去形にしなきゃいけないのはちょっと寂しいですけど、今はやっていません。内閣府の国民生活選好度調査という調査です。そこで生活に満足してま

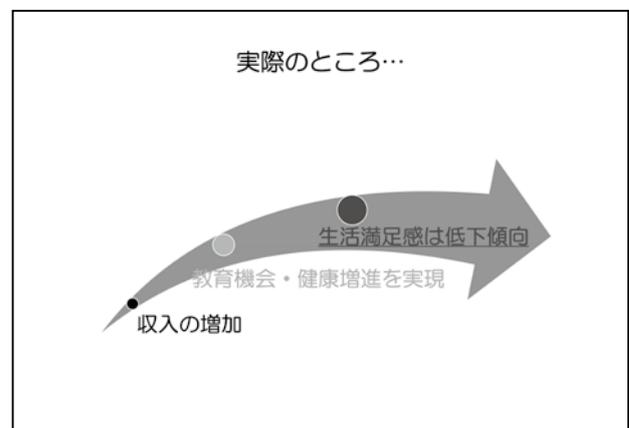
すかという問いかけをしてきたんです。ところが、その回答者の回答をもとにして平均値を計算したものを政府がこのグラフにしている。簡単に言えば、GDP、つまり経済的な意味での自分たちの生活基盤は間違いなく上がってきたんだけど、同時期にさっきのシナリオに関して人々の生活に関する評価、満足度、主観的なものですけども、それは上がっていないどころか、実は徐々に徐々に下がってきている。

このグラフ、生活満足度は上昇していない。僕はこのグラフを見て、二つほっとしました。やはりと思いました。一つ目、それは私が自前でつくっていたグラフをもう使わなくていいということ。二つ目はもっと重要で、政府が白状した。つまり自分たちがやってきたことに対して、開きができるということです。僕はこれびっくりもしましたけども、もしかしたらこれは変わっていく、もしかしたらそういうチャンスかもしれないというふうに思いました。これおそらく皆さん、まだインターネットとかでも、レポートも含めて全部残ってると思いますから、事務所にお帰りになってご覧になったらいいかなと思います。

では、これは何かというと、ここに「イースタリンのパラドクス」と私書いてます。これ実は日本だけの特殊な現象ではありません。イースタリンという人は、リチャード・イースタリンというアメリカの経済学者です。もう80歳近いと思うんですけども、ご高齢になっても毎年ものすごい数の論文を発表されている方です。彼が1970年代にアメリカのデータでほぼ似たような動向をつかんでいたんです。既にそのときに論文化して発表してました。私を含め、こういう主観的な幸福感であるとか、それから幸福とか生活の質とか生活の満足度は経済とも切り離せないですねと考えている経済学者は、彼のことをいわゆるそういう幸福と経済を考えるうえでの出発点を形成したお父さんということで、幸福・経済学の父と呼ばれている人なんですけど、イースタリンの名前を取って、幸福のパラドクスなんですけど、イースタリンのパラドクスというふうに呼んでます。アメリカで発表された研究論文の現象が日本でも起きている。

それからもう一つ名前を言いますけど、イギリスですよ。データをチェックすると似たようなグラフの動きを示した。これは先ほどちょっと私が紹介した近代化を進めるうえでのアプローチ、実はこの三つともよく似ているということです。元祖はイギリスですけど、それからアメリカ、そしてそれを踏襲した。

実際のところは、結局グリーンのところが残念ながらヒューンと伸びていなくて、一生懸命経済にも、そして経済力を活かした教育機会の成果、健康増進を実現してきた。でも、いわゆる生活満足度は低下傾向にある。



生活満足度の評価

さっきのイースタリンは、これに対して解釈をなさってます。彼の解釈の中で、私たちがちょっと気にしておかなければいけないのは、生活満足度は実は評価の軸が2種類あるということです。私ここから前のデータでないのも何とも言えないんですが、もしデータがあれば、おそらくこのオレンジ色のラインはこのブルーのラインと似たようにして、似たような動き、つまり徐々に徐々に経済的な所得が増えていけば、それによって人々の生活の満足度は少し下がっていたはずだろうと思います。

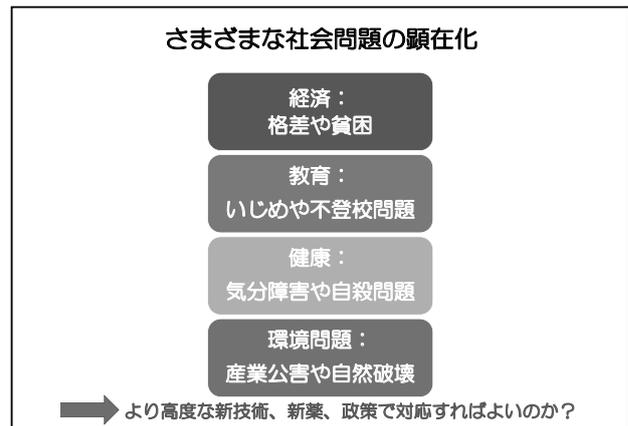
それはなぜかという、いわゆるさっきの開発途上国の話に戻ってしまうんですけども、まだ自分たちの生活している社会の中で必要不可欠なもの、最低限の生活をするために必要なものが十分に揃っていない状態では、自分たちが今手にすることができる収入が上がることによって、そのお金を使っ

て、財布の中身を使って、自分たちが今生活に必要なものを購入したり、あるいはつくっていくことができる。それを絶対的な意味で生活を改善する。今の生活がさらに自分の生活を支えていくために、今の生活をさらによくするために自分が稼いだお金がそこに投入される。ですから、自分の生活に対する評価も上がる。

ところが、それが十分に達成された社会では何が起きるか。多分皆さんにもすっと腑に落ちるものあるんじゃないかと思えますけど、例えば自分のよく知っている大学の友だちが同じ会社に入ったとしましょう。そしたら、自分の友だちのほうが1年早く昇進してしまったとか、あるいは自分が今生活をしている地域でみんなが家を新築し始めたけど自分はまだだとか、そういう自分自身の絶対的な数字じゃなくても相対的な比較によって自分の生活の評価をしていく。

ですから、このオレンジ色のラインで気をつけなければいけないということを申し上げてるんですけど、絶対的な水準で日本もお金を稼いだ。経済成長によって生活を改善してきたっていう時代は、割とその生活の評価とも密接に結びついてるけれども、実はこれ以降、そういう基準を持ってる人よりも、相対的に周りの人はどうなのとか、そういう比較をする人たちが増えてきた。言い換えると、生活が豊かになったということかもしれません。ということは、言い換えれば、そのときにどういう社会をつくっていくのかという議論が必要になるんじゃないかなということです。でも、どういう社会を構築するのかということを我々は考えていくべきだというのは、この1枚の表ですけども、私たちにそういうメッセージを与えてくれるんじゃないかという話です。

理由は分かりませんが、先ほどの生活満足度の低下ですね。さっき言った評価の問題もありますけれども、あともう一つ現象としてさまざまな問題が起きてるのも事実なので、これについても私たちは目を向けなきゃいけないと。もう一つ、私は皆さんに問いかけたいんですけども、経済の問題、教育の問題、健康の問題、環境の問題、さまざまな問題もあるので、おそらくこの問題の直面している人たちに

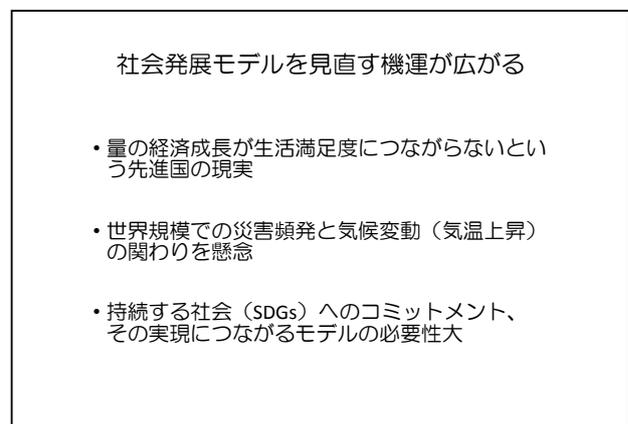


とっての生活に対する評価は上がるということはなかなか考えにくいですね。

経済成長の量から質への転換

ではどうしようかということで、それを何とかして対応するためには、やっぱり新しい技術で対応しようとか、新しい技術で新しくつくられる新薬で対応するとか、あるいは政策で、例えば貧困者を助けるような政策をどんどん打ってあげればいじやないかということをつなげていけば、果たして、これは上がっていくんだろうかというときに、私たちはもっともっと真剣に向き合わないといけないだろうというふうに、私は思っています。

どういうことか。根本的に私たちが今暮らしているモデルそのもの、先ほどお見せしたいいわゆる産業革命をどんどん奨励して、それから GDP が上がっていくよということで今のを奨励して、その結果がどう出てるかということの評価するために GDP 指標を使い、その結果一人ひとりの GDP は上がっていくというようなモデルですよ。あのモデルその



ものを少し見直す。必要であれば、モデルそのものにメスを入れるということが必要なんじゃないか。そうしないといけないよということですが、今の世界自体が起きているということが、私たちの目に見えない、つまり世界中のどこか分かりませんが、目に見えない地域で、すぐに見たりすることができないところで起きてる。

世界規模での災害の頻発ということは、これは情報として私たち受け取りますね、ニュース等で。でも、それも実は先ほど申し上げたように、実は社会発展モデルを変えないといけないのかもしれないという、そういう一つの症状ですよ。そして、持続する社会というものがやはり重要なんだということ。

経済成長の量から質への転換がなぜ必要なのか

- 高い経済成長を果たしてきたが、社会はより住みやすく、活き活きと暮らせるようになったのだろうか？
 - 「豊かな社会」とは何かを問ひかける動き
 - モノの豊かさからこころの豊かさへのニーズ高い
 - 国際レベル、国レベルの議論も深まりつつある



経済成長の量的拡大一辺倒から生活の場である社会の改善につながる果実分配と活用方法を吟味する時代へ

こういう質への転換というのをしたいとは言うんですけれども、経済成長を、これ話をすると、多分草郷さん、経済成長大嫌いなんですよねって思われるかもしれませんが、僕はそう思っていません。例えば皆さんが Gross Kochi Happiness の何ていしましょう、それおそらくもじった Gross National Happiness、ブータンの指標があるんですよね。ブータンも経済成長をやめろとか一切言ってないです。あそこは今世界中の国々の中で、上から 10 番目ぐらいに入るぐらいすごい経済成長をしている国の一つなんです。

私が見てもすごく重要だと思っているのは、経済成長を評価してないんです。つまり量的な成長でそれだよとするのではなくて、それを何に使うのかといったときに、ではどんな社会をつくりたいかということがとても大事になる。それがここでいう社会発展だけど、前のスライドにある社会発展モデルを

量から質へ半世紀にわたる「社会発展モデル」の見直し

- 高度産業化を機軸にした経済成長モデルの行き詰まり
 - 1960~70年代の警告（カーゾン「沈黙の春」、メドウス他「成長の限界」、シュマッハー「スモール・イズ・ビューティフル」など）
 - 公害・気候変動などの深刻化（生態系の視点）
 - 1992年「国連環境開発会議」（地球サミット）
 - 2012年「国連持続可能な開発会議（リオ+20）」

→持続する社会経済システムへの転換が急務
(国連は2015年にSDGs策定、パリ協定合意)

もっと真剣に見つめ直そうということです。

社会発展モデルの見直し

では、そのときに私たちが問ひかけなきゃいけないこと幾つかあるんですけど、そのうちの、三つだけ問題。一つ目、では豊かな社会って何っていうこと。二つ目は、ものの豊かさからこころの豊かさへのニーズは高いということです。これをしっかりと私たちは工夫しなければいけない。

これ知ってますか？日本の中で、皆さんにとって、こころの豊かさが大事ですか、あるいはお金の豊かさが大事ですかっていう、そういう質問をストレートに投げている調査を、政府がやってるんです。その結果を見ると、もうここ最近 10 年 20 年の話ではありません。ここ 30 年 40 年のトレンドで、マジョリティはこころの豊かさのほうが大事だと思ってるという時代にもうずっと入ってるんです。だとしたら、そのこころの豊かさというものを大事にする社会って何っていうことを、もっとも私たちが真剣にそれを追求したいということ表現しなきゃいけないでしょうし、そのための取り組みをしなきゃいけないかなと思います。

三つ目は、先ほどから何度も何度も申し上げることですのでほんとに大事ですけど、それは日本国内だけじゃなくて、国際的なレベルでの議論も確かに。

あと、簡単にこの動きというものの歴史についても紹介しておきたいと思います。これ歴史の教科書じゃないので、もう勝手に私が整理したにすぎないんですけど、社会発展モデルを変えようというの

持続する社会発展モデル推進の動き

・世界レベルの動き

- ・ 発展の目的を経済生産の拡大から、生活の質の向上と持続する社会に重きを置く
- ・ 幸福な生活、ウェルビーイング（よい生活状態）に着目し、新たなモデルの構想、不幸状態への対策・政策を検討

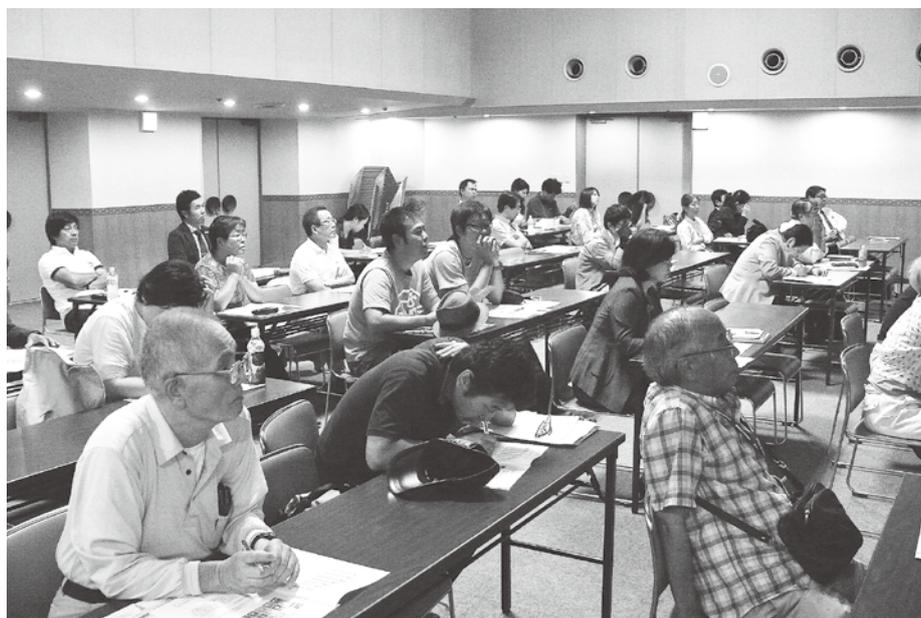
はいつから始まったかということです。これは高度産業化を機軸にした経済成長モデルに行き詰まりって私したんですが、皆さんの中にはどうでしょう、『沈黙の春』とか読まれた方とかおられるんじゃないですか。

『Silent Spring』レイチェル・カーソンという人です。いわゆる私たちの生活している周りからミツバチがいなくなってしまう。それはなぜかという、大量の化学物質を肥料に使う、あるいは殺虫剤を使うことであると書いてあるんです。そういう時代がタイトルと密接につながっている研究者。それから当然ながらメドウズです、『成長の限界』。有名なマサチューセッツ工科大学の研究グループがデータを使って、このままだと地球はいずれ限界を迎えて崩壊してしまうかもしれないという、そうい

う議論です。

それから『スモール・イズ・ビューティフル』、シュマッハーは経済学者です。でも、彼はやはりスモールと言ってますけども、いわゆる経済成長を遂げていくということで社会が豊かになるということじゃないんじゃないかということを、彼はどこで気づいたかということ、今でいうミャンマーですね、ビルマです。彼がビルマに出張した。実際ビルマの経済を立て直したということで、ビルマに出張して、アドバイザーかな、それで出張したときにビルマの人たちの生活、暮らしぶりを見ていて、そこから逆に彼が学んだというか、あっ、こういう国において経済成長するというのが、逆に自分たちがこれまで築いてきた社会システムに対して、むしろそれを破壊してしまうんじゃないか。

むしろそこから私たちが先進国の経済モデルに対しても見つめ直さなきゃいけないのかなということ、彼はその後、『スモール・イズ・ビューティフル』を読まれてる方は覚えているかもしれませんが、例えば仏教経済におけるそういう章ですよ、つまりそういう人、それから社会というものを中心に据えたような経済議論をしていくべきだという立場をとります。これは、僕の目から見た社会発展モデルを変えていきたいと思いますという出発点を形成したものだといえる部分です。



国際レベルでの共有

それが実際問題、国際レベルでどのように共有されてきたのかなというのを見ていくと、これはまず公害問題。日本の場合は特にひどかったですね。ちょっと飛びますけれども、水俣病が一番代表だとは思いますが。公害問題、気候変動、つまり生態系、エコロジー。そういうものがどんだんみんなの中で共有されるし、研究者もエコロジー観が形成されれば生態系を維持しようという話につながっていきます。

1992年の国連環境開発会議、これ有名です。地球サミットって書くべきか、リオサミットって書くべきか、ちょっと迷ったんですけど、リオのサミットです。ブラジルです。オリンピックがあった、あのリオです。それから20年経ってから「リオ+20」っていう、リオから20年後という会議を行いました。国連持続可能な開発会議、実はここで先ほど17の目標をスライドでお見せしたんですが、そのSDGsをつくらうねっていうののきっかけづくりになったものです。

ですから、振り返るともっともっとうこういう問題意識を持ったのは一部の人たちだけじゃなくて、いわゆる私たちが直面している問題を大きく変えていく必要があるという、そういう認識は広がっているだけじゃなくて、いまやこの国連がつくったSDGsであるとかパリ協定の合意によって、世界的な方向性としては、自分たちの社会をちゃんと意識していくためには、今私たちが頼りにしてきた経済モデルあるいは社会モデルをそのままでは使えないと。そのまま使っている限りは、そのパリ協定合意で目指そうとしているような気温の上昇ももしかしたら2度を超えてしまうかもしれない。2度を超えたりすると、間違いなくそのコントロールが難しくなると言われてるので、そういう状態を迎えてしまう。では、どうするかと。

持続する社会発展モデル推進の動き

もう一つ、でもそこで絶望していてもしょうがないので、持続する社会発展モデルは具体的ににつくれ

るのだろうかというチャレンジをしているんだということ、皆さんにもご紹介しておきたいと思います。先ほどから私が話してきたのは社会体験とか経済体験とか、あるいは経済的なアプローチが見出してきた問題に触れてきたんですけど、では方向性も大事なんだけれども、実際それに向けた具体ワードっていう話です。

持続する社会発展モデル推進の動き

- 国連開発計画「人間開発指数」(Human Development Index)の開発と普及(1990年以降)
- 国連ミレニアム開発目標(MDG)の活用(2001年以降)
- OECDプロジェクト「社会進歩指標に関するグローバルプロジェクト」(2004年開始)
- 2009年のスティグリッツ・セン・フィトウシ監修の報告(フランス政府主導) ← 2008年リーマン・ショック契機
- 内閣府「幸福度に関する研究会」(2010年-2013年)
 - 経済社会状態、心身の健康、関係性を幸福度測定のコ
 - 幸福の統合指標は作成しないが、主観指標重視の方針

結論からいうと、ある種増えていっております。それは言い換えるとちょっと希望があるんですね。一つ目は国連等の動きです。国連は指標とか指数というのをつくるのが最近図式になってました。特にその中でも一番有名であったものですね。であったというのは、今そのSDGsとかMDGのほうが割と皆さんに知られるようになってきたので、それが知られる前のこの人間開発指数というのが国連がつくった指数の中ですごく有名だったわけです。GDPは経済的な側面だけを計っていますよね。人間開発指数 Human Development Index というのは、その経済的な豊かな部分を入れてます。でも、あと二つも入れてます。その二つはスライドでお見せした教育と健康です。ですから、経済的な側面、教育の側面、健康の側面、それぞれがどう整備されてきているかということ計る指標になってます。これは1990年に国連がつくったものです。それを使って、世界中の国の動向を毎年データを更新して評価してきました。

今日はデータを持ってきてないんですけど、1990年前半、日本何番目ぐらいだと思いますか。常にトップ5に入っていました。今、それが残念なこととその当時に比べればポジションは落としてますけれども、でも十分世界中の国から見たら羨望の的に

なるような状況であることは間違いないです。ということは、僕が何を言いたいかというと、経済的な側面だけじゃないよというんですね、発展は。それを振興させていくという動きが一つ目です。

二つ目はこの MDG というものです。ちょうど去年までの目標を掲げていたので、MDG はもう既に役目を終えて SDGs、先ほどの 17 の項目のより複雑化したものに実はバトンタッチをした。なので、今は国連レポートに MDG という言葉はほとんど消えてるんですね。新しいレポートだったら SDGs というのは登場してますけど、これも実はとても大事な役割を果たしてくれました。ここでは経済と教育と健康だけだったんですけど、ここに至っては先ほど少し触れた貧困問題とかジェンダーの問題、それから教育の問題、健康の問題等々を含んでました。つまり少しずつ少しずつ生活に近い、つまり人々が生活する場に近いような指標をつくらうという取り組みがなされてきた。

ここでちょっと線が入るんですが、ここから下は、国連とは違う OECD とか、それから OECD の中でも一部の先進国のフランス主導で取り組まれたこととかが書かれています。

これら三つをつなぐ意図はどこにあるかといったら、柱は幸福度です。幸せな社会をつくるということが、実は私たちが目指す持続する社会発展モデルにおいてはとても重要な方針の一つでしょというのが、この三つで語られています。

詳細は割愛しますが、これらの動きがあって、最後に実は日本も「幸福度に関する研究会」というのを立ち上げてまして、3 年間で実は終わってしまったんですが、それで内閣府のこの研究会で何を見出したか。幸福の統合指標は作りません。つまりブータンのような GNH 指標は作りませんが、例えばその中でも経済社会の状態はどうなっているでしょうかとか心身の健康、あるいは人々の関係ですよ、疎外されてないかとかあるいは声かけがあるかとかですね、そういうものを軸にした幸福度を想定しようという提案がなされた。

主観指標を重視というのは、そういう自分たちが今生活していて楽しいですかとか幸せですかとか、そういう人々の気持ちですね。それにもちゃんと耳

を傾けていくべきだろうということの方針として掲げていました。ですから、こういう動きが間違いなく広がっているので、あとはではどうやるか。何とかそれを実践のうえで、実際の現場で実現していくことだと。

持続する地域社会のアプローチ

ここから、皆さんに紹介したい三つの事例について話を進めていきたいと思っています。なぜ私がそれら三つの事例を皆さんに紹介したいと思ってるかということなんですけれども、それは単純に私がそれらの事例好きだからというのがもちろんあるのかもしれませんが、でも、それ以上の理由があります。それは、実はこの三つの事例から皆さんに考えていただけるんじゃないかなと思うのは、こういう持続する地域社会のつくり方とか地域社会生活のアプローチというのはどういう特色を備えているものなのかということです。それを最初に確認したうえで、三つの事例について少し紹介をして話を進めていきたいと思っています。

まず、この持続する地域社会のアプローチというのは誰がつくったのか。これは私がつくったものではありません。これはイギリスの学者のロバート・チェンバースという人類学者がいます。この方はインド、南アジアでさまざまな調査をされてきた。参加型の開発という分野においては第一人者の方ですけれども、その方が提唱しているのがこの地域です。どういう地域かということ、そこで生活をする住民の一人ひとりの能力を活かして公正な地域発展を目指す。言い換えると、そこで存在して生活している人たち同士の公正さもあるし、先ほどから私が触れてるような地域間格差みたいなものも実は見据えていて、それぞれの地域が地域の持つ特性を活かしながら発展をしていくということが、実は地域間のバランスも保っていくというロジックですよ。

そういう提案をしつつ、では具体は何だということで、このアシュレーとカーニーという、これもイギリスの学者なんですけれども、でも彼、彼女らがアプローチしているのは、絵本でいうと JICA って分かりますか。JICA っていうのは国際協力をして

まずよね。それに相当するのが DFID という組織がイギリスにあります。その DFID がこのアプローチを展開をしているんです、開発途上国に。基本的には6原則というのを出してまして、この6原則は地域社会づくりの三つのポイントとしてまとめていると、私は思っているの、それを紹介しようと思ひこのスライドをつくってみました。

代替モデル：持続する地域社会生活アプローチ
(Sustainable livelihood approaches)

- 個々の潜在能力を活かし、公正な地域発展を目指し、持続性を損ねない開発
Robert Chambers and Gordon R. Conway (1991) Sustainable rural livelihoods: practical concepts for the 21st century IDS Discussion Paper 296
- 持続する地域社会生活アプローチの6原則
Ashley, C. and Carney, D. (1999) Sustainable Livelihoods: Lessons from early experience. London: Department for International Development

- 当事者目線で問題に向き合う
- 当事者自身が問題解決に動く（外部の支援も）
- 当該地域と地域外との関係を意識する
- 行政と市民の協働
- 4つの持続性（制度、社会、経済、環境の諸側面）
- 柔軟で長期的な視点を持つ

(Ashley and Carney (1999) 7頁)

まず一つ目、当事者目線で問題に向き合います。要するに、住民目線で問題に向き合う。二つ目、当事者自身が問題解決に動く。地域住民自身が問題解決に動きましょう。外部の支援もその問題解決に動くという方向性に沿ってそれを進めていこう。三つ目が、当該地域と地域外との関係を意識する。つまり地域の問題なんだけど、地域の周りの状況とか国との関係とか、県との関係とかも意識しようということでしょうかね。行政と市民が協働していくこと。それから四つの持続性。持続っていうのは社会の持続、経済の持続、環境の持続、制度、つまりその地域が行っている公的な制度とかそれから昔からの慣習的なものも持続させる。例えば今日私がちょっと教えてもらった土佐弁も入るのかもしれ

持続する地域社会生活アプローチの有用性

- 人間開発・潜在能力アプローチとの整合性
 - アマルティア・セン
 - 経済的合理性への批判とウェルビーイングや人間開発（基礎生計、教育、医療）の重要性
アマルティア・セン (1999) 「不平等の再検討—潜在能力と自由」岩波書店
 - すべての地域にて社会的共通資本整備の必要性（宇沢弘文）
宇沢弘文 (2000) 「社会的共通資本」岩波新書
 - マーサ・ヌスバウム
 - ウェルビーイングの要素と実現
マーサ・ヌスバウム (2006) 「女性と人間開発 潜在能力アプローチ」岩波書店
- 内発的発展のアプローチとの整合性
 - 鶴見和子の内発的発展論
 - 社会の構成メンバー自身が主体的に社会発展を担う社会発展プロセス
鶴見和子 (1996) 「内発的発展論の展開」筑摩書房

ませんね。柔軟で長期的な視点を持ちましょう。つまり一過性の動きにとらわれないで、10年20年先を見据えて取り組んでいきましょうということになればいいかなと思います。

地域社会生活アプローチの有用性

これらのアプローチがなぜ大事かということ、時間の関係もあるので、ずっと話をしたいところですがしません。言葉だけでちょっとキーワードだけ言っておきます。これは、持続的なこの社会生活アプローチを裏づけるというか、これがなぜ大事だと言えるかということ、二つのいわゆる研究者の知見と密接に関連してると私は理解したためでした。

一つ目、先ほどの人間開発指標って覚えてます、あの人間開発指標の実はベースになってるのはこの考え方です。人間開発であり潜在能力アプローチというのを、ノーベル経済学賞を取ったアマルティア・センとマーサ・ヌスバウムという方で、彼女は哲学者、アリストテレスの研究者なんですけど、皆さんの中にもアリストテレス好きだっていう方おられるかもしれませんが、彼女はその研究から、ではほんとに人々の豊かさって何なのかということも今でも追究されていて、実はこの11月に京都に来られます。京都議定書が成立しましたね。そういう研究をされていたんです。

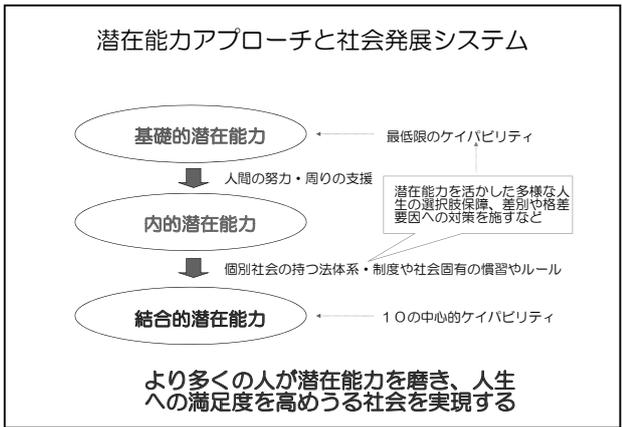
この2人が何を言ってるのかということ、いわゆる人々の生活の質、豊かさとか幸せというものは、実際その人が持つてるお金の大きさじゃなくて、まさにさっきの人間開発ですね、お金、基礎的な生計を支えるお金とか教育あるいは健康、医療が重要であ

潜在能力の3タイプ

- 基礎的潜在能力
 - 生来の素質、高度のケイバリティを達成するために必要な基礎・道徳的関心の基礎。見る、聞く等。
- 内的された潜在能力
 - 個人が基礎的ケイバリティを発展させ、個人が持つ機能を実践できる力。言葉を話さる、愛する、政治的な選択を行いうる等。
 - 物質的、社会的支援が必要（学校など）
- 潜在能力の結合的発現
 - 個人が、個人が持つ内的ケイバリティによって持っている機能を発揮するために適切な外的条件が存在している状態。（社会のあり方：法制度、慣習、など）

ると。ヌスバウムさんというのは、そのウェルビーイングがどのようにしてつくられていって、どのようにしてそれが大きくなるのかということをも具体的に説明をしてくれています。

どんなようにってということですけど、これです。これヌスバウムさんの考え方なんですけど、人間には最低限のケイパビリティ、潜在能力があると言っています。どういうことかという、私たち一人ひとりが持っている、生まれたときから備わっている力です。例えば赤ちゃんが生まれます。おぎゃーおぎゃーと泣いていると、あれです。つまり、第一ほう起。でも、もちろん残念ながらこの声が出せないというので、それが不足しているという不思議な状態であるあれもありますけど、それらを含めて一人ひとり備わっている潜在的な力の規則化。



でも、基礎があるからその人の努力であったり、周りの人の支援とか努力もあって内的なものになる。どういうことかという、今の私です。しゃべりますよね、言葉を。それからこれが土佐弁ですって言われたら、それを聞いて記憶をして、それをまねをするという行動に出していく。そういう内的な、つまり自分の中のもとも持っている力を活かして、いろんな機能をまとめていくということです。

でも、そのヌスバウムさんがということで、僕は一番重要な点はここだと思っています。結合的な潜在能力というのがあって彼女も言っています。それは個人の力だけではだめなんです。そこで初めてその人が生活をしている地域とか国とかの特色によって、その人が例えば進んでいこうとする人生の選択肢の数とかあるいは自分が行きたいなという生き方の問題とか、選択肢の数が増えるのか減るの

か、多様になるのかどうかというのは実はその社会の特色、社会の制度やルールによって大きく変わるんじゃないのというのが彼女の視点です。

私は、これは非常に重要な、この3番目の結合的な潜在能力というのはとても重要なことを私たちに伝えてきてるなと思ってますし、ではどういう地域であれば、より多くの選択肢を私たちが持てるんだろうかということが気になってくるわけです。

内発的発展とは

では、そういう国あるいは社会をつくるとしたら、では何が抜けてるのか、何が必要なのかということに私たちは目を向けないといけないというのが、二つ目の研究者の提案してくれたものです。それが内発的な発展。ではその中でも内発的な発展とか内発的な地域づくりとか内発的な地域創生とか、そういうことを見かけたことがある人もいないかと思っています。

一体「内発」とは何なのか。これは鶴見和子さんという、日本の社会学者です。残念ながら、何年前に他界されたんですけども、彼女が内発的な発展論というのを表しました。彼女の考えている内発的な発展論とは何なのかということですけど、ちょっと引用を持ってきました。こう言っています。「内発的発展とは、目標において人類共通であり、目標達成への経路と創出すべき社会のモデルについては、多様性に富む社会変化の過程である。共通目標とは、地球上すべての人々および集団が、衣食住の基本的要求を充足し、人間としての可能性を十全に発現できる条件をつくり出すことである。それ

鶴見和子の内発的発展

- 内発的発展とは、目標において人類共通であり、目標達成への経路と創出すべき社会のモデルについては、多様性に富む社会変化の過程である。共通目標とは、地球上すべての人々および集団が、衣食住の基本的要求を充足し人間としての可能性を十全に発現できる、条件をつくり出すことである。それは、現存の国内および国際間の格差を生み出す構造を変革することを意味する。(鶴見(1996)9ページ)

は、現存の国内及び国際間の格差を生み出す構造を変革することを意味する」。

ちょっと学者らしい、何でしょう、ちょっと固い表現も入ってますけど、でも、彼女が言いたいこととして、その地域で住む人たちが自身が主体的に社会発展を担っていけるような社会発展をし続けていくことで、それぞれの個々の地域の多様性というものも実現するし、その多様性を実現した社会であれば、個々の潜在能力、伸ばしてきた力を活かせるという社会をつくり上げていくことが可能になるんじゃないかなと思います。

私が実は研究をしてきた立ち位置というのも、この二つのアプローチは重要な柱の一つを形成していて、最後にどうしても、もう1人だけ日本人の研究者の名前を言及しておきたいんだけど、同期なんですけど、経済学者の宇澤先生です、宇澤弘文さん、残念ながら宇澤さんも他界されてしまいましたが、彼は社会的共通資本が大事なんだということを残されて亡くなりました。本当は彼が社会的共通資本が大事なんだというようなことにどんどん傾倒していかなければ、彼こそがノーベル賞を取ると言われてた、そういう極めて優秀な経済学者です。

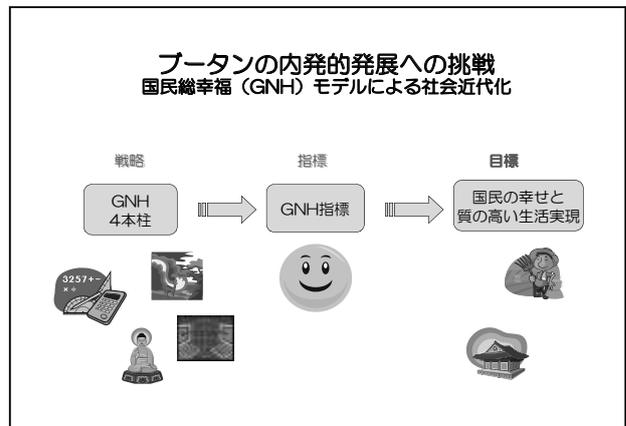
彼、東大の先生になるんですけども、その前にアメリカのシカゴ大学で教授でおりました。でも、1970年代に日本に帰ってきます。それはベトナム戦争だそうなんです。ベトナム戦争がアメリカ社会に大きな影響を与えていったときに、彼の周りの経済学者は、その無駄な戦争に入っていく政府のある種片棒を担ぐというか、そういう研究に疑問を持たずに入っていた。それに対する彼は違和感を持ったので、このままの形で我々も経済学取り組んでいけば、世界にもたらすマイナスの影響は大きいと考えていたので彼は帰ってきたわけです。

彼は帰ってきて何をやったかという、自動車の問題とか公害の問題とかを経済学者の立場で鋭く指摘をされていたんです。そして、彼の考え方というもの実はここでいうどのような社会をつくるべきかということに対して、かなり私たちに大きな警鐘を与えてくれたし、具体的な提案を残してくれたということでもあります。

ブータンにおける社会発展モデル

こういうものをひっくるめてブータンに行きました。ブータンは社会発展モデルを変えようということと国づくりを始めている、もしかしたら数少ない国の一つだろうと思います。かなり数は少ないですよ。なぜならば、多くの開発途上国はもう既に、先ほど私が皆さんの前に少し褒めらさせていただいたような産業開発ですよ、それによって近代化を遂げようということ、モデルにしなさいよということで支援をしてきたのも事実です。

このブータンですね、逆に自分たちにとってどうい社会発展あるいは経済発展が大事なのか、近代化って何ということ自分たち自身で考えていこうよと取り組んできた国なんです。ですから、彼らはちょっと違う目標を持っています。それが国民の幸せであり、質の高い生活を実現したい。Gross National Happiness と言いますが、4つの柱を立てたんです。



経済成長も大事だし、でも同時に経済成長を遂げるけど、その中で不平等とか格差というものを広げないようにしようということ、彼らは柱にした。環境をちゃんと守っていかうとか、それから自分たちの独自の文化もきちんと尊重していきたいねというふうにして柱になってます。四つ目の柱が、みんなで社会をつくっていくんだけど、そのために必要な参加型の政治ですね、その四つの4本柱を立てています。

皆さん、GNHが参考にされたというGNH指標というものをつくって、それを活用してできるだけ、先進国といわれる国々が直面してきたような問

題に私たちも直面しないように、そういうブータン国という国をつくらうというふうには社会発展を違う発展モデルで国づくりをしようという国がありますよということで、今日は説明しないんですけども、その実現の一つがブータンですということで違うスライドを挟んでみました。本当にブータン大好きなのでブータンの話をずっとしたいところです、ビデオとかも紹介して。今日はそれは差し控えさせてもらって、むしろ主題である世の中でどういう事例かというところに、これから残りの時間を費やしていきたいと思います。

**持続する地域社会づくりにつながる
取り組みを掘り起こす、創りだす実践的研究**

- 新たな地方自治の動きと市民（当事者）主体性
 - 市民主導を軸に据えて、行政のあり方を考え直す
 - 外発的発展から内発的発展へシフトする
 - 生活の質や幸福の決め手（要素）を重視する

→住民の創意工夫を促し、協働して地元（地域）発展を目指す

→アクション・リサーチ（＝実践的研究）

地域活力醸成の発想転換

持続する地域社会づくりにつながる取り組みを掘り起こす、創りだす実践的研究。これ多分私が今日言ってることだと思うんですが、新たな地方自治の動きと市民、つまり当事者の主体性を出そう。これが先ほどの鶴見先生の内発的発展の考え方とデータの理解していいかなと思っています。問題は、内発的発展にシフトできるのか、移行できるかです。生活の質や幸福の決め手、これを重視するような社会を果たして私たちは少しでもどう近づけるのかという。そのときにやはり欠かせないのが、創意工夫がある地域で協働していけるような地元を少しでもつくり出していく、あるいは掘り起こしていく。

そのために私何やってるかということですが、アクション・リサーチっていうのを掲げてやってますよということで、そこが私がやってるところの専門ですが、アクション・リサーチという言葉はおそらく初めてお聞きになった方が多いんじゃないかと思います

けど、そういう分野があるんですね。ではどれだけの研究者がいるんですかとか質問されたら、うーん、そんなたくさんいませんって答えるしかないような、日本の中ではですね。でも、世界レベルでいったら、かなりの人がいると私は実感しています。

**地域活力醸成の発想転換
〈3つの市民協働の実践事例〉**

- 愚痴から自治へ～あるモノ探し
〈水俣発の内発性醸成の接点づくり〉
➢もやいなおし、環境モデル都市、地元学
- 災害からの地域復興と存続への挑戦
〈住民による地域生活の評価と改善〉
➢災害後の地域復興協働活動、地域生活改善プロセス評価手法
- 幸せのモノサシづくり
〈行政主導から市民協働のまち創りへの脱皮〉
➢長久手市のしあわせ調査隊と広め隊

三つです。三つの事例なんですけれども、それぞれの事例の特色になる点をかいつまんでお話をしていきたいと思います。

一つ目が、「愚痴から自治へ～あるモノ探し」ということで、私にもその価値を教えてください、それから皆さんにも多分あるモノ探しというのも確かに大事だよと、割と同感というか共感していただけるものなんじゃないかなと思いますけれども、それがなぜ水俣から回ってきたのかということです。実は社会発展モデルを変えなければいけないというところにも密接に関係している地域、つまり問題に直面した場所でもあったんです。

二つ目、「災害からの地域復興と存続への挑戦」と書いてます。これは具体的には新潟の中越地震において大きな影響を受けた小さな村での話ですけども、この村と私は非常に深い関係を持っています

**愚痴から自治へ～あるモノ探し
〈水俣発の内発性醸成の接点づくり〉**

- 水俣の破壊と再生
- 1956年水俣病確認。
- その後、公害問題は解決どころか、迷走、深刻化、長期化し、水俣地域コミュニティへのダメージは甚大。
- ところが、水俣市は、2008年日本政府から最初に指定された6つの環境モデル都市の1つに選ばれた。
- 何が水俣を変えたのか？
➢もやいなおし、環境モデル都市、地元学

ので、その村でアクション・リサーチやいろんなことをやってきていた。それがこれから地域創生とかいうものに取り組んでいく際に、参考になり得る何かヒントがあるんじゃないかなと私は思っていますけど、それを皆さんとちょっと共有していきたい。

最後に、「幸せのモノサシづくり」ということで、高知の指標ができてきているということですが、その指標をつくるのに市民もそこにかかわっていくほうがいいんじゃないかということで、これも私がどっぷりと浸かっている取り組みです。

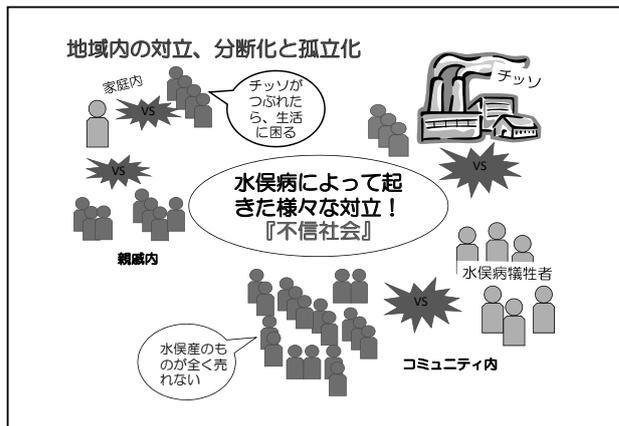
三つについてかいつまんで紹介していきたいと思います。

水俣病によって起きた問題

まず最初に、水俣です。私、学生に水俣の話毎年してるんですけど、水俣ってどんなイメージかと聞くと、水俣病ですと。これがテーマなんです。水俣病で公害で大変な経験をした地域、それで終わっちゃうみたいだね。でも、多分高校だと、水俣で起きたことを書きなさいって言われたら、そういうイメージですって書いたら多分それでオーケーなんですね。でも、私が高校の先生だったら、多分30点ぐらいしかあげられなくて、あと70点分水俣にあるんだよってということなんですけど、それは何か。

実は水俣というのは水俣病がありましたと、それによって公害問題がその地域をほぼ、地域のいわゆる非常に平和的な地元の皆さんの関係をかなり根本から覆して対立もしたしということで、大きなダメージを被った地域なんです。でも、その地域が実は8年前にこの内閣府なんですけど、日本政府、そこが最初に指定した環境モデル都市の六つの中の一つに水俣が上がったんです。モデル都市というのはモデルにしたいんですけど、例えばしたいぐらい取り組みがいいとかなんです。結構意外だと思いません。その水俣病でかなりダメージを受けてる。何が起きたのか。

今日は時間の関係もあるので、水俣で何が起きたのかをこの1枚のスライドだけで無理やり皆さんにどんな問題が生じたかという話から始めさせてもらおうんですが、水俣病が起きたことによって、さ



まざまな対立が実は水俣市というまちの中で起きたということです。

まずチッソ、チッソは分かりますよね。公害、いわゆる有機水銀を出して水俣病を起こした。有機水銀の中毒なんですね、水俣病というのは。ですから、チッソとこの水俣病にかかってしまった人たちとの間の対立です。実はこの対立がかなり深刻だし、これによって、自分も水俣病にかかっているよということが言えなかった、言いづらかったという対立であります。それは親戚とか家族の中の対立でした。

というのは、この黄色で示している人は水俣病の犠牲ですね、水俣病になってしまった中毒症状を持っている人たち。この人たちが、チッソが悪いというふうに声を上げますよね。そうすると、上げることによって、この人たちの誰かは実はチッソの関係で生活してる人たちがいるんですよ。しかも多数。当時は、水俣では水俣の経済活動のうちの70%はチッソ関連で占められていた。占められていたというのは、例えばいわゆる自営の皆さんが販売されるような需要ですね、それも全部チッソ関連だったということを含みます。大きいですよ。

そうすると、かなりの人がチッソの経済活動に依存していた。そこが例えば生産停止という形になれば、もちろん職を失うという構造です。ですから、これ黄色で書いてますけど、本当は黄色になりかけみたいな人だと思ってください。言えないっていう状態になった人が多数います。ですから、公式に2,270名という形で水俣病の患者となっていますけど、本当はもっともっとたくさんいるという状態。

もう一つありました。これはいわゆる風評被害的なものです。水俣と聞くと水俣病ということで日本

中にその名前が、いや、世界中に水俣という名前広がったんです。水俣の人が、自分たちがつくっているものは水俣からだよと言ってるうちに病気になってしまったということで、それは全部君たちのせいだねという対立構造が生まれる。それで昔は仲良く何か話をしたりしてた人たちもいたと思うんですけど、それができなくなってしまったというのが水俣のいわゆる深刻な不信社会をもたらした、水俣病のもたらした水俣病地域をある意味破壊をしていった構造です。

水俣地域コミュニティの転機

- 1990年13年にわたる水俣湾の浚渫作業と埋め立て地への汚染土壌埋設完了。
- 1990年代初頭、市の住民、熊本県、水俣市から、自分から町を変えていこうとする機運。
- 市民組織「寄ろ会みなまた」の発足、みなまたの地域資源マップ作りを行う。
- 環境先進都市を志向し始める。

では、そんな構造を持ったところが何でモデル都市になれるのって話ですよ。水俣地域コミュニティの転機ということで、実は1990年に13年間にわたって浚渫作業、国におかれて海の中をきれいにする作業をしました。きれいにするとっても、水銀をきれいにするような技術ないので、その水銀汚染された土を全部広げて大規模な埋め立て地にしたんです。水俣病資料館、その前に大きな公園がありまして、それ全部埋め立ての、つまりここに海の中にあった土を全部広げたんです。そういう活動を13年かけてやって、それが終了したときに実はちょっと違う機運が生まれたということです。

そのときに市の住民、水俣市の住民だの、それから熊本県、地域、行政からもこれからの未来の水俣を考えなきゃいけないんじゃないかという機運が始まっていった。結構この機運というのが実は重要だったと私は見ていて、特にその機運を支えたのはこの市民組織です。「寄ろ会みなまた」というのがありまして、その「寄ろ会みなまた」のメンバーが結局水俣には何かあるのかということです。あるモノ探しの原点はこの人たちがつくったんです。

水俣って一体何かがあるのかをしっかりと調べようねということで、地図をつくと書いてありますけど、地域資源マップです。ですから、この地域には例えばこんな竹林があるよねとか、この地域にはこんな神社があるよねとか、そういうものをどんどん確認していくという作業をしたんです。その結果、その活動に参加をしていたメンバーが確信したそうです。つまり、水俣にはあるモノがいっぱいある。つまり、その資源を確認できたというのが実は重要で、それがさっきの内発的な発展とかという言葉に置き換えてますが、つまり外じゃなくて自分たちで何かやろうという転換点がここから見取れるんです。

その後、実は環境先進都市になろうとか、そういう宣言を1992年にしちゃうんです。当時、環境先進都市とか環境モデル都市という言葉が日本政府にはなかったですから、その前に水俣は自分たちで作り上げて、当時の市長の名前で、私たちが将来つくりたい水俣市というのは環境先進都市になることという宣言を出してます。その宣言は、行政と市民と両方が名前を連ねています。

その後、いろいろ動きが加速していったということなんですけど、水俣も将来どんなまちになりたいかというビジョンを掲げます。病気が発生してから、実は市役所は水俣病患者には徹底的に嫌われたそうです。何でか分かりますか。水俣病の問題は大きすぎたので、水俣市役所は一切ノータッチという立場をとったんです。県の問題、行政府の問題にしては大きいから、チッソだし、もう一つの市役所では対応できないということなので、ある意味その病気に触れないでいきたいという立場をとっ

未来のまちのビジョンへの舵取り

- 病気発生以来、市役所は水俣病にほとんど関与せず。患者からの不信感は大。
- 1994年5月1日、市長になった吉井正澄氏は、水俣病慰霊式にて、画期的な式辞を述べた。
 - 水俣市行政を代表し、水俣病患者に対する謝罪
 - 水俣の目指すビジョンの提唱：もやいなおし

た。これっていわゆる無関心なんですよ。

皆さん、マザー・テレサという、今ちょうど聖人になった人ですけど、最近、彼女がインドで取り組みをしたときに、愛の反対語は無関心であるというんです。それぐらい心に深い傷を与えているんだというぐらい水俣市役所は全く何にもしなかったという状態だったんですが、その市役所が実は変わりましたということが大きかったりするんです。つまり行政にも役割があった。

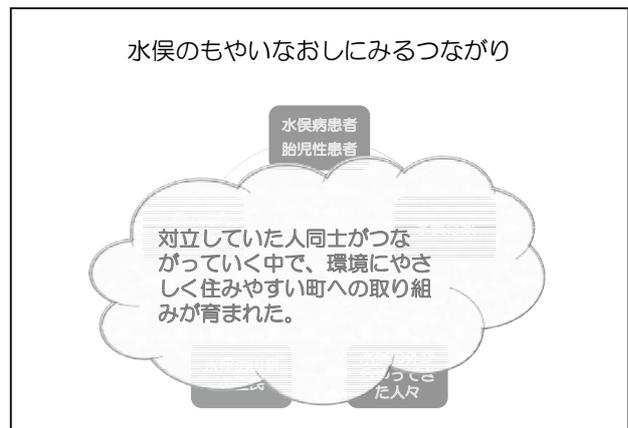
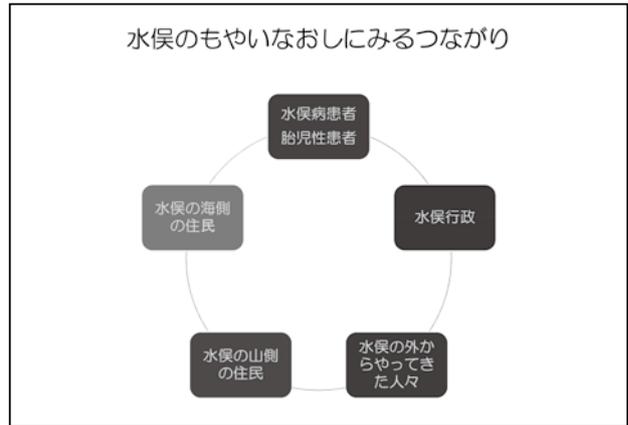
それ1994年に市長になられた吉井さんという方が、そのきっかけの道筋をつくっていったと思うんですが、まず市長になってすぐに水俣病患者に対して謝ります。彼はもうストレートに謝って、つまり先ほど私が触れた無関心という言葉を書いた、自分でこの謝罪文に使ってました。それだけじゃなくて、彼はその次の未来をつくっていくことが大事という提案をしました。それが「もやいなおし」です。

水俣再生へのターニングポイント 『もやいなおし』

- 『もやいなおし』
- 人間同士の心のつながりの修復（内面社会の再構築）につとめ、共に助けあって自分の生活する町・環境を再生していこう。
- 環境と共生する水俣に生まれ変わろう。
- 相手のことを知るために対話を尊重していこう

「もやいなおし」って一体何なのかということですけど、これです。人間それぞれみんな住民同士、この心がどうつながるのか。心のつながりを修復しなきゃだめだよということ。環境と共生する水俣に生まれ変わろう。これがさっきの社会発展モデルですよ。経済発展モデルに実は瑕疵があったので、それによって、私たち水俣病というものを被ってしまった。だったら、そういう水俣病にならないような、そういう経済システムを私たちは選択したいよねというテーマをしている。では、それをどうやってつくり上げるのっていったら、議論ではなくて対話だといたしますのでこうしています。

さまざまな立場の人がいるわけで、「もやいなおし」によってどういう人たちがつながるかという



もやいなおしの実践：社会的つながりの構築

- 水俣行政：市民参加から行政参加へ
- 水俣の将来目標設定：環境モデル都市
- 水俣独自の地域活性化再生手法の推進（地元学）

と、患者あるいは胎児性、水俣病患者の中でもほんとに深刻というか悲惨ですよ、生まれたときから水俣病という方もいます。水俣行政、水俣の海側の住民、山側の住民、外から支援にやってきた人、さまざまな立場の人がいるんですが、この人たちがきちんとやっぱり自分たちのまちをつくっていくということにつながるかどうかが。つながる前は完全にばらばらだと思ってください。自分たちがやるべきこと、やりたいことをやっていたと。でも、水俣というまちを将来もつといいまちにしていこうということで、根底は自分たちがやっていくことはもちろ

ん尊重するけれども、つながっていかうねということがこの「もやいなおし」の考え方です。

その後、いろいろなことが水俣で起きます。市民参加から行政参加へ、これは時間もないので言葉だけ読み上げておきます。また後ほどディスカッションのときでも触れるかもしれません。環境モデル都市になる。それから「地元学」というのに少し時間を割きたいので、水俣の話は例えば環境モデル都市への取り組みもさまざまありますよとかいうことは、皆様のお手元に資料があると思うので読んでいただいて、「地元学」についてちょっとだけ時間を取りたいと思います。

水俣市の環境モデル都市への取り組み

- 環境マイスター制度の設置
- ゴミ削減に取り組む女性市民グループの連携支援
- 市民によるゴミ分別（24種類）と各地区への還元
- エコタウンの設置で、エコビジネス（リサイクルボトルなど）誘致

「風の人」「土の人」

「地元学」って聞いたことある方おられます。すばらしいですね。「地元学」をやってみた方。おられませんか。「地元学」って「ないものねだりをやめて、あるものさがしをしよう」ということで、簡単に言うと、つまり自分たちの住民以外の人ですね、集落以外、ですから例えば私が今まさに「風の

地元学とは？

地元学とは、自然、歴史、文化、そして生活する人々という地元にある資源に着目し、これらの資源を活用して地域発展を促していく手法。「ないものねだりをやめて、あるものさがしをしよう」という考え方を基盤にしている。また、地元学では、土の人（地元集落で生活する住民）と風の人（集落以外の人）との間で、町歩きをすることによって、相互の交わりの中で、異なる視座を活かして、地元にある資源とその活用の気づきにつなげていこうとするしくみ。地元学は、地域コミュニティの生活様式に自信を持ち、地域発展のデザインと実施を地域住民の自治によって進めていくことを目的としている。

地元学考案者
吉本哲郎氏（元水俣市役所職員、元市立水俣病資料館館長）

人」ですよ、高知では。私から見たときの高知のよき、土佐弁って面白いですよって言ったときに、多分皆さん、面白いって言われるよりは、それを普段使ってるから当たり前と思ってるけれども、僕にとってはすごく新鮮だし面白い。この新鮮さによって、実は当たり前だと思っていたものから何かを気づいていくものだという事。つまり、気づくのは外の人じゃなくて、本来気づくべきなのは「土の人」なんだということです。

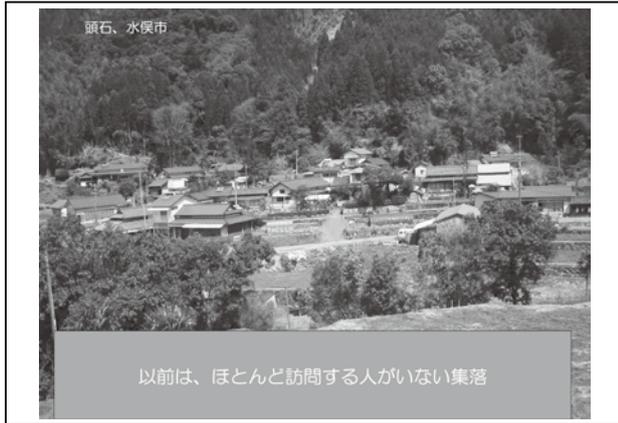
ですから、交流によって、ほかの観点とか経験とかを持つて人と交流を持つことによって、新しい考え方とか、これまで気づいてなかったような考え方とか、それからアイデアとかいうものにつながっていく、そういう仕組みだと思います。これは、水俣の市役所の職員であられた、あるいは市立水俣病資料館の館長も務められた吉本哲郎さんという方がつくられたスキームです。

地元学の実例：水俣市頭石

- 地元学の始まり：頭石地区の地域おこしの課題、市と地区住民（一部）との連携
- 元気村づくり条例：地区環境協定の締結が前提条件
- 「村まるごと生活博物館」というコンセプト
 - 「住民が自分の生活する地域の資源に気づき、好きになり、もっと大切に使う」（自治）
 - 風の人と土の人双方の気づき（発見）を核に据える地元学の取り組みへ

これはどういうことかということ、「地元学」の実例で水俣市頭石、これで「かぐめいし」と読むんですが、そこで始まった取り組みです。多くの場合は「地元学」がどう取り組まれてるかから始まると思うんですが、実はその前にとっても重要なステップを水俣市役所は踏んでました。元気村づくり条例というのをつくっていたんです。市の条例です。ですから、市長がそれを水俣市の中で既に打ち出していたんです。

それは地区ごとに、水俣は将来環境モデル都市になりたいので、すべての地区で環境協定を結ぶということが行われた地区においては、どこの地区においても、その地区の中でどういう環境地区でありたいか。つまり、どういうことにこだわりを持つか。



例えば常にごみ一つ落ちてないとか、そういうことでもいいです。あるいは川が汚れてないとかいうことでもいいと思うんですが、その地域ごとの地域住民同士でどんな地域でありたいかということをちゃんと考えて、地区環境協定というのを結んでくれたら、あなたの地域で「村まるごと生活博物館」という博物館をやっているですよという話になってるんです。

この村まるごと生活博物館に訪れた人、「風の人」ですよ、この人が「土の人」である住民の案内を受けてむら歩きをする。そのむら歩きをする仕組みが「地元学」だということで、「地元学」の部分だけ多分話をお聞きになる方が多いと思うので、今日はちょっと元気村づくり条例のことを知っておいてくださいよということで赤字にしておきました。つまり行政がそういうスキームをつくっていたということがとても重要ということです。

ではどうやるのかということで、これらの写真で紹介です。これ頭石地域です。そこで生活をしていてこの「村まるごと生活博物館」の案内人をされている方、生活学芸員という名前と呼ばれるんですけど



ど、集落の案内をしてくれます。これが頭石（かぐめいし）という名前の由来になった、結構大きいですよ、これ人間が立ってるんですけど、この石が川のそばに立ってます。いろんなところを歩けるんです。さっきのあの笑顔を見せている人たちが付いてきてくれます。ですので、訪問者はどこへ行ってもいいのです。行って、これ何、あれ何って聞くとこの人たちが教えてくれます。



この人たちが何するかというと、「風の人」例えば私が高知に来て、土佐弁のことを聞いてみたら面白いなと思ったら、土佐弁のことをメモに取っておいて、それでいろんな土佐弁を聞いてまわると。土佐弁を使ってる人たちの様子を見させてもらって、土佐弁で話をしてる人たちの写真を撮るとか、そんなことをやってると思ってください。



博物館ですから、先ほど申し上げたように博物館を訪問して村を歩いてきた人たちですので、博物館の中って、例えば高知市内にある博物館に行けば、今日は粘土を使って工作していいですよということもあるじゃないですか。そうすると、多くの場合は、工作をしたつぼを作りましたと、そのつぼを

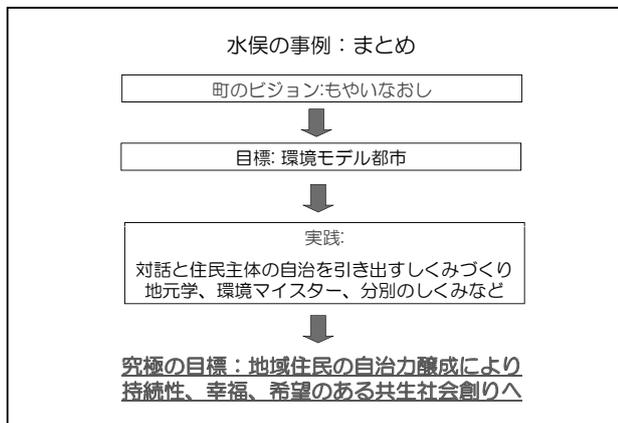
作った人が持って帰るんですよね、自分のうちに、記念とかって。

地元学の効果

- 地域内資源を発見し、住民間につながりが生まれてきた
 - 案内などで収入増
 - 地域コミュニティ基金設置
 - 地域外の人々（風の人）とつながりが強くなる
 - 3000人以上の訪問者
- 住民自治の醸成
 - 「豊かなむらづくり」農林水産大臣賞（2004、2008）。

でも、この「地元学」の手法では持って帰らないです。例えば私が、面白いな、この土佐弁面白いですよって写真撮って、土佐弁すごいとかいうタイトルで写真でこの土佐弁面白いと思いましたって書いたら、それは自分でつくったんだけど持って帰らずに、こんなこと面白いと思いましたよって高知の人に渡して帰る。そうすると、高知の人が、へーそんなふうな見方できるんだよねって言って、まさに私の目線で見つけた土佐弁についての魅力というものを自分たちのものとして参考にできる。そういうことです。

では、これってどんなインパクトがあるんですかっていうと、これを始めたその水俣の頭石っていう地域では、学者としては報告しないということもあるんですけど、この「豊かなむらづくり」という賞をもらっちゃうとか、自分たちでどういう町、村にしたいのかという、まさに内発的な発展につながるような、自分たちでこうしたいんですよねっていう気持ちがそれで生まれてくる。



**地域活力醸成の発想転換
〈3つの市民協働の実践事例〉**

- 愚痴から自治へ～あるモノ探し
〈水俣発の内発性醸成の接点づくり〉
➢もやいなおし、環境モデル都市、地元学
- 災害からの地域復興と存続への挑戦
〈住民による地域生活の評価と改善〉
➢災害後の地域復興協働活動、地域生活改善プロセス評価手法
- 幸せのモノサシづくり
〈行政主導から市民協働のまち創りへの脱皮〉
➢長久手市のしあわせ調査隊と広め隊

水俣の事例、おそらく町がどうしたいのかというモデル、それからビジョンは掲げたんだけど、実践が大事で、自分たち自身でその地域を変えていくという取り組みを一生懸命少しずつでもつくってきてる。それをつくっていくという動機を持った住民も増えていったのと同時に、それに向けて一緒に協働していくという、一緒に歩調を合わせてやっていこうという行政の姿勢ですね。それが少しずつ少しずつ育成されていったということかなと思っています。

災害からの復興と存続への挑戦

**地域復興と存続への挑戦
〈住民による地域生活の評価と改善〉**

- 中越地震災害からの復興
- 人口減少、少子高齢化の問題
- 政府への依存（ないものねだり）

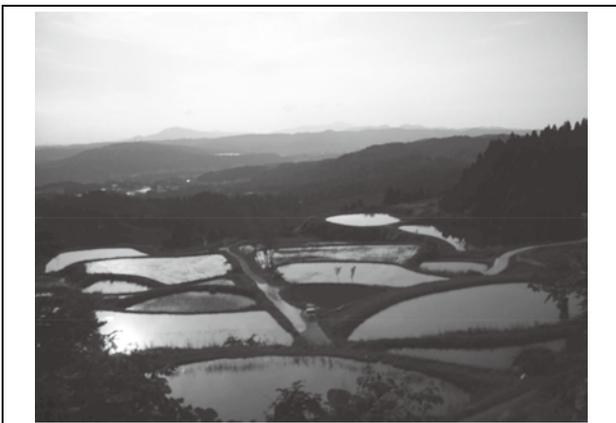
➢災害後の地域復興協働活動、地域生活改善プロセス評価手法

二つ目が災害です。災害からの地域復興と存続への挑戦というタイトルですけども、今度は新潟の事例になります。災害と人口減少・少子高齢化と政府への依存ということで、ないものねだり構造という三つの課題を抱えていた。この前、外国の研究者と話をしたときに、三つのDということで Disaster、Depopulation、それから Dependent ですね、三つのDで苛まれてる。もしかしたら、災害のところを



除けば少なくとも二つのDは日本のいろんな地域にあるんじゃないかと思ってますが、ではここでは何が起きてるのか、起きたのか。少しだけ紹介しておきたいと思います。

長岡市の一部にはなってるんですが、そこに木沢という集落がありまして、この集落での取り組みです。寒い集落なんです。こんな感じです。越後三山では、家の窓からのぞくとこういう山が見えるというわけです。私から見たら日本のブータンみたいにきれいです。訪問するたびに私が称してまして、こんな田んぼもつくられてます。この田んぼは今 95



歳くらいの人がやってる田んぼでして、お米を作りながら、かなりこの地域は鯉で有名なので料理もしているわけです。こんなふうに冬になると、高知は積もらないんですよ、こういう地域です。彼女は喜んでますけども、冬期の積雪は3メートル以上は常にあると。



ここを襲ったのが地震です。地震によって、こんな状態になりました。でも、この地震によって何が起きるかという、当然ながらも財政がないと。しかも高齢化が進んできてますから、ご多分に漏れず。そんな中であって、ではこの村に何が起きたのかということなんですが、まず村の人たちの気持ちはこういう気持ちになったというふうに、私もその村付き合いですので、彼らの当初の気持ちです。つまり自信喪失ですね、自分たちだけではやってけないんだと。もう長期でこの村を再生して維持できる、やっていこうとなつて、いつ私たち支援に行かなきゃいけないかっていうことをまず真っ先に考えていた人たち。「もう年だから」とか、「子どもたちも村出たし」とか、「学のない農家だけ」とか、こういう考え方を持っていた人たちです。



学生ボランティアとの交流

- 自信喪失と諦めの気持ちから、長期の集落再生などは、考えることもできなかった
 - 「もう年だから」、「こどもたちも村をでた」、「学のない農家だけえ」
- 大阪からの学生ボランティアとの交流で、学生の（無邪気な）「感嘆」に元気をもらう
 - 「農家って、すごいよね」、「景色がきれいだし、ご飯もおいしい」、「いいですねえ〜」

ところが、大阪大学の学生ボランティアですけれども、彼らが復興ボランティアということやってきます。大阪というのは面白いところで、いわゆる神戸・淡路の震災があって、あの体験をしている若者がいるんです、小さいときに。そして、その家族がそこで皆さんから受けたサポートというのを覚えているので、震災があったときにずっと動いていくという、今でもそういうアクションをしている人たくさんいるんです。それはすばらしい、多分大阪周辺の、特に神戸周辺の若者だと思うんですが、その成果でもある若者たちが来ました。

住民と学生ボランティアとの交流



彼らは何しに来たかという、足湯マッサージってやるんです。学生ができることってそれぐらいだねってやるんですけど、これが絶大な効果を表すんですね。足湯マッサージを受けてるうちに徐々に、話もすることなかったし、地域の人たちもなかなか話せないけど、突然来て、どこから来たのか分からない若者と会話した中でいろんな話をした。それによって、大阪の学生ボランティアというのはすごいんですよ。「すごいなあ」と何でも褒めちゃう。多分ほんとに本気で、その人たちもすごくいいなと

いうふうに思った。その言葉が実はこの人たちの自信につながった。

これって、話がもとに戻ったりするかもしれませんが、さっきの「地元学」と同じ文化です。すごいですねと言われたときに、全然すごくないと思ったことが光り輝いてくる。これ、ちなみにそういう写真です。

自主活動力の醸成

自主活動力の醸成

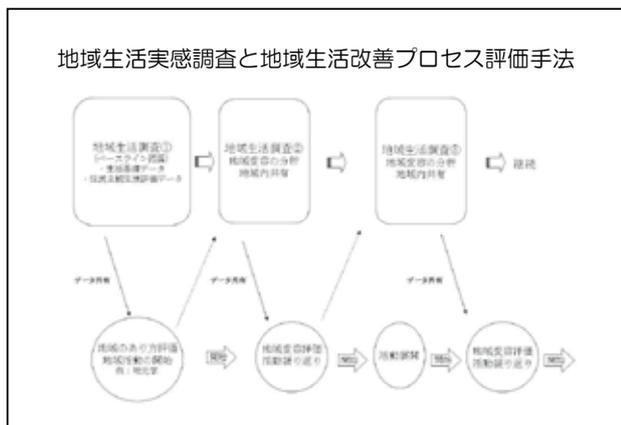
- フレンドシップ木沢（まちづくりグループ）の活動
- 名誉村民（学生とのつながり）
- 自主的な復興活動の展開
- 閉校した地元小学校をゲストハウスに
- 地域生活実感調査と地域生活改善プロセス評価手法

その後、何が起きてきたのかということですけども、この木沢集落ではもともとフレンドシップ木沢というまちづくりグループが震災の少し前にできてましたけど、このグループに例えば震災とボランティア活動を通じて魂が入ったというのかな、その後、自分たち自身でやっぱり木沢のことを考えるのは自分たちしかないといったんですね。この人たちが立ち上がります。自主的な復興活動っていつまでも、但し、復興基金っていうお金ありまして、その基金を活用して自分たちの村の中に人がやってきてくれるように、もちろん復興をしていく。例えば山の道を整備するというのもあれば、それからまた別の観点から、できればこの村の近くにも来てくれるといいね、移住してくれるといいねという、そういう希望は持っている。

学生はいまや名誉村民とかになってまして、これたくさんいます。これもすごくチャームングで魅力的な提案ですよ。つまりいわゆる名誉村民であると。残念ながら僕名誉村民にしてくれてなくて、何か僕だけいつも排除されているから学生だったほうがいいのかと思ってるんですけど、ちょっとうらや

ましいなと思っておりますけど、でも名誉村民なので、この名誉村民になった学生は社会に出てからも例えば村の祭りとかには来てます。そういうつながりもしっかりとつくり上げている。あとは自分たちの力で閉校してしまっていた地元小学校をゲストハウスにするというふうに、市の方針でそうしたんですけど、それを委託をするのを誰がやるって言ったら、彼らが手挙げたんです。それでやったんです、立派に。

最後に、この地域生活実感調査とか生活改善プロセス評価手法というのは、これは私が一緒に開発したスキーム、研究、実践的な研究としてやっている



地域活力醸成の発想転換 〈3つの市民協働の実践事例〉

- 愚痴から自治へあるモノ探し
〈水俣発の内発性醸成の接点づくり〉
➢ もやいなおし、環境モデル都市、地元学
- 災害からの地域復興と存続への挑戦
〈住民による地域生活の評価と改善〉
➢ 災害後の地域復興協働活動、地域生活改善プロセス評価手法
- 幸せのモノサシづくり
〈行政主導から市民協働のまち創りへの脱皮〉
➢ 長久手市のしあわせ調査隊と広め隊

ものなんですけど、それはちょっと割愛します。小学校これです。これが今泊まることができる「やまぼうし」というゲストハウスになってます。こんなふうにして体育館を使いますよとか、こんな小学校の教室で寝ちゃうとか、宿泊施設になってます。

幸せのモノサシづくり

最後に、モノサシですね。私が先ほどこの三つ目の事例のときはどっぷり活動してきましたということなんですけど、幸せのモノサシづくりというのをやってきました。これは、愛知県の長久手市なんですけど、皆さんの中で愛知万博に行かれた方おられますか。愛知万博の場所が長久手市と思ってください。名古屋とか豊田の近く、隣です。ここは日本一の福祉のまちをつくらうという方針を掲げて、市民と行政の協働活動で地方自治体としての新しい形を目指すといい、そして、モノサシで自分たちのまち、長久手で生活をしている私たちの生活とかあるいは長久手の社会、長久手地域が持っている豊かさを調べていってみたいという、そういうモノサシを

幸せのモノサシづくり 〈行政主導から市民協働のまち創りへの脱皮〉

- 日本一の福祉のまち＝幸福度の高いまちの実現目標
- 市民と行政の協働活動によって、地方自治体行政の新しいカタチを目指す
- モノサシで、市民生活や地域社会の豊かさを確かめ、地域や暮らしの中の課題に取り組むことで社会の質を高める

つくっていったらいいねという取り組みです。

実は長久手市って住みよさランキングですごい土地なんですよ、全国で第2位なんですね。雇用がある、文化施設が充実している、利便性が高い。でも、こういう目標を掲げた今の市長、吉田市長というんですが、吉田一平市長はこの利便性を大変問題視しています。利便性では圧倒的に日本でナンバーワンなんです。これがだめ。面白いですね。市長自らしてこれを否定しちゃう。どうしてか分かりません。いいまちの条件は、利便性はだめなんだと。ということですか。めんどくさいなと思うことがあって、それに取り組んでいくっていう地域の人たちが増えたらいいまちなんだよというんです。

愛知県長久手市

- 人口 : 56,106人 (2016年9月1日現在)
→増加する人口、15歳未満 18%強 65歳以上15%強
- 世帯数: 22,695 (2016年9月1日現在)
- 面積 : 21.54 km²
- 住みよさランキング2015 (東洋経済)
 - 全国で第2位
 - 雇用確保、利便性、文化施設充実など



その彼が掲げているのが「日本一の福祉のまち」の姿なんですけど、それはやっぱり自分たちでつくっていくまちなんだよということが全部入ってます。つながりとか安心とか緑ですね。こういうものをひっくるめて、2050年にめがけてそういうまちに必ずなっていくという、すごい長期展望を持っています。自分がそこまで市長であるということは全く意識してません、もう彼も60後半だと思うので。でも、今の段階でこういう方針に切り替えておいて、長久手の行政のあり方を変えていくというのが市長の吉田さんの取り組みです。

その中で、私何やってるかということですけども、さっきの「ながくて幸せのモノサシづくり」というものを長久手の市役所の皆さんと協働してつくろうということで活動してきました。今もう3年プラス経ってます。ここでは指標をつくるということなんですけども、「ながくて幸せのモノサシづくり」。実際には何をやったかという、調査隊とい

市民の幸福度が高い「日本一の福祉のまち」

★だれにでも役割や居場所があるまち
★お互いに助け合えることができるまち
★だれもが生きがいを持って充実した日々を過ごすことができるまち

3つのフラッグ (基本理念)

つながり 「一人ひとりに居場所と役割があるまち」

あんしん 「助けがなかったら生きていけない人は全力で守る」

みどり 「ふるさと(生命ある空間)の風景を子どもたちに」

新しいまちのかたちづくり

顔の見える範囲の関係づくり＝小学校区単位の小さな行政

「ながくて幸せのモノサシづくり」の位置付け

目指す方向 : 一人ひとりの幸福度が高い「日本一の福祉のまち」

【まちづくりのキーワード】
居場所 役割 助け合い
生きがい 充実 安心 安全
自然 地域のつながり 家族の絆 など

【市民生活のキーワード】
健康 余暇・趣味 食事 睡眠
家計 仕事 利便性 子育て
近所付き合い 防犯 防災 など

①まちづくりの目指す方向を確かめることはできないか。
②市民生活の変化を把握していくことが大切ではないか。
→これらをみんなで議論する尺度「道具=モノサシ」づくりが必要では？
→尺度は、現状把握、課題発見、過去の振り返り、打開策検討に活用

「ながくて幸せのモノサシづくり」・・・市民生活目標で！
～みんなで作る、みんなの幸せを測る道具～

うものの有志の市民、それから若手の市役所の職員の約20名のチームを立ち上げて、そのチームで、長久手ってどういうまちになりたいのか、ビジョンですね。それから、どういうまちなのか。今の現状ですね、というものをみんなで確認し合っていくと。例えば定期診断とかありますよね。そうすると、自分の体の状態がどうなっているか。あれって、体の状態がどうなってるかが目的じゃないですよ。つまり自分が健康でありたいということがあって、それを確認するための情報集めにすぎないですよ。ですから、ここで言うものもそうです。どうい

「今のながくての生活と幸せを測ろう！」
★ながくて幸せ実感調査隊

★市民生活と地域の状況を確認する「ながくて幸せ実感アンケート」の調査票づくり目的に結成
・分析、調査活用提案、報告書作成に参画！
★メンバー：有志の市民11人と若手職員10人の21人
★事務局チーム：市経営管理課、(社)地域問題研究所、
関西大学社会学部草薙孝好(アドバイザー)
★事務局主導でロンを設計したが、調査隊の意見と含意によりアンケート票を完成、分析、まとめ、市民報告へ

調査隊の活動自体が「新しいまちの形づくり」につながる！

アクション・リサーチ→ 市民自治の構築を目標

- 市民が主体的にまちづくりに取り組む地方自治の新しいカタチを創る
- 市役所と市民の協働が不可欠



[アクション・リサーチの方針]

- 長久手市の潜在力を活かす～市民の力と行政の力、両者融合
- モノサシの位置づけ～結果よりもプロセス重視
- 地域社会を動かしていく自立持続するエンジンを組み立てる

まちになりたいのかということを考えて、イメージしたときに、それになるために今の現状どうなっているか、どうなりたいかというまちづくりに関心があって、将来こういうまちになりたいですと考える市民が意外にいる。その当事者がどういうところが今大事か、どういうところを今チェックしなきゃいけないかということ「モノサシづくり」の活動としてやってきた。一番最初やってきたよということ。

ながくて幸せ実感調査隊の活動

回	年月日	内容
第1回	H25.10.28	ワークショップ「将来の暮らし長久手の姿を考えよう！」
市民まつり	H25.11.10	市民インタビュー「ながくて市民の幸せ集め」
第2回	H25.11.25	ワークショップ「幸せ実感アンケートづくりに入ろう！」
第3回	H25.12. 9	ワークショップ「今日もアンケートをつくらう！」
第4回	H25.12.20	討論「質問項目を揃ぼう！」
第5回	H26. 1.29	討論「みんなでアンケート票を揃そう！」
第6回	H26. 2. 6	討論「今日もみんなでアンケート票を揃そう！」
第7回	H26. 2.12	発表「完成したアンケート票を発表して市長に渡そう！」
第8回	H26. 5. 9	ワークショップ「集計結果から見えてくること、分析したいことを考えよう！」
第9回	H26. 7. 4	討論「幸せ実感調査隊の活動を振り返ろう！」
第10回	H26. 8.22	ワークショップ「アンケートの活用方法を考えよう！」

ちょっと回りくどい言い方で申し訳ないんですが、具体的にどうだったかという、実感調査隊というふうに彼が名づけたんですが、「ながくて幸せ実感調査隊」はワークショップ形式で10回平日の夜に集まって、みんなで一生懸命アンケートづくりからビジョンを確立、それから今の現状はどうなっているか、今果たしてまちは健康であるかどうかということを確認しよう。確認するためには、今自分たちの手に入るデータだけじゃだめなので、自分たちで手づくりでアンケート票をつくらうねということで、メンバーが中心になって調査票をつくり、そして市長の名前でデータを集めて、このメンバーが

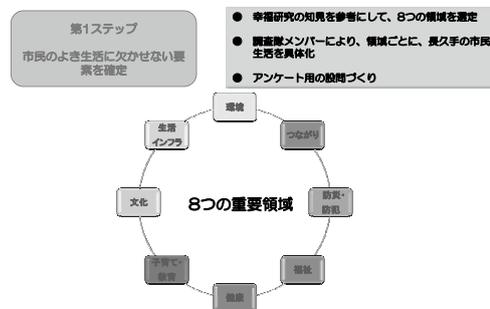
中心になって分析もしていたというプロセスの紹介です。

手探りの活動～生みの楽しさを実感～



何でこんなことをやったのかということですが、結局自分たちのまちをよくしたいなと思ったら、5のまちの状態がどうなってるかということ調べるというところから始めることが大事であって、それによって自分たちが今将来やろうという活動の何といいますかね、推進と呼びたい、というふうに聞いていただければいいでしょうか。さっきの内発性をどうやってつくり上げていこうかということ。

「ながくて幸せ実感調査」に見る協働のステップ



そのこだわりからこの活動をずっとこのメンバーとともにつくってきたんですけども、一応八つの領域というのを彼は掲げていて、環境、つながり、防災・防犯、福祉、健康、子育て・教育、文化、生活インフラで、これらの八つの領域から長久手というまちを市に出したんです。これアンケート票です。「体を動かしたり運動したり健康的な暮らしができていますか」とか、関心がある方がおられるかと思うので長久手市のホームページに入ってみてください。例えば「ながくて幸せ実感調

「ながくて幸せ実感調査」に見る協働のステップ

第2ステップ ながくて幸せ実感調査の実施

- アンケート設問票作成～依頼文・依頼
- アンケート実施（市役所）
- アンケート回収・入力（市役所・地研研）

(1) 体を動かしたり運動したりと健康的な暮らしができていますか、[Oは1つ]

1. そう思う 2. まあそう思う 3. どちらとも 4. あまりそう 5. そう思わない
思う 思い 思いがない 思いがない

(4) お住まいの地域には、子育てや子どもの教育などについて相談できる人がいる、あるいは、相談できる場所がありますか。[Oは1つ]

1. そう思う 2. まあそう思う 3. どちらとも 4. あまりそう 5. そう思わない 6. 該当しない
思いがない 思いがない 思いがない 思いがない

(4) お住まいの地域であったら「たつせ」がありますか。[Oは1つ]

※「たつせがある」とは、「たつせがよい」のお話です。「たつせが地域で役割を担い、連携し、必要とされ、ままがいを保持して長く過ごすことができる」ことを表した長久手市の用語です。

1. ある 2. まあある 3. どちらとも 4. あまりない 5. ない
思いがない 思いがない 思いがない 思いがない

「ながくて幸せ実感調査」に見る協働のステップ

第3ステップ アンケート調査の分析と発信

- アンケートデータの分析～気づきと探求
- アンケート結果のまとめ
- データの活用と発信～報告書、広報など



ながくて幸せ実感アンケートの結果

- 長久手市広報 2014年12月号より（配布資料）

● 愛知県長久手市「ながくて幸せのモノサシづくり」

<http://www.city.nagakute.lg.jp/keiei/shiawasetyousatai.html>

ながくて幸せ実感アンケート

- 18歳以上の市民5,000人を対象に、平成26年2月28日～3月24日に実施
- 有効回答数 1,871（有効回答率37.4%）
- 集計から見える主な傾向（最終報告書作成）

	主な傾向
1	長久手市民の幸福度は高い（市：7.41 国：6.41）
2	長久手市民の幸福度は健康、年収、家族の存在などが大きく影響。特に30歳代の幸福度は高く、子どもの存在が大きいと思われる
3	地域とつながりへの意識は高くなく、困ったときの相談相手は市外に多いが、地域活動に積極的な人は幸福度が高い
4	一般単身世帯の幸福度は低い（高齢単身世帯はそれほど低くない）
5	居住年数が長いほど幸福度は低くなる

「ながくて幸せ実感調査」とか、そういうのでインターネットで検索をかけると分厚いレポートが見つかるはずですよ。

アンケートの結果からいろんなことが分かってきたんですけども、これですね、「長久手実感アンケート」の結果。市民にも概略を紹介しましたし、それからこれが先ほど申し上げた分厚い報告書なんです。これらの取り組みに参加した人、調査隊メンバー、これ市民ですよ。これが結構面白かったのでもっと紹介しようと思って持ってきたんですけど、「新しいまちづくりのために、もっと『大切なこと』を準備してきたということに気づきました。

調査隊メンバーの意識変容

- 「未来に向けた新しいまちづくりとは、何から始めればよいのか」

「新しいまちづくりのために、もっと『大切なこと』を準備してきた！」ということに気づきました。従来こうした取組では、事務局や専門家、学識経験者が中心になるのですが、事務局はあえて細かな段取りを示さず、当初から市民と職員が議論し、アンケートの内容からアンケート調査の分析結果のまとめまで、いつも同じ目線で話し合ってきました。

調査隊メンバーの意識変容

同じテーマに向かい、組織や立場を超えて、市民と「胸襟を開いて」話し合うことの大切さを知る機会となりました。また、市民と行政が知恵を出し合うための場づくりであり、市民と行政がまちづくりのためのパートナーとして、信頼関係を築いていくための一つの試みであったのではないかと思います。

今後は、私たち市民が当事者感覚を持って、地域でどのように主体性を発揮した活動ができるかが問われており、さらに、従来の関係性を変えていく試みが求められているということでもあると思います。

従来の関係性を変えていくというのがやっぱり大事なんだなという感想がメモの中から出てきたので、それは一つそのまちの何といきましょう、まちのあるモノをつくっていく、小さい活動ですけれども、こういう活動の限りはレポートの成果だけにあらず、それにかかわった人の中に残ると。

3つの事例からの学び

ふと気づいたらもう3分ぐらい過ぎてますね。あと5分以内で終了しますけども、水俣からの学び。経済的豊かさの恩恵には手痛い目に遭うリスクが伴う。これはまず私たちが忘れてはいけないことですよね。ということは、これやってても常に、経済的豊かさと言ってますが、経済的な豊かさをもたらしてくれたその経済的なシステムの恩恵もあるけれども、同時に手痛い目に遭うリスクがある。つまり絶対そうなるとはいいませんけれども、そのリスクは必ずあります。では、それをどうするかということとを常に私たちは意識していなければいけない。

水俣からの学び

- 経済的豊かさの恩恵には、手痛い目にあうリスクが伴う
- 持続的なまちづくりへの方向転換には、リーダーシップや地域発の創意工夫が力になる
 - 内面社会の再構築（もやいなおし）によって、地域住民同士の信頼関係を再構築
 - 地元学で地域資源（環境、文化、伝統知識など）を見直し、活用

二つ目は、持続的なまちづくりへの方向転換には、リーダーシップや地域発の創意工夫が力になると。これは先ほどの「もやいなおし」を提唱された市長であられた人もそうですし、それから実は市長になった吉井さんを動かしたのは水俣病患者の人たちがいたんですね。その存在があったと聞いてます。それから「地元学」。

では木沢、新潟の集落ですけども、災害後の復興や再生には、住民の主体性がやはり不可欠ですね。第一に変えたいとかこの地域を維持したいとかいう気持ちですね。あと、被災者の気持ちに寄り添って、

木沢からの学び

- 災害後の復興や再生には、住民の主体性がとても大切
- 被災者の気持ちに寄り添いながら、少しずつ復興や再生に向かう気持ち呼び起こすソフトな支援が重要
 - 住民との協働実践的研究（アクション・リサーチ）活動の試み

少しずつ復興や再生に向かうというそういう気持ちを起こさせてくれるようなそういうソフトな支援。

つまりハードな支援というのは、例えばまちをつくり直すだとか橋をつくろうだとか、そういうことなんですけれども、それ以上にやはりその地域がどんな地域であろうとするかということをつくっていくんですね。それがソフトな部分なので、そこをきちっと私たちは忘れずに、むしろそこを重視しながら支援を行うと。その支援を行いつつ、住民の主体性が損なわれないというか、むしろそこが刺激されるというような取り組みが必要なんじゃないかということです。もしかしたら、そういう取り組みの中で研究者である私のような研究者が多少かわりを持って、そういう方向に向かっていく中で、力をお互いに活用し合っていくことができるんじゃないかなというふうに思います。

最後は長久手からの学び。現状に満足しない、よりよい社会の姿を追求する。まずすごく評価の高いまちなので、でもそこが実は2050年変えていかないと追いつかないよと言って、実はその吉田市長というのもGNH指標というものにあまり関心は

長久手からの学び

- 現状に満足せずに、よりよい社会の姿を追求していくこと
- 地域行政のしくみを変えていくことで、住民の持つ行政依存意識を打破することを目指す
 - 住民が自ら動いて、住みやすい地域を創っていくしくみに変えていく
- 地域社会に欠かせない住民の主体性を引き出すには、既存の行政文化（「市民のために仕事をしなさい」的な意識）の変革が不可欠
 - 「行政参加」と「参画意欲ある市民」推進が必要

持たれてないですが、ブータンのような国づくりにはすごく共感を持って方なんです。地域行政の仕組みを変えるということなので、むしろ彼が目指しているのは、住民が動いて住みやすい地域をつくらうと、そういうふうには制度を変えることに一生懸命力を尽くした人なんです。

こういう三つの事例を紹介したんですけれども、これらが私たちにどういうヒントを与えてくれるのか。これは、また別の研究者の研究の成果等も交えて勉強していきたいと思います。

ネットワークを活かした地域創り

ネットワークを活かした地域創りの大切さ

・ソーシャル物理学の知見→協働活動を地域活性の基盤

- ・社会を動かす大きな力は、市場競争にあるのではなく、人と人とのつながり（ネットワーク）を通じて協働する力の中にある

(Alex Pentland (2014) Social Physics (Penguin Books))

・よそ者の視点、学生ボランティアと村人のつながり、行政と住民の接点

- Lateral Thinking (既存概念にとらわれない思考)による発想転換、創造的アイデアのきっかけ

(Edward de Bono (1982) De Bono's Thinking Course (BBC books))

一つ目は、ネットワークを活かした地域創りがやはり欠かせないと。『ソーシャル物理学』、社会物理学、私は日本語にしたほうが良いと思ってるんですが、でも翻訳では『Social Physics』というんですけれども、この本ですね、アレックス・ペントランドという先生がいます。彼もマサチューセッツ工科大学の先生なんですけど、ペントランドは、社会を動かしていく大きな力というのは、個人がしのぎを見せる市場競争にあるんじゃないかと、実は私たち一人ひとりがどういう社会解決をするか、人とつながっていくのかということこそが実は社会を変えていく変革の力になる。

こういう言葉が残されていますけど、『Social Physics』というものはすごく面白くて、もうさまざまなデータを駆使されて、彼が研究成果をまとめられた本なんです、大学院生と一緒に。『ソーシャル物理学』というタイトルで翻訳も出てるので、よかったらお読みください。

それと同時に、よそ者の視点、学生ボランティアと村人のつながり、行政と住民の接点というのが大事ということで、三つの事例から違う接点が見えたと思うんですけど、これ私はすごく重要だと思います。それはなぜならば、アイデアにつながるという原点がそこにあると思ってるからです。

これ、Lateral Thinkingって既成概念にとらわれない思考とか仕掛けて書いてるんですけど、つまり自分がこれまで見なかった目線で同じものを見るということ。それによってハッと気づかされるアイデア出しの方法です。このLateral Thinkingっていうのはエドワード・デ・ボノっていう、これもアメリカの、最後はハーバードの先生をされたと思うんですけども、彼がもう30年以上も前に提唱されて、彼が提唱されただけじゃなくて、Lateral Thinkingこそどんどん導入っていうか、あるいは子どもたちにそういう考え方を、あるいは民間企業で働く人たちにもそういう力を備えられるよということで彼が提唱した考え方ですけど、僕はこれは今の地域をつくっていくためにすごく重要なパワーっていうか、力になっているものです。

ですから、できるだけ違う人たちと接点を持つ。その接点を持つというのが講義上だけじゃなくて、何かもうちょっと具体、その人がどういう見方をするかということまでくみ上げる。そういう機会をつくっていくということがすごく大事だと。それはおそらく地域に訪問してくれた人自身にもそれがはね返るっていう、双方に有効なんじゃないかという点も皆さんに分かっていただけたらいいかなと今私は思っています。

ちなみに、皆さんの中に『6つの帽子思考法』という本をご覧になった方いるかもしれませんが、このデ・ボノさんがそれをつくった方です。

内発的発展による持続可能な社会づくり

最後にまとめなんですけど、これ、私の考えです。まずやっぱり今私たちが依存してきた発展モデル、これはやはり何らかの形で変えていくことが間違いなく必要な時代が来ていて、持続的な社会をつくるということは、もう方向性としてはそれをと

今、求められる価値転換と行動
(共創 (co-design, co-construction) の時代)

- ・現行の発展モデルを振り返り、持続的社會につながる発展モデルに軸足を移す
- ・地元単位で、将来世代にどのような地域の宝を遺しているか、遺すべきかを定める
 - ・北米の先住民族の教訓に学ぶ(七世代先の子孫の社會を想定して、地域社會のあり方を検討し、よい地域社會に必要な資産を大切に)
- ・すべての地域で人が生活するうえで欠かせない社會的共通資本を整備する
- ・自利よりも、利他によって得られる豊かさを大切に

内山節(2011)『文明の災禍』新潮新書

につくるということが大事と思ってます。するべきじゃないかと。

二つ目は、地元単位で、将来の世代にどんな地域の宝を遺しているのか、遺すべきなのか、これをやっぱり決めていくという時代が来ていて、北アメリカのいわゆる先住民族は、定期的なアメリカ移民のグループの支援、多分そうじゃない人もたくさんいると思いますけども、7世代先の子孫の社會を考えて、地域社會、この地域どうあったらいいのということを考えて支援をすると。これってやっぱり今私たちが求められていることの一つだと。

それから、すべての地域で誰が必要だと、つまりこれがないと最低限の生活、人としての生活が踏襲できないし、それからその人が持つる力を発揮するためにも必要な生活するうえでの条件を整えて社會的共通資本を整備すべきと。

最後に、内山節さんという方がおられますよね、彼が『文明の災禍』という新書の中で、自利よりも利他によって得られる豊かさが大事ですよと言ってますということで、これらのポイントをご紹介させていただいて、皆さんにいろいろなことを考えてほしいということで今日お話をいろいろさせていただきましたが、最後の最後、夏目漱石が実は内発的な問題を鋭く語ってまして、彼が、これ確か和歌山でも演説があったと思うんですけど、講演会でこういうことを言ってます。

『現代日本の開花』で、上滑りの開花であると。「西洋の開化は内発的であって、日本の現代の開化は外発的である。ここに内発的というのは内から自然に出て発展するという意味で、ちょうど花が開くようにおのずからつぼみが敗れて花卉が外に向かう

夏目漱石の警告：上滑りの開花

- ・夏目漱石の言葉(『現代日本の開花』より)

・西洋の開化は内発的であって、日本の現代の開化は外発的である。ここに内発的と云うのは内から自然に出て発展するという意味でちょうど花が開くようにおのずからつぼみが破れて花卉が外に向かうのを云い、また外発的とは外からおつかぶさった他の力ややむをえず一種の形式を取るのを指したつもりなのです

(夏目漱石(1998)『21世紀の日本人へ』晶文社 30頁)

・すでに開化と云うものがいかに進歩しても、案外その開化の賜として吾々の受くる安心の度は微弱なもので、競争その他からいらしななければならない心配を勘定に入ると、吾人の幸福は野蛮時代とそう変わりはなさそうである

(夏目漱石(1998)『21世紀の日本人へ』晶文社 43頁)

のをいい、また外発的とは外からおつかぶさった他の力ややむをえず一種の形式を取るのを指したつもりなのです」と。さらに面白いのは、「すでに開化というものがいかに進歩しても、案外その開化の賜として吾々の受くる安心の度は微弱なもので、競争その他からいらしななければならない心配を勘定に入ると、吾人の幸福は野蛮時代とそう変わりはなさそうである」といったことを言ったりしてるんですね。

宮本常一の慧眼

二十世紀の終りには東京から大阪までの間に日本の総人口の三分の二があつて来るといふ。そうなることが自然であり、あたりまえであるのか、または日本の人口がもっと平均して国内各地に分散して住むべきか、そういうことはもっと考えられて見ていいことだし、人口を国内全体に分散させるにはどうしたらよいかももっともっと検討していいはずである。ただ成りゆきにまかせるといふのであれば、問題はいつまでたっても解決つかないであろう。せまい国土である。そのせまい国土の隅々にまで国民の意志や政治がゆきわたれば、もっと地方も生かされ、また活気もおびて来るのではないか。

(宮本常一(1967)『日本の中央と地方』未來社 272頁)

宮本常一さんってご存知ですか。もう日本の隅々まで足を運ばれた方もこんなことを言ってます。1967年に『日本の中央と地方』の中で書かれていることなんですけど、「20世紀の終わりには、東京から大阪までの間に日本の総人口の3分の2が集まってくるという」。そんな感じですよ。「そうなることが自然であり、当たり前であるのか、または日本の人口がもっと平均して国内各地に分散して住むべきか、そういうことはもっと考えられて見ていいことだし、人口を国内全体に分散させるにはどうしたらよいかももっともっと検討していいはずである。ただ成り行きに任せるというのであれば、問題

はいつまで経っても解決つかないである。狭い国土である。その狭い国土の隅々にまで国民の意志や政治が行きわたれば、もっと地方も生かされ、また活気も帯びてくるのではないか」。こんなことを話されているということだ。

最後に、私が大好きな鶴見和子さんも実はこうい

鶴見和子の多系的発展構想

- それぞれの社会および地域の人々および集団によって、固有の自然環境に適合し、文化遺産にもとづき、歴史的条件にしたがって、外来の知識・技術・制度などを照合しつつ、自律的に創出される。したがって、地球規模で内発的発展が進行すれば、それは多系的発展であり、先発後発を問わず、相互に、対等に、活発に、手本交換がおこなわれることになるであろう。
(鶴見 (1996) 9ページ)

う社会が将来としていいんだよということで、赤字だけ読んでおきます。地球規模で内発的発展が進行すれば、それは多系的発展であって、先発後発、つまり先進国・後進国を問わず、相互に、対等に、活発に、手本交換が行われることになるんじゃないかという意味です。

かなり長いとりとめの話をついばいしたと思うんですけど、やはりどういうことに私たちは目を向けて、何が優先順位なのかということ、例えば教育に関することでもっともっと私たちが議論だけでなく、大規模なアクションですね、それにつながるようなことに取り組んでいくということが求められているんじゃないかというふうに思っています。

以上で私の話をここで終了させていただきます。ご清聴ありがとうございました。



3 パネルディスカッション

パネラー 草郷 孝好 氏 (関西大学社会学部教授)
川村 幸司 氏
(れいほく田舎暮らしネットワーク事務局長)
吉澤 文治郎 氏 (土佐経済同友会代表幹事)

コーディネーター 東森 歩 氏
(ファン度レイジング・マーケティング代表、自治研究センター理事)



(東森)

それでは、第2部のパネルディスカッション、これより開幕をさせていただきますと思います。

私は、この第2部パネルディスカッションのコーディネーター、進行役を務めさせていただきます東森歩と申します。どうぞよろしくお願いたします。

そして、第1部より引き続きまして関西大学の草郷先生ではなくて、草郷さんということで親しみを込めて呼ばせていただきたいと思います。草郷さんにご登壇をいただいております。よろしくお願いたします。

そして、吉澤さんでございます。土佐経済同友会ということでおいでいただいております。

さらには、嶺北地域を代表いたしまして、川村さんということでおいでいただいております。ありがとうございます。

ということで、コーディネーターの私を含めまして、以上4名で第2部のパネルディスカッションを進行させていただきますと思います。どうぞよろしくお願いたします。

本日は、前のステージの上にお題目もございませうように、連続シンポジウムということで、第6回目「少子化の流れに抗して」ということで「人口減少時代に求められる『価値』と『豊かさ』」、このテーマで本日のシンポジウムを開催をいたしております。

おそらく来場されておられます皆様は高知県内からおいでいただいている方々ではないかと思ます。先ほどの表現でいうと「土の人」ということになるのではないかとと思ますが、私自身も含めて高知県人でございます。皆様方がそれぞれ置かれている、普段生活をされてらっしゃいます地域、地元、もしくは所属をされてらっしゃいます組織であったりとか会社、企業ですね、こういった分野分野で、では自分たちのそのフィールドにとって例えば価値とは何だろうか、あるいは豊かさっていうのはどういうところで豊かさを感じるのだろうか。

こういったところを今日のパネルディスカッションの中で、それぞれの皆様の中で答えであったりとか、この先こういうふうに進んでいけばいいんではないかなというような道筋を見つけていただければ幸いに思っております。そのヒントになりますものをこれからのお時間の中で、皆様のほうへ向けて発信をさせていただきますと思っております。

また、後半の後半で会場の皆様がお感じになってらっしゃいます質問に関しましては、質問票を配布をさせていただきます。先ほど事務局のほうからも案内がありましたけども、そちらにお書きをいただいている中から、ちょっと時間の関係もありますので幾つかピックアップをさせていただきます。ご紹介を兼ねながら登壇者の皆様に質問として当てさせていただきますと思っておりますので、よろしくお願いたします。

それでは早速入っていきたいんですけども、まずは登壇をいただいております講師、パネリストの

皆様のそれぞれの自己紹介、今簡単にお名前だけ、私のほうから申し上げましたけれども、自己紹介をしていただきたいと思います。草郷さんは先ほどパワーポイントの中で幾つか自己紹介をしていただきましたけども、ひょっとまだほかに言っていない話があったりとか、ブータン大好きということでしたので、何かそういうところでエピソードなんかもありましたら、それを踏まえて自己紹介をしていただけたらと思います。

それでは、順に草郷さんからよろしく願いいたします。

(草郷)



草郷さんって言われて大変ほっとしてるんですけど、ブータン、そうですね、何を隠してるんだらう。ブータンは実はかれこれもう15回ぐらい行ってます。GNHをブータンがつくると言ったときから付き合いがあるので長いですね。ブータンの人を1カ月間僕の大阪のほうに呼んで、そこでブータンの指標の一つである心の豊かさというのを担当した職員は、実は私が訓練したんですね。GNHのコンセプトをつくるというときもいろいろ話を聞いたり、相談があったときはそういう対応をしたので、割とブータンの人は知ってるかなというような話。

あとエピソードって何があるんですかね。何かいっぱいありすぎて、どれ挙げていいかわからないぐらいですけど、強いて言えば、私、日本を離れていた期間も長いので、それこそさっきのさまざまな見方をするよということと言うと、ほんとに世の中にはいろんな人が生存しているんだなというのが僕の生活した中の実感でもあるんです。なので、自分にとって例えば豊かな社会を築きましょうねといったときの原点というのは、本当にいい暮らしとかいっぱいあふれてるよね。そのいい暮らしがあふれてるっていうのもっともっと常に実感できたら、すごい面白いんじゃないというふうに思ってる。そういう意識で、今日みたいな話もさせてもらえますしね。

それ以上、何か秘密とか探りたいですか。

(東森)

そうですね、ブータン、私は行ったことがありませんので、ブータンのことをいろいろ質問するのはちょっと難しいんですけども、今日来られるときに何かタクシーの中で印象的なことはありましたか。

(草郷)

ああ、ありましたね。タクシーで土佐弁って面白いのと。何でしたっけ、「かわるにかわらん」ね。「かわらん」って付ければ何かこう、何と言うかな、「おそらくそうなるみたいな、そういう意味合いですよ」って言われて、「ええ」って言ってたら、最後の最後は「どろめ祭り」、そこで高知の人は1升瓶のお酒をを飲むんだけど1滴もこぼしちゃ駄目で、その横綱なる者は12秒6だったとかですね、それを楽しんでいただくと。すごい面白いなと思ったのは、言葉の中にそれほど豊かさがあるというか、その地域のよさがあるというのを知れたし、とにかくはりまや橋のあの原型は、三翠園にあるよとか、ほんとに濃密なタクシードライバーさんの案内でここにたどり着きました。

でも、ブータンもそんなようなものですよ。実際面白いひっきりなしの語りの中で、ほんとに楽しく生きるみたいな話が会話の中に見られるといい町だなとかいいところだなという実感します。ちょっと土佐弁覚えて帰らないといけないなと思ってますが、どうぞよろしく願いします。

(東森)

ありがとうございます。先ほど、草郷さんと打ち合わせをさせていただいたときに、そのタクシーのエピソード、高知龍馬空港に到着されてはりまや橋付近まで乗ってこられたそのタクシーの運転手さんが実は非常についていうお話をされたときに、ちょっと一瞬ドキッと嫌な予感がしまして、何かえらい愛想の悪いことをしちゅうがじゃないかなってちょっとドキドキしてお話を聞いてたんですけども、どうやら草郷さんのお話だとサービス精神旺盛なタクシーの運転手さんだったようで、私も同じ県民とし

てそういうお話を聞くと何か誇りに思いますし、その運転手さん、どうやら高知のすべてをその20分ぐらいの間に教えちゃろうとしたみたいですので、今ちょっとかいつまんだお話しがされなかったんですけども、かなりたくさん情報量を草郷さんに伝えながら、ここ高新文化ホールですけど、文化ホールと名前が付くところは二つあります。もう一つは県民文化ホールというところがあってですねというようにことまでお話をしてくださったようです。

そういうようなエピソードのお話をいただいたんですけども、その中で方言、地の言葉、これは土の言葉というふうに言ったほうがいいんでしょうか、とっても大事なんだなというふうに、私自身改めて土佐弁を使う人間として感じた次第でございました。

ありがとうございます。また、この後、話題の中できつと登場してくると思いますので、この言葉のことにつきまして後ほどのお楽しみにしながら、続きまして、土佐経済同友会を代表いただきまして吉澤文治郎さんにおいでいただいておりますので、土佐経済同友会も含めまして自己紹介をお願いしたいと思います。

(吉澤)



ご紹介をいただきました吉澤でございます。今は土佐経済同友会の代表幹事をやらせていただいておりますが、本業はひまわり乳業という会社を経営してまして、皆様には

大変お世話になっております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

ということで、実は土佐経済同友会というのは今から18年前に設立された経済同友会で、全国の経済同友会の中でもほんとに一番最後のほうなんです。最後のほうなので、せっかくなのでよその経済同友会とはちょっと違う団体にしたいねという思いが設立当初のメンバーにあって、その中の一つが役職定年を60歳にしようということを決めたんです。なので、私みたいな若造が代表幹事を務めているという変わった団体になっております。

そのおかげで、やっぱり全国の中でも非常に特異な動きをずっとしてきてございます。例えばそうですね、TPPの問題に関して言えば、全国の同友会の中で北海道と土佐経済同友会だけが明確に反対を表明したとかですね、いろんなことがございました。そんなこんなをやってきながら、最近は先程来少しお話があった、後でまたご説明申し上げますが、GKH (Gross Kochi Happiness) という言葉にこだわっていろんな活動をさせていただいております。

個人的には私、このすぐ近所の追手前小学校の出身でございまして、この町で生まれ育って、遊んで育ったっていう人間でございまして。いうと「土の人」なんですけど、今もやっぱり町のことがとても好きで、まちづくりとかそういったところにいろんなことにかかわっておったりするんですが、この辺の南与力町の私、町内会長を務めておまして、それからいろいろ、この間終わったんですけども「高知街ラ・ラ・ラ音楽祭」というのがあって、実はあれの初代実行委員長は私でございまして、9年間実行委員長を務めさせていただきました。

そんな町とのかかわりを持ちながら経済団体の代表という、自分にとってみたら非常に似つかわしくないような団体での役職をやっております吉澤でございます。よろしくお願いをいたします。

(東森)

ありがとうございます。吉澤さんと私、フェイスブックでもつながりを持たせていただいておりますので、普段のあの「ラ・ラ・ラ音楽祭」のこともしつかり、よく野山を駆け回ってらっしゃるご様子も普段うかがい知っているところでございます。そういうバイタリティのある吉澤さんが高知の経済界をリードしてくださっているということで、私も本業がスーパーマーケットのコンサルタントという仕事をしているかたわら、近く遠からずのところで関係性がありますので、非常に吉澤さんの後をついていく気持ちで今仕事をさせていただいているところでございます。

それでは続きまして、お山を代表するといひますか嶺北地域、私も川村さんともお会いしてもう数年

ということになりますけども、皆さんの中では初めましてという方も多分たくさんいらっしゃるのではないかと思いますので、川村幸司さん、嶺北地域を代表してということでご挨拶をお願いいたします。

(川村)



皆さん、初めまして。れいほく田舎暮らしネットワークという NPO 法人の事務局長をやっております川村幸司と申します。この NPO 法人は移住支援をしている団体とな

るんですけども、当団体の特徴といたしましては、移住者が中心になって移住支援をしている団体ということが特徴として言えるかなと思います。私自身はUターンでして、京都のほうで大学生をしております、そのままその後も就職して働いてたんですけども、子どもを授かったのをきっかけに子育てするのはどこがいいかなと考えたとき、自分の地元の土佐町がやっぱりいいよねということで夫婦ともに意見が一致しまして帰ってきました。

簡単にですけども、僕自身の紹介と今やってる活動についての資料というか、スライドを使って説明させてもらえたらと思います。



ここにちょっと映っているのが、今現在一緒に活動しているメンバーたちになります。ここに映っているのはUターン・Iターンの方たちがほとんどとなっております。かなり嶺北地域というのは県内でも有数の移住先進地というふうになっておりまして、たくさん移住者がいる地域となっております。嶺北地域は、人口としては1万2,000人ぐら

いのところですけども、こちらは平成24年からの嶺北地域の移住件数ということで過去4年間を書いてるんですけども、昨年度は127名移住してきておりまして、毎年50名以上の方が移り住んできているという状況になってきております。

活動として、いろいろと地域の魅力を発信するであつたりとかそういったことであつたりと、あと地域の方と移住者をつなぐ活動、そして移住者同士、移住者っていうのはついつい孤立しがちであつたりとか、いろんな分からないことがあつたりするので、そういう移住者同士の交流を図るというような活動を主にやってきております。

そんな中で、近年は大分その地域としての、嶺北地域というのは移住者にとっての先進地みたいなのところがありまして、割と移住者が入ってくる流れができてきているというところなんです。次の課題といたしまして、地域の魅力をより発信していく、または地域の人と一緒に何かをつくり出していくことを通じて、より地域の未来をつくっていくだったり、地域の魅力を発信していくということをやりたいねということで、ちょっと直近で活動した2件の事例を簡単に紹介させてもらえたらと思います。



こちら地元の土佐町中学校の3年生の子どもたちですけども、こちら中学校の中で総合学習というのがありまして、地域の地域貢献をテーマに1年間かけていろいろと勉強するんです。テレビでも紹介されたので、中には見た方もいらっしゃるかもしれませんが、その中学3年生たちがテーマとして挙げたのが、移住者の人たちに空き家を改修して貸してあげて、それを通じて子ども連れの家族に来ていただいて、自分たちの同級生であつたりとか子どもた

ちをもっと増やしたいということで、彼らが中心になって空き家を改修して、それを貸すというところで活動しておりました。

これに初期のメンバーである私たち田舎暮らしネットワークがかかわらせていただきまして、一緒にその空き家の改修のことを検討したりとか、そういったような活動をいたしました。すごくその中学生たちは自分たちでいろいろと考えて、ほんと僕たちがいろいろとアドバイスできたらどんどん簡単に進むんですけども、とにかくぐっと我慢することをテーマに、中学生たちが主体的に考えてやることをテーマにやっていました。ほんとに彼らがもの見事にきれいに空き家を改修してやってくれたのがすごくうれしいなと思ってまして、今週明けには早速東京のほうからちっちゃい4カ月ぐらいのお子さん連れの方がこちらの物件を見たいということで、案内する予定になっております。

次に、ここに挙げているのは土佐泡盛というものになるんですけども、土佐泡盛というのはうちの団体が中心になってプロデュースさせていただいておりまして、それがどうなのかっていうのをちょっと映像で簡単に見ただけならなということで紹介させていただきます。

・・・ 映像紹介 ・・・

ありがとうございます。こういった感じで新たに地域の特産を一緒につくっていくとかっていうのを通じながら地域の魅力を再発見して、それをまた発信することを通じて移住者を呼び込んで、地域の未来を一緒につくっていけたらなということの活動をしております。どうもありがとうございました。

社会の発酵

(東森)

ありがとうございます。今、動画を見てましたら、すぐにでも飲んでみたいというね。泡盛というのはあまり普段口にすることがない、高知県民にとってはお酒ですのでぜひ飲んでみたいという、

今気持ち満々になってきたんですけども、今お聞きいただきまして、川村さんは地域の中で移住者促進という取り組みをされてらっしゃるんですけども、その移住者促進だけではなかなか移住者がやってこないということで、もう一つ二つひねりを利かせてコンテンツを用意することで移住者の人がそこにやってくる、また目的であったりとか仕事をつくるというそういう仕掛けを取り組んでらっしゃるということで、今動画を拝見をさせていただきました。

草郷さん、多分初めて事例を今ご覧になられたんじゃないかと思いますが、今動画を見ていただいてお感じになったこと、川村さんに向けてでも結構ですので、ちょっとコメントをいただけたらと思うんですが。

(草郷)

いや、最初のコメントを東森さんに言われちゃったんで、いや、何か泡盛飲んでみたいですねというのありましたけど、一番最初の僕の印象は途中で出てきた山から見下ろすような風景ですよ、いやあ、これブータンだなと思って見ていて、ほんとに、ブータンを思い出しました。ブータンの部落風景そのものと思われました。

それで、あと、僕がすごく印象深かったのは、じゃあそのお酒で地元の中の何かをつくり上げてって、さっきのそのつながりをつなげる。つまり、つながっていく。製品もつくりながらつながりもひろげるって、何かすごく何と言うかな、いい経済活動をされてるなと思ったので、ぜひ訪問してみたいなと思いましたね。

その前に、僕は中学校の3年生の子たちの活動もすごいと思いました。実はその前に数字出ていたじゃないですか。あれ見てたらどんどん年々、特に昨年かな、27年になったら大体2人で移住するみたいなケースが増えてるんだね。それがすごくいいなと思ったら、あの子どもたちが出てきて、おお、そうかと、この若者たちが自分たちの友だちを増やそうじゃないかという形で動いてるんだなあというのもすごい印象的だし、嶺北なかなかやるなあって感じですごくいい印象を持ちましたね。

また後で話しますが、僕はあの発酵っていうのが大好きなので、麴とか杜氏とかですね、実はこれは僕の何と言うんだろう、研究ステージテーマの柱なんです。僕も泡盛つくろうかなっていうことができたらいんですけど、そうじゃないので、つまり僕の発酵は社会の発酵なんです、社会発酵みたいなのを将来につなぎたいなということ、それがちょっと頭の中に浮かんでました。

(東森)

ありがとうございます。さっき社会の発酵という、また何かキーワードになりそうな言葉が出てきましたけども、社会のいろんな例えば人であったりとか、何と言うんでしょうか、資材みたいなものであったりとか、時には資金みたいなお金かもしれないんですけども、それから情報ですね、こういったものが有機的に絡んでいってどんどんどんどん発酵の度合いを高めていくと、また有機的なものが生まれてくるというようなそんなイメージが出てくると思いますが、発酵というと度数みたいところで数字に置き換えたりとか、指標的なものに置き換えられたりするのではないかと思います、先ほど吉澤さんの自己紹介の中でGKHのお話がありましたけども、GKH、間もなくお披露目というようなタイミングになっているのではないかと思います。皆さんの中でもこの夏でしたね、7月・8月にアンケート用紙が高知県内に配布をされまして、皆さんも記入をされたご経験があるのではないかと思います、間もなくその発表を控えてらっしゃるかと思いますが、このGKHについて、吉澤さん、皆さんに、まだ公開直前ですので話せること限られるかもしれませんが、構わない限りでご紹介をいただけたらと思います。

客観評価の幸福度指標≠幸福度実感

(吉澤)

先ほどからGKH、GKHという話が出てきております。Gross Kochi Happiness（高知県民総幸福度）という、先ほどから出ております新しい指標

というのを考えてみるということで、この経済同友会もここ数年来提唱しています。そもそもなんですが、今から6年前なんですが、2010年の4月に全国の経済同友会の全国大会というのを高知でやりました。もう高知でやることになって、桂浜で400人ぐらいの機敷をつくりまして桂浜で大宴会をしたというそういうものなんですが、そのときのゲストが先ほどから話ちょっと出ましたブータンのジグメ・ティンレー首相を桂浜まで呼びまして、その前の基調講演ということで、GNH（Gross National Happiness）というお話をずっとしていただきました。テーマが「GNHの視点から始める新たな成長理念の構築」というテーマでした。

それを受けて、やはりこれからの価値観は違うぞということを考え始めたわけです。皆さんご承知のとおり、何事につけいろんな指標が最下位の高知県でございます。特に経済指標かれこれについては、1人当たりの製造品出荷額等をはじめとしていろんな指標が全国最下位ということ言われます。

それから数年前ですね、その幸せということの中で、法政大学の先生が全国の幸せ度ランキングというのを出されたことがあったんですね。それを見たら46位だったんですね。うーん、何か違うぞと。だって、草郷さんまだ行かれてないんですが、例えば平日の昼間にひろめ市場へ行ってあそこで飲んでる人たちを見てたら、どう見たって不幸せそうには見えない。みんな話を聞いていても、高知で住んでる人たちの何となくこの幸せ観というのは、東京とかと比べてもどう考えたって皆さん幸せそうに生きてるなど。なのに、これは一体何なんだろう。このギャップは一体何なんだろう。

これは、だから多分ものさしが違うんだろ、指標が違うんだろということ、それを少し突き詰めてみようということで、2013年に同友会のほうから提案を出させていただいて、2014年の8月に「高知家」の家族会議というのをつくることになりました。経済同友会が提唱したんですが、もうほんとにいろんな団体さんに入っていて、それから年齢ももう老若男女入っていて、東森さんにも入っていてやってるものがありました。2014年にできて、いろんな会合・会議そう

いったものを経て、実はその6月に1カ月間で高知県在住の満15歳以上の個人ということでアンケート調査、なんと8,911人の方にお答えをいただいたアンケート結果がまとまっております。で、それを踏まえたその指標の発表というのをこの来月10月3日に行わさせていただくことになってます。

10月3日が「土佐の日」ということを皆さんご存知でしょうか。知らなかったでしょう。いや、知らないと思います、我々が言ってるだけなんで。別に県が言うてるわけでも、誰がいうてるわけでもないんですが、我々が10月3日を勝手に「土佐の日」と決めまして、そこでその日に「高知家」の大家族会議ということで、実はこのチラシが皆さんの資料の中に入っています。その場でいろんなことを発表させていただきましますので、ぜひおいでいただきたいです。

今日はその結果について、少しだけかいつまんで報告させていただきます。今言いましたように9,000人近い方からご回答をいただいて、いろんなことが分かってきました。昔その法政大学がやったときに、日本で一番幸せな県民1位は福井県、高知県46位、47位は大阪だったんですが、これ何か違うなということで、いろんな各地の幸福度指標を調べました。

もちろん今言ったブータンとか、それから東京都の荒川区がGross Arakawa Happiness (GAH) というのをつくっておられます。そのことを踏まえて、アンケートの項目を七つのイメージにくくりました。健康・福祉、子育て・教育、産業、環境、文化、安全・安心、そして7番目が高知ならではの幸福実感の指標をつくりましょう。幸福の実感というのは多分に客観要素というの也要るんですが、客観要素プラスやっぱり多分に主観要素というのを入れて、どんなことを感じますかということでアンケートを取りました。

結果サマライズしたものがあるんですけども、面白いのはやっぱり全体の幸福度実感ということで、「あなたは高知で暮らして幸せだと感じますか」というストレートな問いかけに対して、男女合わせまして全体で、5段階評価なんです、1から5まで

という5段階評価をとりまして一番よいのが5ということなんです、それでやったときに高知県はこのアンケート結果3.77というのが幸せと感じる方の数が3.77でした。ちなみに、一概に比較はできないんですけども荒川区、先ほどGAHということでやられた荒川区でのアンケート結果では3.56だったので、少しやっぱり高知のほうが高いだろうみたいな自己満足してるところではございますが。

あと「幸福を実感を感じますか、感じませんか」というので、「大いに感じる」と「感じる」を合わせた数が全体の何%だったかということ61.8%だったんです。これは荒川区が49.8%だったのに比べて非常に高い。そんな結果が出てます。「全く感じない」とか「ほとんど感じない」という方の数が非常に少なかった。「全く感じない」と「感じない」というのを合わせた回答が6.8%ということで、非常に我々が思っていたような数字が出てきております。

そういった中で、いろんな指標を整理して結果を出してきてみたんですが、やっぱりその客観評価で見たときに、経済要因でないところにほんとの幸せがあるのではないかという仮説を立てたわけですけども、非常にそれを裏づける結果がこのアンケート結果の中に出てきております。

これをもとに今回10月3日にそれを発表させていただくんですが、それをもとに今後は、というか今までもそうだったんですけども、経済同友会というのは提言団体なものですから、そういった意味で、県とか市とかそういった行政に対していろんな提言を行う中で「背骨はGKHですよ」っていうことをずっと言い続けてます。つまり、いろんな政策をやるにしてもその目的って幸せのためでしょう。いろんな施策を行政なりが打ち出す、こんなことをやったらいいですよ、こういうことをやったらいいですよっていう提言もするんですが、でも、その後ろにあるのは背骨にあるのはGKHでしょう。いくらそれが何か経済的にいいことであつたりとか何とかであつても、その到達点が幸せでなかったらやる意味はないんじゃないですか。でも逆に、それがひょっとと経済的に「うん」みたいなことがあつたとしても、それが県民の幸せにつながることであればどんどんやったほうがいいんじゃないで

すかっていう、そういう考え方でこれからも提言を行っていかうなど。

あと、各市町村に対して各市町村が先ほどから話がありましたように、こういった幸せ度指標みたいなものをつくって、そういう行政に活かしていただきたいなというようなことを考えております。先ほど先生の講演であったように、やっぱり内発的じゃないですけど、我々、経済団体がこんなことを言うていいのかどうなんだという議論は実は最初ありました。経済団体が経済よりも違うものがあるだろうって言うていいのかって話があって、それは経済が駄目なところから逃げてるだけじゃないかみたいな話もあったりしたんですが、いや、やっぱりそうじゃないよと。経済団体であるからこそ、こういうご提言をしていって、幸せな高知をつくっていくべきなんじゃないかな。そういうことを考えてやっているところでございます。

(東森)

ありがとうございます。結構突然的に吉澤さんにGKHを説明をしてくださいというふうに振ったんですけども、かなり詳細に説明をいただきまして、準備をしてきていただいていたんだなということを実感をいたしました。草郷さん、いかがでしょうか、こういう地方でGKHのような指標をこれも内発的に自分たちで見つけていこうとしてるんですけども、こういう動きっていうのは逆にどんな

影響が例えばこの高知県内に対して、あるいは高知県民一人ひとりに対してあるというふうに考えられるものなんでしょうか。

(草郷)

自分の住んでいる地元がどうなってるのということに関心を持てる、まず一つのきっかけにはなりませんよ。それから、あとはもつと話の中でもちよつと触れましたけど、自分たち自身でつくっていく。つまり何か調べた人が全部調べたからこそ何か動けるといふか、何となくそうじゃありません。

さっきもつと平たい言い方をすればよかったですけど、例えば私も毎年、人間ドックのファンです。というとなんかみんなに変な人っていつも思われるので、あれが好きなのとかね。楽しみにしてるんですよ、いつ行こうかなとかね。内視鏡入れたりする、それが楽しみじゃないんですけど。実は一番楽しみにしてるのは、データとそれをもとにして医者と面談するじゃないですか。あそこが好きなんです。あそこで実は僕のほうから医者を品定めしてるところもあって、いい先生になると「あなた、どう感じてるの」って言うんですよ。「データ出てるけど」、そこがすごく重要で、要は聴診器持ってただけでって言ったときにとつもない悪いデータだって可能性だってあるわけですよ。それが、だから、さっきのデータばかりじゃ駄目で、その人がどういう思いから来てるのということに近い。



なので、自分が住んでる地域のことをどんどんこういうところ大事だよねということを自己設定して、自分でやっぱり血圧を測る測り方だけじゃなくて血圧だけじゃないところも測ろうとか、それはなぜか、ここは高知だから。さっきの七つ目の領域「高知家」、いいですね。「高知家」の指標何だろうと思って、もしかしたら今日の土佐弁も入ってるのかなとかね、いろいろ勘ぐってるぐらい。

つまりそれが何というかな、調べる人にとっても自分が住んでる地域が何なのかっていうことの好奇心をくすぐってくれるし、好奇心だけにとどまらず、これもやったほうがいいよねとか、やってることってもしかしたらこれに近いよねっていう感じで、自分のその社会の中の住みかを確認していくみたいなことになるんじゃない。だから、地域ベースの指標をつくるという取り組みが、その地域に住んでる住民にとってインパクトを与えるのは間違いなく大きいと僕は思います。

僕は今日触れませんでしたけど、僕も兵庫県の「ゆたかさ指標」をつくるっていうのにかかわっているんで、兵庫県は幸福度指標じゃないんです。県民の生活を豊かにするかな、よく生きると書いてますけど、ウェル・ビーイングって片仮名で書いてますね。いわゆる健康でいきいきとした生活を送れるような指標づくりです。これ2016年ですよ、たしか正式にそれをランさせたのが2013年だったんじゃないかと思うんですけど、それを兵庫県の指標として兵庫県が使ってます。それは実はブータンのGNHもブレンドして、ああいうのをつくりました。それは政策を評価するためにもそれを使っているかなきゃいけないということで兵庫県がつくってるものなので、僕のこのGKHに対する大きな期待はそういう使い方、まさに高知での活動、高知の政策とか政策の議論とかでもGKHに当てはめるとどんな効果があるのか、そういうところまでいけるとすごい楽しみだなと思って聞いてました。

僕ちょっと質問があるんですけどいいですか、吉澤さん。土佐経済同友会ですよ、何で高知経済同友会という名前にしないのか。逆に、GKHも何でGross Tosa Happinessにならなかったのか。

(吉澤)

ものすごく難しい質問です。当初つくった方がやっぱりへそ曲がりだったというところがあるんじゃないかと思いますけどね。やっぱり高知っていうと、何か高知市周辺かなみたいなところのイメージがあったのかもしれないですね。だからやっぱり、じゃなくて、高知県全体のことを考えていきたいよねというので土佐だったと思うんですよ。逆に、GKHについては特にこれも意味が多分あったわけじゃないと思いますけどね、そうですね、これはもうあまり考えずにGKHだったと思います。すみません。

(草郷)

土佐ってすごくこの高知県そのものとも被ってるわけですよ。だから、その土佐っていう表現が逆に高知県民というか、土佐人というのかな、の人にとって入り方が違ってくるんじゃないかと思ったので、ただ、高知指標にしといたほうが今の行政に対しては直接できますからこれでいいと思うので、でも、できたら何か土佐バージョンみたいなのをゲリラ的につくったら面白いなと思ったので聞きました。ありがとうございました。

(東森)

ありがとうございます。言葉って結構大事ですよ、そういう意味でいうと、土佐なのか高知なのかって、私たちもそう普段意識をせずに使い分けてるというのか、使ってるところがありますけども、どういう表現にしていくのかというののもとても大事だと思うんですが、と同時に今私、3人の皆様、草郷さんの話を聞きながら特に思ったのは、今回GKHで数字が出てくるわけですけども、それをもとにしてなりたい姿をどうイメージしていくかということで、草郷さんの資料の中に出てました、ネイティブアメリカンが7世代後の自分たちの地域社会がどうあるかっていうところをイメージをする。逆に言うと、そこに責任を持つということで、今どういうことをしないといけないかということを決めていくというのか、それに基づいて行動していくというのがネイティブアメリカンの暮らし方なんだという

ことで紹介いただいたんですけども、高知もひょっとするとそのGKHの指標が10月3日に発表されますけども、それはあくまで数字でしかありませんので、その数字の向こう側にあるじゃあ7世代後とはいいませんけども、今のその生まれてくる子どもたち、今日も子どもがどこかの病院で赤ちゃんが誕生してると思うんですけど、今いる子どもあるいは高校生や大学生、中学生も含めて、若い世代の人たちが社会に出たときにどんな高知についていうイメージが必要なんじゃないかなと思ったりもするんですけども、草郷さん、いかがでしょうか。

高知の若者に向けて、今、私たち大人ができること、あるいはしなければならぬと言ったら義務感かもしれませんけども、若い人たちと大人世代との関係性というのはどういうふうにつくっていけばいいんでしょうか。特に今回のタイトル、人口減少時代ということで、ことさら高知は人口減に非常にのみ込まれているところがありますので、その若い人に向けてっていうところでお考えがありましたらお聞かせいただけたらと思うんですが。

教育現場と地域の連携 —— 地元のよさを知る

(草郷)

若い人に向けてっていうことにとどまらないかもしれないですけど、やっぱり地元のよさを知るという機会をどんどん中学生、高校生、特に大学に出る前にそういう経験をしていくような取り組みを積極的に、意識的につくっていくというのは大事だと思うんですね。

先ほど実は兵庫の指標というのは、指標だけじゃないんですよ。あれ、実は兵庫県が1995年に震災がありましたよね。それでその後、これからの兵庫県どうするのという議論があって、そこで、それぞれ10の地域ごとに兵庫県民にインタビューしたり、どんな町にしたいかというそういうビジョンづくりしたんです。それを評価するということで、データづくりを始めたという経緯があります。

なので、今でも何やってるかという、今も続い

てまして、このビジョンの取り組み。それぞれの地域ごとに地域の取り組みをどんどん、地域のよさを活かしていきたいという取り組みしたい人集まればって言って毎年、2年に一遍か、新しいメンバーを集めているんですよ。ですから、各地域ごとに50とか60名であって、その人たちが集まると2年間かけていろんな取り組みをするんですね。

その中で但馬地域っていう、あのコウノトリで有名な豊岡とか城崎温泉があるようなところですけど、あの地域の取り組みで僕はアドバイザーでかかわってるんですけど、そこではやっぱり同じような問題が起きてるんですよ、高知と。つまり高校生が大学を受ける。京都、大阪、東京に行ったら、まさに川村さんのケースと一緒にそこで就職して、その子たちがやっぱりその地域のことを知らずに外へ出てしまうと、なかなか帰ってくるきっかけがなくなっちゃうだろうということで、その深くかかわってる立場でやってきてることの一つは、若い高校生とかがかかわれるような、そういう取り組みをやるうということでもあります。

その中で例えば一つの例を挙げると、スイーツを作ってみようとかいう取り組みが始まりまして、というのは、豊岡市の中に、ちょっと神社の名前忘れちゃったんですけども、甘いお菓子の神様、神社がまつてるでしょう。何ていったかな。その神社があるので、じゃあ豊岡の中にたくさんおいしいお菓子屋さんもあるからスイーツで何かやろうじゃないかって、今年になって。みんなで例えば提案してくれたお菓子、そのコンテストなんかをやって、それを実際に作りましょうみたいなことをやったのかな。そこで提案をしてくれた高校生の女の子は、そこで賞をもらったのかな。それがきっかけになって、彼女は大学に行くんだけど帰ってきて、大学に行くのをやめてパティシエになるって言ったのかな。とにかくその地域に根ざそうという取り組みのほうにガラッと変わる。

それ一つの例ですけども、でも、そういうこともすごく大事だし、それから僕が一つ提案してその地域でやったのは、高校生だけ50名ぐらい集めてワークショップやりました。この但馬に何があると思うっていう、そういうのをみんなで語り合っ

いや、結構いろんなものあるよねというのを実は高校生も見てるので、地元で生活をして、そのよさを確認していくとか、自分の原点とか田舎とかふるさとして言ってるけど、それがもっと自分の生活の中に入っているんだよみたいなことを経験してあげると、例えば都会に出てそこで就職をしても、何かの機会ですべてつながりを取り戻すという意識が持てるし、そういうネットワークというものが意識の中では少なくとも切れないとか、そういうものを持っていれば、どっかのタイミングで何か機会があったらそれが何か実現するという、形になるということも十分にあるでしょう。

そういう取り組みが大事じゃないかなと思ってますね。さっきの中3の活動を一つ見てもすごいなと思いました。あとは、高校でそういう地域との接点を大事にするというカリキュラムとか、そういう機会は推進したほうがいいかなというふうにも思っています。

もう一つだけ話をすると、その同じ但馬という地域にたくさん県立高校があるんですよ。その中の一つに、兵庫県立村岡高校ってあるんですけど、村岡高校の高校の子どもたちというのは地域、あれは何ていったかな、学科の名前ちょっと変えてるので正確なことは言えないんですけども、いわゆる地域発展、地域活性、地域振興を考えるようなそういう科があるんですよ。そこを卒業した高校生も知ってるんですけど、その高校は実際海士町への研修に行ったりとか、島根大や鳥取大学の先生がもう高校なのにプログラムをカットしてるぐらい、もうすごくいいカリキュラムを展開してるんです。

そこを卒業した子たちも大学へ行きますよね。大学に行くとやっぱり大阪に来たりとかするじゃないですか、東京へ行ったりとか。その子たちはどういふことをやるのかというと、卒業して自分たちが育ててもらった地域に恩返しをしたいねと言い出してNPOをつくる。自分たちの恩返しのためのNPOをつくって、その子たちの中心にやっぱりあの1人とかが戻ってきて、もう実際に村岡の中の空き家改築だとかいう活動もどんどん取り組んだりしてますよね。

なので、やっぱりその教育現場と地域がいい意味

で、地域の子と一緒に育てるっていうことをしていくのが大事じゃないかなというふうに、村岡高校の事例を見ていてそう思ったし、あとはその地域の子どもたち全体に対して、ほかのブータンの中学生・高校生に、君たちは将来どうしたいんですかって調査したことがあるんですよ、200人以上に。全く同じ質問票を使って、その但馬地域の高校生にも調査したんですよ。その中で幸せ度とか聞いてるんですけど、あなたにとっての幸せとは、何があって幸せですか。その幸せの要因というか、幸せにとっての大事なものの、お金とか友だちとか健康とかそういうのを並べといたんですけど、但馬のその高校生のうち、たった一つの高校を除いては、一番最初の夢はお金なんですよ。村岡高校に聞いたら、お金はトップ3に入らなかった。面白いでしょ。

つまり、自分が大事っていうものの目線も変わってくるということ。だから、そういうやっぱり経験をした子っていうのはかなり何が大事か、豊かさかみたいなのところからかなり違いを見せてくれるのかなというふうに、その結果から僕はそう感じました。

(東森)

ありがとうございます。高校生というのは、私も仕事柄感じるころなんですけども、20年30年ぐらい前の私がちょうど高校生に在学してたときから大分印象って変わって、高知新聞の地域面を見てましても、例えば農業高校とか商業高校とか専門性のある学校からのその情報提供というか、活動のニュースってよく新聞に出てるのをご覧にならないですか。

結構、社会的地位って言ったらちょっと語弊があるかもしれませんが、以前は高校に進学するのも普通科に進学していい大学という進学コースが理想とされていたと思いますけど、今は商業高校とか農業高校とかに進学をして、そこで今、草郷さんがおっしゃられた地域の企業と一緒に商品開発をしたりとか、地元学的なその地元の人たちと一緒にイベントを仕掛けたりとかっていうようなことをふんだんにやってたりしてですね、実は志望する生徒さんも多くなってますし、特徴的なのはそこを卒業する

高校生の求人の人気度が非常に高く、農業高校の生徒を今内定を出すのは至難の業なんですよね、企業側からすると。高嶺の花になってます。

先般は海洋高校がハワイ沖に実習船を出してマグロ漁かな、カツオ漁かな、実習しに行くというニュースも新聞に出てましたけど、大人としてもうらやましく思いました。船に乗ってハワイ沖まで行って漁が体験できる。こういうようなことで高校のあり方も変わってきてると思いますし、そこにまた先ほどの吉澤さんがおっしゃられたGKHの指標がどのように作用していくのか。また、その若い世代の人たちがなりたい姿であったりとか、高知のイメージをどういうふうに持っていくのかなというところで非常に楽しみなんじゃないかなと感じたところなんですけども。

今、草郷さんの話を聞いていまして、川村さんが非常に熱い視線を草郷さんに送ってうなずき度合いがすごかったんですけど、川村さん、何か草郷さんに聞いてみたいこととか、今感じてらっしゃることで、こういうことを今僕思ってますみたいなことがきつとあるんじゃないかと思うんですけど、よろしければ会場の皆さんにも聞かせていただけたらと思いますが、いかがでしょうか。

(川村)

感想というか、今、草郷さんの話を聞いてるところで感じたことなんですけども、高校生たちがすごく重要というか、地域の中での非常に重要な位置を占めるというか、今後重要になってくるというのはすごく同感で、うちの町自体、移住希望をする人にとって絶対必要な要件として、高校がその地域にあるかどうかというのはもう絶対的な要件として皆さん持ってるんですね。

そのうえで嶺北地域というのは幸いなことに嶺北高校というところがあるんで大丈夫なんですけど、非常に生徒数が少なくなっているというところで、ほんとに今後も持続できるかというのが課題になってるんですけども、そんな中でやはり進学っていうふうにだけで見ちゃうと、やっぱり市内のほうの有名私立高校とか追手前高校とかへ行ったほうが良いというところが一般的な考え方ですけども、それと

はまた違った価値観とかそういったものを魅力にする。先ほど東森さんも言ったように、農業高校だと非常に特別な授業をするということを通じて地域のこと、新たな高校としての嶺北高校の魅力を発信していくとか、そういったことが各地域の存続にとって重要になってくるポイントになるんじゃないかなというふうには、すごく聞いてて思いました。なので、僕たちとしてもできる範囲で、中学校の事例でもそうやって空き家発掘とかで一緒にかかわらせてもらったんですけども、高校とかとも連携とってやっていけたらなというのをお話聞いていて思いました。

(東森)

ありがとうございます。嶺北高校は確かRYN。

(川村)

そうですね。

(東森)

何の略称でしたっけ。

(川村)

レイホクユースネイバーズ

(東森)

ユースネイバーズ、たしかお料理

(川村)

料理もしてますし、レイホクユースネイバーズって嶺北の若い仲間たちという感じの言葉になるんですけども、高校生が中心になって活動してまして、自分たちが興味を持った活動をしているということで、地元産の特産品を開発するであつたりとか、あと嶺北というのは早明浦ダムがありまして、その早明浦ダムを活用していろんなアクティビティ、バスフィッシングであつたりとか自転車であつたりとか、そういったものを学生たちが企画して、それをまた軸によそから大学生を絡めて一緒に活動したりとかっていうのを企画してくれている、非常に活発な地元大好き子がいてくれて心強い限りですね。

(東森)

その同じ町に早明浦ダムという巨大構造物があるんですけども、そのまた湖面を使ったスポーツアクティビティを開発して、イベントを実施しているNPO法人の「ラブさめ」さんがいらっしゃるんですけど、そこにも高校生がかなり中心的なスタッフで入ってらっしゃって、イベント時の司会進行であったりとか受付とかっていうのをその高校生がやったりとか、あと、何かそのチラシとか露出物をつくるときにはその子たちがモデルになってたりして、イメージを変えていってるという印象が私のほうから見ても見えてきておりますんで、嶺北はその若い世代の人たちとうまくつながっていきながら、まちづくりをされていってるんじゃないかなというふうに感じてます。

そういう点では、土佐経済同友会さん、そういう若い世代の人たち、特にその高校・大学に進学するときに県外に1回出ていってしまう。そのまんまその場所で就職をして、高知に戻ってこない。逆に言うと、高知の中に進路選択の道がちょっと限られてるみたいな声もちらほら聞いたりするんですけども、そのあたりのことについては会の中で問題になってたりとか、こういうふうにしようぜということなんか話題に出てたりするんでしょうか。

(吉澤)

取り組みとしては非常にやっぱり大きな問題なので、例えば年に1回Tミーティングというのをやっております、これは高知県の大学生とかが対象なんですけども、要は高知の企業の経営者とかそういったメンバーと大学生とで1日かけていろんな忌憚のない意見交換をしながら、高知にもこんな企業があるよとか、働くとはどんなことかみたいなこととか、もっとゆるいのから始まっているいろんなことをやる。それが大学の何か授業の単位にもなるような形で取り組んでいただいているみたいなことも今始めてます。

確かに、ですから高知で育って、僕ら1回ね、例えば大学とか就職とかで県外へ出てしまうっていうのはある程度仕方がない部分はあるのかなと思っておりますが、ただ、はたと30ぐらいになって気がつ

いたとき、いや、やっぱり高知帰りたいよね、高知にはこんな仕事があったよねとか、高知でこういう暮らしができるよねというふうな思いを持って、また帰ってきてもらえる。そういう魅力はあるので、魅力をもっともっと今の子どもたちに伝えていきたい。知っておいてもらいたいというのを強く思っていて、そんなことを今やっています。

あと、話が変わるんですけども、ぜひ草郷さんに聞いておいてちょっとご意見いただきたいことがあって、さっき長久手市の話が出て、その住みよさランキングで雇用確保、利便性、文化施設充実だと、この利便性、これが駄目だって。僕、実はこれを聞きながら、うーん、そうだよなみたいことを実は僕思ったんですよ。だって、高知ってそういうのが一番、多分全国でこれを競争しようたって一番不利なところにおるわけで、じゃなくて、もう少し違う価値観というところが絶対大事だよなというふうなことをずっと思っています。

この人口減少社会で、高知というのは多分今先頭を走ってると思うんですよ。ただ、今、例えば地方創生の議論の中で出てくるのが、要はアイデアを出してきたところには金を出してあげようみたいな話がよく出てくるんですが、いや、何かそんな競争をさせてという話があるんですが、僕そうじゃないよねというところで、高知というのはそういう意味で今最先端を走ってるわけだからスペシャルなモデルをつくる。特別なこんな取り組みで全国に勝てるこんな取り組みがありますっていうの、もちろんこれは大事なんだけども、それよりもっと大事なスタンダードモデルといいますかね、日本の田舎って多かれ少なかれ高知みたいな社会状況を迎える。こういう中で、いや、こういう仕組み、こういう社会、こういう、何というか指標も含めて、そういうことをやっていくこと、つまりスタンダードモデルをつくるっていうのがまさに何か高知が取り組む、何か高知が今やるべきことなんじゃないかなみたいなことをずっと胸の中で思っていて、その辺についてご意見をちょっと賜りたいと思うんですが。

発想の転換

(草郷)

そうですね。東森さんが言われた、高校・大学で県外に進学して、そのまま就職をして戻ってこない。という問題意識があったりもしてて、やっぱりそれはほんとに重要なことで、どれだけこの地域に愛着を持ったとしても、そこで生活をするすべがどこにあるのかということが自分の中にストンと落ちるようであれば帰ってこれないですね。それはすごく大事な点なので、そこはいい解決策がどこにあるかっていうと、ちょっと首を少し傾げざるを得ない面があると。

ただ、私たちがもしかしたら誤解してるのは、その豊かさっていうのはお金でしかはかれないってことじゃないんだということをやっぱりちゃんと確かめる必要があつて、そこを誤解しちゃいけないだろうと。どういうことかと言うと、今お話聞きながら、こういうスライドをすればよかつたって何か落書きしてたんですけど、一つは、私が経済成長モデルと言ったときに、あのモデルで言ったときの一番いいといわれる生活は全部お金で評価できるんですよ。ドルドルドルってね。

でも、もう一つは、全部がドルじゃなくてもよくて円とかね、例えばこれまでのモデルで言ったら、札束が五つ並ぼうと、500万ぐらい。これがいいだろう。もう一つのモデルは札束は三つしかない。だけど、それに加えて、自分たちで取るものは取れるし、自分たちは魚もあるし、それから自分でお米も作れるし、自分が野菜作んなくても自分の周りで野菜作ってる人と交換すればいいし、何か困ったら助け合えるようにして、少しずつ自分たちのそれこそ労働提供して家直そうやとかいうこともあるし、それも全部足していくというふうにしたら、その5冊の札束よりも実は豊かかもしれないという、そういう価値観みたいなものもちゃんと伝えないと、就職先があつても来ないかもしれない。

だから、口をつくることもすごく大事だけど、そういう価値意識を変えていくことによって、もしかしたら、いや自分がいいと思っていた仕事、例え

ば高知のほうにはなかなかないかもしれないけど、それをちょっと軸を変えて、例えば三つの札束かもしれない。だけど、それと同時に、例えば川村さんが説明してくれたような移住される方たちもそこになぜ来るかっていうと、多分五つの札束だけじゃない豊かさを知ったからですよ。それを求めたいからですよ。それってすごく大事だろうと。

次に、利便性の話。これは今の話とつながっていて、長久手の人が言ってるのは、都会における利便性の話でもあるんですよ。つまり都会は利便性だと言ってますけど、どういうことかという、例えばちょっとしたことがあつてもそれを取り除くということがあるから、利便性が高いってそういうことなんですって。なので都会、例えば高知もそうかもしれないんですけど、逆に、何ていましょう、道路の真ん中に例えば穴が開いているといたら、そしたらずっと直すと。つまりその市長は市役所に頼まなくても、自分たちであれどうなつたって、普段から、ああ穴開きだしたよねっていう方って、それを直してけばいいだろうみたいなこともいっぱいあるのに、それを全部行政に押しつけてきて、きれいになってますねって言ってるのは間違ってるっていう。

つまり、それいかに、さっきのみんなで協力して、田舎のほうだとじゃあみんなで風呂つくってやろうみたいなことですよ、新しく来た人に対して。古い家に住んでるけど、じゃあおれらが助けてやろうかっていって、知らないうちにコツコツ直しちゃってるケースとかありますよね。そういうことなんですよね。

つまり、そういうものが都会では欠けてるから、それで利便性の高い都市だっていうことでランク2位とか言われても、それは本当にいい社会でいい地域じゃないよという、あれポイントなんですよ。逆に言うと、そこを売りにするっていうのはすごく大事で、そこを勘違いして、私たちの地域も全部都会のようになればいいというふうにした瞬間から、さっきの札束五つの価値観に逆に引っ張られてると。

僕は何で地元学が好きなのかという、そういう価値観の違いみたいなものをちゃんと自分の価値

観なのか、それはほかの人から受け継いでるものなのか。さっきの夏目漱石の言葉ですよ。あれをそろそろ、彼はこう言ってるんですよ、別のところでも。自分に合わせた服に替えればいいだろうと。つまり、西洋化してみんなで背広着てるのはいいんだけど、どうも似合わないような形のままで着てちゃ駄目で、それをちゃんと少しずつ修正していこうねっていうのが大事だと。今の言葉も同じ文章とか、スピーチの中で言ってます。なので、やっぱりそれって地域性とか多様性とかいうものがあって、あるいはそれあるけど、それを活かそうということだと思うので、その辺ぜひ田舎であっても、都会であっても、地方であっても、都市であっても同じかなというふうに僕は思ってるということです。

(東森)

ありがとうございます。吉澤さん、今ので大丈夫ですか。

(吉澤)

そしたらスタンダードをお願いします。

(東森)

どうぞ。スタンダードモデルについてはいかがでしょうということですね。

(草郷)

僕はスタンダードモデルっていうのは、いわゆる何というんですか、幸福な社会づくりのスタンダードモデルが必要っていうので、あれですか。

(吉澤)

いや、何かこうスペシャルなものを幾つもつくっていきましょうというのでは、何かそれぞれ考えてつくっていきましょうというのだと、もうスペシャルなとこしか何か残らないみたいなイメージがあつて。

社会的共通資本は必要不可欠

(草郷)

それは僕の今日の話の中で言えば、宇澤先生なんです。つまり社会的共通資本はすべてに必要、これは世界どこでも必要。例えば幸福度調査を仕掛けている研究者が世界中に散らばってるんですけど、その中で社会心理学者のエド・ディーナーっていうアメリカの研究者がいるんですよ。彼はスラムに住んでいる人の幸福度のチェックしてるんです。スラムに生活をしてるということはどういうことかという、はっきり言えば劣悪な衛生環境である、住んでいる家も結構大変な状態にあるとか、それから日によつては2食しか取れないとか、そういうことが日常なんですよ。でも、幸福度をさっきのような質問票で確認すると意外に高い。だったら、高いならいいじゃないかと言えるかどうかなんです。

つまり、そこで生活をしていると、子どもは5歳まで生きられるかどうか保証はない。ほぼ死んでしまうかもしれない。それからちょっとした下痢で死んでしまう。あるいはすぐにマラリアに罹る。そういう状態だけど幸福度を聞くと結構高いからそれでいいよね、じゃあないんだよっていうのが宇澤先生の論点で、どんな地域であっても、やはり幸せっていうことを尊重していても、そのいわゆる基礎状態の部分大事だからそこはきちんと整備しよう。それが宇澤先生の論点でもあるし、僕もかかわってきた国連時代にやってた仕事ですけど、人間開発っていうのはそれに近い。ですから、ほんとに生活をするために必要なものを担保するようなモデルとか、そういうスタンダードが必要というのが僕の立ち位置ですね。

でも、そのうえに立って、どういう特色を持ってその地域での生活をつくっていくのかは、さっきの実は社会発酵論なんです、これ。だから、その地域で生活をしている人たち一人ひとりが違ういい意味での菌であつて、それが発酵していく段階では、その地域をつくっていくためのその間に立って活動していく人たちが必要で、それは杜氏かもしれないとか、そのときにかき混ぜ役があれば、そういうか

き混ぜ役も必要だし、菌同士が会話をしだしたらというのがさっきのつながりだったりとかいうことで、だから、社会が発酵していくということがあって初めてその地域の多様性がつくられていくと。

そういうイメージを持ってるので、そのためには基礎となるさっきの社会的な共通資本だよっていうことで、それが提唱してるような社会づくり、これが僕から言えばそれがベースモデルなんですね。そのベースモデルを含めた指標にするのが実は重要ですね。

(東森)

いかがでしょうか。吉澤さん、大丈夫でしょうか。

私も草郷さんのお話を聞いていてふと思ったのが、例えば私はスーパーマーケット業に生業の本拠地を置いてますので特に感じるんですけど、例えばお正月の三が日お店が開いてたりするんですよね。それから24時間営業の店舗があったりとか、もちろん日曜日も営業してたりとかってして、逆にそこで働いてる人たちの労働環境というのはかなり負荷がかかっているというところで、高知らしいモデルをつくるということであれば、にわとりが先か卵が先かみたいなのところで思い切って日曜を休みにしてこうよと、あるいはお正月の三が日は少なくとも休もうと。いや、それはもちろん全国チェーンの全国資本の出店数を重ねることで経営が成り立ってる企業の論理でやる店はやっていただいているんですけども、少なくとも地場企業は休みにかかろうよというような、そこをまた高知のスタンダードモデルにするとか。

それから最近で言うと、あまり具体的な商品名挙げたらまずいかもしれませんが、「高知づくり」というビールが出ましたよね、この夏。私の印象なんですけど、非常に高知県民にとって受け入れられて愛されたような気がしてます。消費がかなりあのビールに関しては注目度とともに高まってたのではないかなと。度数も6.5%ということで何か日本の中でも指折りの度数だったみたいですけども、そういう地元の名前が付く。先ほど高知なのか土佐なのかとおっしゃってましたけど、そういう意味で言う

と、高知や土佐が冠に付いているものは積極的に愛用をするというようなことであったりとか。

あと、逆に実は高知って選挙の投票率が低いんですよ。例えばこの夏の参議院選挙は台区ということで徳島と高知が一つの選挙区になって、その結果、投票率がインターネットでちょっと調べてみますと、全国平均54%ということで全国的にもあまり高くなかったみたいなんですけど、高知は45.52%ということでこれまた全国最低を記録したということで、同じく徳島県が46%ということで、両県ともに45、46というようなところだったみたいなんですけど、スタンダードモデルで先ほどの吉澤さんの話からいうと、せめて選挙は行こうよと。もちろん国政選挙から市区町村選挙まで選挙の規模の大小はありますけど、高知人、土佐人なら選挙には行きましようみたいなこともスタンダードモデルの一つだったりするんじゃないかなと、すいません、コーディネーターちょっとしゃべりすぎてますが、そのようにちょっと思った次第であります。

今日の最初に申し上げましたお題で「人口減少時代に求められる『価値』と『豊かさ』」で、先ほどの高知らしいスタンダードモデルとはっていうようなことなんかも踏まえて、じゃあ高知県にとっての価値とか豊かさってというのは一体何なんだろうかというところを登壇しております皆様からそれぞれ、もちろん主観で結構ですし、独断と偏見の入ったものでも構わないんですけども、それぞれのお立場から、人口減少時代の価値と豊かさって高知県にとってはどういうものなんだろうかということをおっしゃってコメントをいただけたらと思います。

草郷さんからいただいても構いませんでしょうか。草郷さんは「風の人」ですので、高知にとってはこういうものなんじゃないかなというところで結構でございます。

高知にとっての「人口減少時代の価値と豊かさ」とは

(草郷)

そうですね、なかなか難しいですね。まだ4時間

ぐらいしか過ごしてないですので、そうですね、またゆっくり回ってからどこに高知らしきがあるかっていう話が語れるようになればいいんですけども、でも、やっぱりその土地その土地の地域らしきというのは、おそらくその土地に住んでる人が知ってるようで知らないところにある。なので、僕みたいな「風の人」というのは、今日のタクシーの運転手さんが僕を歓迎してくれたように、歓迎してくれると面白いので、こっちもいろいろ質問するわけですよ。そういうやりとりが簡単にできるような、そういう風通しのよさみたいなのが多分高知にはあるんじゃないかと、僕は逆にそういうタクシーの運転手さんからそう思った次第で、むしろそれが日常かなと思ってましたから。

確かに東森さんが「いや、何かちょっと失礼なことを言いませんでしたか」って言われたので、ええっ、高知の人ってみんなそんな感じなのって逆に僕のほうが驚いたようなんです。なので、もしそういう風通しのよさというものがあるのであれば、それをどんどん活かしていければ、その高知らしきを実はその中に「風の人」を常に混ぜていくということができれば、高知らしきというか、さっきのブータンの風景もすごく印象に残ってますし、今日の飛行場に入っていったときのあの印象もすばらしいものがあつたし、今日泡盛なるものも知りましたし、何ととっても日本で二つだけですか、TPP 反対というんですかね、とにかく何ていんでしょう、勇気もあるし、それから自分たちは土佐人だぜよっていうんですか、そういう土佐人らしきみたいなのが高知の魅力になってると思うし、それをどんどんみんな大事に育てていったらいいんじゃないですかね。すいません、何かあまりパシッとしたことが言えなくて。

(東森)

いえいえ。ありがとうございます。今の中で風通しのよさとか、誰とでも分け隔てなくわだかまりなく話ができるとか、「風の人」をそこに巻き込んでいけばというようなこともキーワードでおっしゃっていただきましたし、勇気を持って、勇気があるということもそうなんですけど、土佐人らしきという

私たち自身のそのアイデンティティみたいなものを確立をしていくっていうふうな、土佐人ぜよっていうことを。一つ草郷さん、どうぞ。土佐人ぜよ、何か。

(草郷)

僕が最初に高知って言われたら、やっぱりふっと浮かぶ人って実は龍馬じゃないんですよ。ジョン万次郎。やっぱりジョン万次郎はすごく日本にとって価値があるし、あのやっぱり人を生んだって高知は僕はすごかって、僕はそれちょっと言いたかったの、すいません。

(東森)

ありがとうございます。ということで、ジョン万次郎ということでございます。ありがとうございます。

続きまして、吉澤さん、どうでしょうか。土の立場として。

(吉澤)

草郷さんにはぜひちょっと後で「ひろめ」も体験していただきたいなと思うようなところもあるんですが、確かによさっていうと例えば自然であつたり食べ物であつたりっていう、これは全国いろんなところがそういう話をされます。高知は確かに食べ物も自然もすばらしいところがあつて魅力的であると思うんですけども、やっぱり高知の一番の魅力って人じゃないかなとずっと思ってまして、そういうのを体験していただくにもやっぱり「ひろめ」とかが一番いいのかなと思うんですが。

もう一つ、人っていうことでいうと、高知ってやっぱり行政がこうだからみたいところに非常に結構反発するみたいところがあるんですね。行政がつくり上げてきたものっていうのを否定したりするっていうところも結構あつたりする。

逆に、成功しているモデルっていうのはほとんどが民間が自発的にやってきたことがいつの間にか大きく成功してきているというようなものがたくさんあつて、一番典型的な例でいうと「よさこい」なんかがそうなんですけども、「よさこい祭り」という

のはもともと確かに観光客を誘致しましょうねということで、昭和20年代に阿波踊りの直前のところに日程を設定して、阿波踊り客をあわよくばみたいな感じでスタートしたんですが、最初は全国にも今でもあるような、どこにでもあるような盆踊り的なやつだったのが、ある時あるチームが突然よさこい踊りと全然関係ない音楽をトラックの荷台に楽団積んで始めて、楽しみ始めたという。それが当局の規制が全く追いつかずにどんどん、あっ、あんなことしていいんだみたいなのをほかのチームも始めて、それがダァーッと広がっていったというのが「よさこい」の歴史なんです。これはほんとに最初だから、当局の規制がおっつかなかったというのが正しい答で、どんどん皆が好き勝手なことを始めた。だから、それがゆえに今の「よさこい」になっているというのが一つあるじゃないですか。

例えば「ひろめ市場」にしたって、「ひろめ市場」は最初は地上げが途中でバブルが弾けて、あれどうするみたいなことになったときに、あそこで観光客を誘致しましょうなんて誰も考えなかったんですよ。地元の人たちが楽しめるスペースつくりますよというてつくったら、ほんとに地元の人たちが朝から酒飲んで楽しんで、その地元の人たちが朝から酒飲んで楽しんでる風景を観光客が見て、あっ、これ面白いねということで観光客さんが来だしたっていう。

基本は自分たちが楽しむことから始まってます、全部。観光のためにこんなことをしましょうとかって行政が考えてるんじゃないで、自分たちが楽しませようということから始まって、それがいつの間にか名物になったり成功したりっていうことになってるっていう、そういうのを見るにつけ、そういうことが得意な何か県民性なのかな、県なのかな。こういうところがやっぱり一番高知の誇るべきところなんじゃないかなというふうに思ってるんです。

(東森)

ありがとうございます。その粋にはまらんというのか、自由というのか、あんまり人のまねをすつとせんというようなところもありますし、それでも人と話したいという性分なんかもありますから、そう

いう人の性格を活かした何か取り組みっていうんでしょうか、そこを価値として打ち出していけるような、そんな取り組みが価値であったり豊かさにつながっていくのではないかと、そういう感じのイメージですね。ありがとうございます。

お二人の話を受けつつも、川村さん、いかがでしょうか。山間部といいますか、嶺北地域から見ての視点なのかもしれませんが、価値と豊かさというのはどういうものなんでしょうか。

(川村)

そうですね、お話先ほど聞いてて、吉澤さんのお話を聞いて、あっ、確かに高知って、考えてみれば新たな価値をつくるとか転換するというのは言われてみれば得意なのかもしれないというのを思いまして、先生の話の中で共創、ともに創る時代というふうな話がある中で価値転換とか行動とかが今後重要になってきますよということを思うと、ちょっとこれから高知の時代というか、あり得るんだなというのをちょっと今回改めて再発見できてよかったです。

その中で、確かにキーワードになるのは、高齢化が一步二歩進んでる町ですので、中山間地域はほんとにそういうのを課題として抱えてますので、それを僕たちもまさしく楽しみながら実践することを通じて、何か新しいものを生み出していい形ができたかなというふうに思いました。

ちょっとそれをさらに先生にもう一遍質問したいんですが、その中で「あるもの探し」っていうものがまず一つベースで重要だよというのがあったんですけど、その「あるもの探し」をした後に出てくる魅力、地域に隠れてる魅力っていうのは大体そうなんですけど、今までの経験上でも原石といいますか、そのまま置いといてもそれが光るものじゃない場合が多くって、それを新たに磨いたりとか変化を加えたりっていうことをするときに、何だろうな、産みの苦しみてきつとあるんじゃないかなというふうに思います。

それこそ「風の人」が来て、移住者もある意味では「風の人」だと思います。「風の人」が来て、これはほんとに魅力的だと思います。それを新たなも



のをつくりましょうというときに、全部が全部そらやろうというだけじゃなくて、もともとあったものを新たに形を変えなきゃいけないとかっていうところで、あつれきが起きる可能性ってきつとあるんじゃないかなと思います。それを乗り越えるコツというか、そういったものってどんなものがあるのかなというのをちょっと聞きたいなと思います。

地元の人が地域の魅力に 気づくことの大切さ

(草郷)

その「あるもの探し」、例えば今日水俣の話をししましたよね。地元学で最初に頭石という地域で何が起きたのかっていうと、必ずしもすぐに具体的な例えば製品とかそういうものをつくり出すという意味での資源になるわけじゃないんですよ。一番大事なのは、その地域にある魅力その地域に長く住んでる人が気づけるかどうか。あの頭石という地域で僕がすごいなと思ったのは、最初に頭石を訪問したときにいろいろお世話になったKさんというお宅の奥さんは熊本市出身なんです、いわゆる町の人。彼女はその田舎に結婚して来た。結婚した当初はすべての家に引き回されて「よろしくお願ひします」

と言ってきた。彼女は実はそのときに、いや、すごくいいところだと思ったんですって。でも、長く住み始めてみると、みんなそう思っていない。地元学を始めてみんなやると、そういう目線に触れるようになってから、すごくいいところらしいという気づきを始めたっていう、これがすごく重要だった。

その後何が起きたかという、この奥さんも中心になって、その集落の女性の皆さんが自分たちだけで弁当を作り始めた、しかも地域の食材だけで。分かりますか。だから、それがすごく大事。なので、あるものを探すと言ったときに、この地域は何なのかっていう地域の価値を自分たちの基準でもって評価をしていく。だから、悪者探しは僕から言えば、さっきの札束になるのではない、新しい自分たち自身だけのお金づくりなんです。だから、それができたらしめたもんで、その人たちが例えば泡盛かもしれないし、もしかしたら、みんなで集まりをしようじゃないかだったりするし、じゃあ高校生とこんな取り組みをしたらいいよねというのを何か村の人が提案しだすとか、そういうことなんじゃないかなというような気がします。

(東森)

ありがとうございます。川村さん。ありがとうございます。

ということで、高校生とのつながりのことにつきましてもヒントをいただいたかと思うんですけども、ちょっと会場のから質問をいただいているのを幾つか草郷さんにお答えいただけたらと思っています。

一つ目のご質問には、地方創生っていう言葉最近見かけなくなりましたねっていうところから始まっているんですけども、その地方創生を地方が考えていく中で、先ほど日本って狭い国土だっていうふうにありましたけど、どこか他県との取り合いになってくるみたいな、競争という意味では移住者もそうなんですけど、日本国内で移住してもらうとどこかが減るわけで、こちらは増えるんですけども、そういった意味で何か取り合いみたいに、獲得合戦みたいになるんじゃないかという懸念があって、そこはどういうふうに考えたらいいんでしょうかと。あるいは発想の転換が必要なんじゃないかという質問ですけど、草郷さん、いかがでしょうか。

(草郷)

オープンですね、やっぱりそこは。いや、取り合いになるかどうかということで言えば、僕、最初のほうにスライドでお見せしましたよね。高知県は実はあまり変わってない。なので、これはもう土佐人は土佐人口とかいう統計取って、土佐人を増やすという目標をつくって、取り合いっていつてもどうだろう、人口はいい、まさに活性化してるというか、発酵してる地域は必ず人がある程度増えてきますよね。だから、その発酵してる状態を持つ限り人が増えていくというふうに考えればいいと思っていて、むしろ取り合いというよりは、いい意味で過剰に生活してる都会から少しずつでも自発的に飛び出していくという流れができれば、日本全体にとってもありがたいんじゃないですかね。と僕は思うので、取り合いというよりは、いい地域をつくってそこに人を定着させて、その結果、人が伸びるといのは大いに結構という意識でいいんじゃないかなというふうに思ってますね。どうなんですかね。

(東森)

なるほど、分かりました。あんまりそのほかのこ

とは気にせず、むしろ高知に価値があれば自ずと人はやってくるという、そういう感じのあれでしょうか。

(草郷)

というか、いわゆる私が長年勉強していたときですね、勉強したときの開発研究とか開発経済というのは何言ってるかという、経済が成長すれば当然のごとく子どもの数減っていくんですよ。ですから、それはそれで当然のことですけど、問題は、だからそれが異常に地域が偏在をして、この地域ではどんどん人を生むけど外へ出てっちゃうという構造はよろしくない。だから、持続しないんですよ。なので、持続してるかどうかということがすごく重要であって、その結果的にじゃあその後、地域間でどういう人口のばらつきが出てくるのかっていうのはある意味、今日のデータもそうですけど、後追いなんですよね。でも、ある程度ビジョンを持つときには、これは修正しなければならぬって用意させるべきで、それを打ち立てたとしたら、今のモデルだとまず修正にはならないですよ。

(東森)

なるほど、分かりました。ありがとうございます。

続いての質問に移らせていただきますけど、今、事例として草郷さんにお話いただいたブータンのことから含めて、それから登壇者の皆さんがお話いただいたことも含めてなんですけども、会場の中に行政のお仕事をされていらっしゃる方がいらっしゃると思うんですが、市民参加と行政参加というふうなのが草郷さんの書籍の中にも書かれていらっしやいましたけど、行政の皆さんの例えばこういう地域活性みたいなのところのかかわり方、例えばあり方だとか姿勢とか、今までのところと何か変わるべきポイントがあるのか、もっとそうじゃないのかみたいところで、行政のあり方について、もし草郷さんの見解がありましたらお聞かせいただけたらと思います。

行政の役割り

(草郷)

ありますね。今日僕が紹介した三つの中では、水俣と長久手はもうまさに行政との関係がすごく重要な事例です。行政の役割とか行政の果たす役割、それから行政がその地域の中でどのような立場、あるいは立ち位置でその地域づくりにかかわるかというのはものすごく大事だと僕は思ってます、特に日本では。というのは、日本の場合は、私も例えばついつい先生とか教授とか言われちゃいますよね。でも、これはおそらくそういうふうと呼ぶことが習わしになってるといふことがあるからじゃないでしょうか。これと同じように会長とか、じゃないですか、ひまわり乳業の方ですねというよりは同友会会長っていうふうに言われると思うんですね、吉澤さんの場合。

行政の人たちも例えば役所の人ですねっていうふうに言われるし、例えば学校の先生ならやっぱり先生ですよ。僕は、それによってそこから先、この人がどういう人なのかということを考えない、思考停止状態に持っていくのが駄目だと言ってるのであって、行政の人も行政の役割はこうなんだというところで止まっちゃ駄目だということを言いたいんです。

行政参加というのはどういうことかと言いますと、参加をするべきだというのはもう長年、ほぼ30年ぐらい言ってきました。それから新しい公とか新しい公共ということで、もう市民がいろいろ活発に物事に取り組まなきゃいけないと言ってますよね。でも、ほんとはそうなのかという疑問を持たなきゃいけないんですね。市民参加じゃなくて、もっと市民が当たり前前に動いて行って、そこに行政と一緒にかかわっていけるならばその役割を果たしましょう。

どういうことか、ちょっと簡単に、身近な例になるかな。最近子ども食堂とかはやってますよね。子ども食堂は、僕、あれをつくった栗林さんというのは池袋の方で、実は割とよく密に話をしたりする関係があるんですね。彼女らが草の根で始めたことな

んです。でも、それが全国に広がってますよね。草の根レベルで始まっていってると思います。でも、今何が起きてるかという、行政のほうそれがはすばらしいので応援を始めたいと。予算を付けるとか、行政方につけるみたいなことに行くんじゃないかって、僕はすごく心配してるんです。

つまりこれがいい例で、市民が始めたことは行政ができることは何なのかっていう距離感を上手に持ちながら、その市民がやったことをどんと広げていくっていうことをつぶさない。僕から言わせれば、いい反抗をしてほしい。なので、行政参加するのは、そのいい反抗をするための行政としての役割は何なのかっていうことを見直す。それは水俣の事例がものすごくいい事例です。あそこは行政が変わった。それを変えていったのは、その時のやっぱりリーダーである吉井さんだし、それを一緒に支えていった行政の皆さんですね。なので、その後、そこで育った若者で市役所の職員ですけど、ほとんど市の役所にはいなかったけども、ほぼ連日自分のノートを持ち歩いて村をずっと回っていったという市の職員が育っていますね。

それはすごいことで、なぜすごいのか。行政の市役所の職員とそれから地域住民の間にいい信頼関係ができる。日本の市役所の職員の皆さんが抱えてる悩みは、多分僕は間違っていないと思うんですけども、市民って聞いたら、ああ、また何か愚痴られるとか、市民って聞いたら、何か問題を絶対通報されるよなっていう市民を思い浮かべるか、そういう経験をされてるんじゃないかなと思うんですね。でも、それは少数なんですよ、実は。だから、多数の実は言葉にはならない、上げないけど、普通に黙々と暮らしている市民がいる。その市民の人たちの仲間になる。それが僕の目指すところだったので、長久手はそういう設計をしたんです。

市の職員と一緒に入ったらいんじゃないのっていうのは僕がお話をしたことだし、それによって若い市の職員が経験してくれれば、そういう行政参加とか市民とのやっぱり友人関係、信頼関係が構築できると、自分たちの仕事ってどこを目指すのかっていうことも分かってくれる人が育つんじゃないかなと思います。なので、行政が変わるってすごく大事

なので、僕の今日の話の実実はポイントの一つだったので、その質問感謝してます。

(東森)

ありがとうございます。もう一つ質問がありまして、長久手の事例で、事務局がどうかかわり方をしたのか。そのロジ設計というのはどういう設計をしたんでしょうかという質問です、今おっしゃっていただいたところがその若い職員を入らせるとかですね、そのあたりが少し出てたんじゃないかと思えますけど、残りの時間も限られてますけど、もし簡単に解説いただけるようでしたら。

(草郷)

あれは面白かったんです。面白かったって言うっちゃあ失礼ですけど、研究者っていうと、研究者でするので論文を書くだろうとか、論文を書くだけじゃなくて、データを集めたら例えば統計解析するだろうとか等々を思い浮かべるので、行政の皆さんはいわゆる研究者に対する目、あるいは研究者が何ができるのかっていうの、これも結構固定観念があるんです。

長久手の場合も実は最初、長久手市の僕アドバイザーやってるんですけども、アドバイザーで入ったときには、長久手市の職員が僕を見る目というのは全く普通の研究者を見る目と一緒にでした。ですから、彼らは僕が入ってきたので、長久手のもしかしたら Gross Nagakute Happiness かな、そんなのつくんじゃないかって多分期待するか、そう思ったと思うんですよ。ところが、なかなか僕のほうから指標をつくるとか、のらりくらりとかかわして指標をつくりたい云々って言わないと。僕のほうでどうしようかねって話をしてるうちに、彼らのほうから、僕アドバイザーに就任したので、市民に僕が何者かを紹介したいから講演会をしたいって言ってきてたんですよ。

僕はそれを聞いたときに、もうその場で「あっ、講演会いいと思うよ」って。今日石川さんにはそういう話してなくてだったんですけど、僕は長い話得意じゃないから、今日みたいな 90 分みたいな想定だろうなと思ったので、長い話は得意じゃないので

半分ぐらい話そうかと。その後、90 分ぐらい残してもらって、僕が司会進行するから、来てもらった人たちでワークショップをやろうと言ったんです。

僕の話はブータンの話もしたし、多分ブータンの話が主だったかな、あと兵庫県の取り組みも少ししたかもしれません。残ってもらって何したかという、長久手の市民の皆さんが考える長久手の予算、長久手の未来、ビジョン、それに向けて何が課題か。将来どんな長久手だったらいいかみたいなのを好きにイラストでも何でもいいから書いてねっていうのをやってたんです。それをやって、一応全部で 10 幾つのグループできたんですけど全部発表すると。そのときにもう既に僕のリクエストは一つだけあって、市の職員が入ってほしいと。そこに交えました。

その発表を聞いた後の打合会で、僕から切り出したのは「じゃあ長久手市民すごいよね、そう思わない」って言って、その後、僕のほうの提案は「だったら、面白いから、こういう長久手のことを考える人たちを呼びかけて、みんなで議論して、そういうモノサシみたいなことを考えたらいいんじゃないの」っていうので始めた。そのときに、市の職員も若い人入れたらいいよねっていう形で始めました。

始めて、僕とそれからいわゆる事務局になった人はもちろんずっと常に連絡を取り合ったりしたんですけど、もう一つ、僕やりました。その人たちは一番最初から、そして新しく加わってくれたメンバーともやったことがあります。それは私を含めて全員がニックネームで呼び合ってます。なので、その皆さんは僕のことを「タカさん」と呼んでます。だから、あのパールベースでもう見た行政の人とか僕のことを「タカさん」って今でもそうです、担当が替わっても。その文化は僕が絶対守ると。それは大きな影響があります。つまり市民目線と行政者の目線っていう、役職を離れた本音ベースでの個人で見れる。僕はそれだけがねらだったので、それによってつくられたグループがああ長久手のグループなんですよ。

なので、設計は何になるかといったら、これまでやってきた役割をそのままの形で役者を演じないということ。役者を演じない形で、私が演じられた部

分こそが逆にみんなのできることだろうと。ほんとにそうなので。何でそんなことというかと言うと、日本はすごい国で、なぜなら教育もここまで整備しましたし、健康もある程度保てるわけですよ。しかもしっかりとした基礎教育ができてる国なんです。ほんとにそう思う。だからこそ、そこには必ず力があるので、そういう機会でブレンドしてやっていったら必ずいいものができるなと思っていましたので、思っていた以上のものをやってくれましたね。なので、事務局の役割はそういう距離感を持つ。それから、彼ら主体で物事を進めていく。

もう一つだけ行政関係で言っておきますけど、ワークショップ10回やりましたよね、5回目から6回目のところが2月、2月で1週間しか間が空いてないはずですよ。あそこは実はグループメンバー自身でもう1回集まりたいとなったので集まったんです。あの週は私が大学の入試の仕事があったので「来れないよね」って言った瞬間、僕はその行政の事務局をやってる人に、さらりと「ああ、君が僕の代わりにできるよね」って僕が振って、そこから後は彼がずっと司会をやってたんですね。そうやって少しずつスキルを磨いてみたいなことをやっていったということです。

(東森)

ありがとうございます。最後に一言ずつコメントをいただいて締めたいと思うんですけども、吉澤さんから川村さん、そして最後、草郷さんという順でいただきたいと思います。よろしくをお願いします。

(吉澤)

非常にいい時間を過ごさせていただきました。我々が今取り組んでいることを今ちょっと草郷さんのお話を聞いて、タカさんのお話を聞いて、またちょっといろいろ考えて、いい幸せな高知をつくっていきたくて決意を新たにいたしました。またよろしく願いをいたします。

(川村)

今日はどうもありがとうございます。最後にお願いというか、今回ちょっとチラシのほうで一緒に

配らせてもらったんですけども、うちの団体のほうで今クラウドファンディングという新しい寄附のものを募集してまして、今、先ほど流れた泡盛をつくったんですけども、それをさらに皆さんに手に取ってもらいやすいようにということでワンカップ形式の泡盛をつくろうとしています。こちら、移住者の方でデザイナーさんがいらっしゃるののでその方につくってもらって、ワンカップをつくろうということでやってまして、これの最初の瓶を構えるのに資本が100万円要りまして、そのクラウドファンディングを集めてるということで、こちら残り4日間でその募集が終わりになるんですけども、これで100万円達成しなかったら、今65万円集まっていますがそれが全部パーになるというような状況でして、それでもよろしければぜひご支援いただけたらなと思います。

今日出口のほうで1,000円と2,000円のほうでステッカーであったりとか、あと、今日も1合瓶の泡盛を持ってきますので、そちらのほうでの寄附等ご協力していただけたらうれしいと思います。こういったクラウドファンディングを通じて、ぜひ皆さんに泡盛を育てることに協力していただけたらなと思いますので、またよろしければぜひよろしくお願ひいたします。今日はありがとうございました。

(東森)

ありがとうございます。では最後に、草郷さん、お願いします。

(草郷)

どうもほんとに長い時間、吉澤さん、川村さん、それから東森さんといろいろな濃密な意見交換をできたことにほんとに心から感謝しています。それから、このような機会をいただいた自治研の皆さん、ほんとにありがとうございます。私もいろいろ勉強させてもらいましたし、何といっても土佐、高知というものの何というんだらう、ユニークな立ち位置というのは歴史上でもそうですけど、今日の話でもそれが十分に伝わってきたし、具体的なイメージも持つことができました。また機会を改めて、ゆっくり皆さんに知られないようにして高知の中を徘徊

してみようかなって思った次第で、もし私を見かけたら「タカさん」と呼びかけてくださいね。いいですか。やっぱり「高知家」ですよ「高知家」。「高知家」もやっぱり幸せな地域に変わるにかわらんといい感じで、土佐弁を皆さんのように。

ほんとにどうも皆さん、ありがとうございました。また、いろいろと学ばせてください。

(東森)

ありがとうございました。

以上、皆さんそれぞれにとって価値とか豊かさ、「ないものねだり」から「あるもの探し」、見つけていただけたら幸いと存じます。

以上をもちまして、第2部のパネルディスカッションを終了とさせていただきます。

(司会)

ありがとうございました。それぞれの具体的な事例、取り組み、それからお考えについて、非常に貴重な意見、お話を聞かせていただけたと思います。再度、全体で壇上の4人の方にお礼の拍手を送ってみたいと思います。よろしくお願いします。

ありがとうございます。

それでは、以上をもちまして、第6回の連続シンポジウムを終了したいと思います。